

---

# 真・恋姫 佐助忍伝～不器用な忍びと恋姫達～

くま太郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真・恋姫 佐助忍伝〜不器用な忍びと恋姫達〜

### 【Nコード】

N1797T

### 【作者名】

くま太郎

### 【あらすじ】

真田幸村に仕える佐介は幸村に手渡された銅鏡で恋姫の世界へと旅立つ。忍びとしては優しすぎ、自分の背の低さや容姿に自信をもてない佐助と恋姫達はどんな物語を紡ぎ出すのでしょうか。

## ぶろろーぐ（前書き）

作者は初の小説で駄文なりまくりです。

佐助はナ トや武双のサスケではなく、昔からの猿飛佐助よりです。

5月12日指摘があつた部分の修正を行いました。

佐介 佐助に

間違つて一話目を載せた三話目を投稿し直しました。

## ぶるるーく

男が道に行く、それだけならありふれた光景であるが、夜道を子供程の背丈しかない男が音も無く走る姿は奇異でしかなかった。

男の名は佐助、真田幸村に仕える忍びである。

大阪冬の陣が終わり数週間たったある日、幸村から新たな指令が下されるとの事で主の元へと向かっていた。

「佐助、只今到着しました」

障子越しに声を掛けるとすつと障子が開いた。

「相変わらず早いな、ここでは目立つ。先ず部屋にあがれ」

幸村と忍びである佐助では、身分が違い過ぎ同じ部屋に入る事はおろか直答も許されない時代である、自分の様な忍びを同じ人間とし扱ってくれる幸村に佐助は心酔しきっていた。

「すまないが、今すぐ少し遠くの国に出向いて欲しい、道具や資金は準備してある」

そう言うと幸村は、佐助が他国に潜入する時によく使う飴売りへ化ける為の道具と砂金一袋を手渡した。

「かしこまりました。それで今度はどちらの国へ行けばよろしいのでしょうか」

幸村は懐から古びた銅鏡を取り出し佐助に手渡した。

「行く先はその鏡が知っている」

佐助が鏡を見た瞬間、鏡より溢れ出た光が佐介を包んでいく。

「これは錢別だ。さあ、佐介助け」

幸村が放り投げた刀を佐介が受け取るのと同時にその姿も部屋から消え失せていた。

「まさか本当に佐助が消えるとは信じられませんね」いつ間にか部屋の隅にいた男が幸村に声を掛けてきた「才蔵か、秀頼様から拝借した時は俺も信じれなかったよ、違う世界に行ける鏡なんてな。秀頼様や俺が見ても何も起こらなかった鏡だが、佐助を必要とする世界

があるんだろつよ。あいつは俺の我が儘に突き合わせるには、まだ若い。丁度良かったのさ」「寂しそつにつぶやく幸村であった。

ぶろろーぐ(後書き)

文章堅いな( || | || ; )

佐助困惑する。(前書き)

こんな駄文を読んでもくれた人がいて感謝です

## 佐助困惑する。

「どこだ？こりゃ」目の前に広がっているのは、見渡す限りの荒野。役目柄色々な場所に行った事のある佐助でも初めて目にする光景である。

しかし呆気にとわれていたのは一瞬、直ぐに所持品の確認を始める。幸村からもらった刀や砂金 飴売り用の箱も中に隠した忍び道具も無事であった。

忍び刀を取り出し周囲の気配を探りながら歩き始めると、男が若い娘を取り囲んでいた、男達は顔をにやつかせ頭に黄色い布を巻きつけている、反対に娘は脅えきつているのがわかった

「厄介事は好きじゃないんだが、こんなカスを見逃したら幸村様にどやされるな」

その声で佐助に気付いた男達が

「おい、見ろよ。猿が人間の言葉を話してるぜ」「なんだチビ猿、うらやましいのか。だけどこんな上玉お前にはもつたいねーよ」

「なら幸村つてのは猿の親玉か」

男達は笑いながら刀を抜き近づいてくる。

「幸村様の名前を呼び捨てにすんじゃないねー」

そう叫ぶと佐助は男達の間を駆け抜けながら首を切りつけていく。娘の元に辿り着く頃には男達は全員倒れていた。

「さて、あんた大丈夫かい？」

「きゅーーー」

目の前で刺激的すぎる光景を見せれた娘は妙な声を上げかと思うと



その場で気を失ってしまった。

「おい、起きろ。いや頼む起きてくれ、お願い起きて下さい」  
情けない声をあげる佐助であったが、この荒野に娘を置いていくのは危険すぎ、娘を気絶したまま町に連れて行けば確実に色々疑われる。

さらに佐助を困らせているのは娘可愛いの容姿である。

自分の容姿に自信をもてず女性と接するのが苦手な佐助にしてみれば、目の前にいる可愛い娘との接するの楽しさより億劫な事である。

見知らぬ土地や賊より気絶している娘に困惑しまくる佐助であった。

佐助困惑する。(後書き)

次回からようやく原作キャラやオリキャラがでます。

## 佐助、洛陽でさらに困惑する

しばらく娘が目覚ますのを待つも一向にその気配はなく、辺りをよく見ると賊の足跡の他に娘の物と思われる足跡が残っていた。「これを辿れば街にいけるかもな」　娘はヒラヒラとした不思議な服を着ており靴も旅に不向きなものである。その結論にたどり着いてもなお娘が目覚ますのを待ちたい佐助であった。

一時間程そうしていたらどうか、深い溜め息と共に佐助は娘を抱き上げた触れた騒がれそうな場所をさけてはいるが。

佐助がだした結論は

1・娘が目覚ましたら勝手に抱き上げだ事を謝る、その際は土下座も覚悟。

2・娘の知り合いに会えたら、とりあえず理由を話して任せて去る。

3・街に着いてしまったら……人目に着く所に置いて逃げる。なんと言われ様が逃げる。

十数分もすると大きいな町が見えてきた。

その間に何度も娘を確認するも目を覚まさず溜め息をつだけの佐助であった。

活気はあるも、どこか古めかしい町で娘を置き去りにできる場所を探していると

「ちよい待ち、そのちっこい兄ちゃん」

呼び止められて振り向くと、そこには胸をサラシで巻き、外套を掛けるだけの女がいた……いた。佐助は顔真っ赤にしながら、できるだけ女を見ない様にし「な、なんでございませよか？」頭に血が登

りまくり拳動不審になりまくる佐助。

「いや、うちの知り合いの娘の帰りが遅くてなあんたが抱えてる娘が、

その娘にそっくりなんやけどちょっとばかり話を聞かせてや」  
女は武器を持ち威嚇する様に近づいてくる。

逃げるか、よし逃げまくろうと思った瞬間

「大丈夫つすよ。張ちゃんこのお兄さんは黄巾の連中から私を助けてくれたいい人すつよ」

いつの間に目を覚ましたのか、抱えていた娘が佐助の手から降りて笑顔で話始めた。

「そのちつこい兄さんが黄巾の連中をしばいたんか？なんや信じられん話やな」

「お兄さん強いつすよ。タタツタスパスのボタンだったす」  
いつの間にか、蚊帳の外となる佐助。

「何より私を抱き上げた時も張ちゃんを見た時も顔を真っ赤にする純情さんつす。悪い人なわけないつす」

娘は胸を張って答える。「あつ、お兄さん先は危ない所をありがとうだったす。私は名を閻温えんおんを字を伯検と言つつす」

閻温はオレンジ色の長い髪をチョンマゲの様にしている八重歯が可愛らしい女性であった。

「まあ閻温が嘘つく必要もないんやからうちも信じるわ、ちつこい兄さんありがとな。うちは名を張遼、字が文遠よろしゅうな」

「良かったら、お兄さんの名前をも教えて欲しいつす。命の恩人が

チビチビ言われてるのは心外っす」

賊を倒した姿を見れては、ただの飴屋では通らない。

少し考えた後に「自分の名は佐助、字はありません。後できたらこの町の名前を教えてください」

「この街は洛陽っすよ。字ない人なんて始めて聞くっす」

洛陽どこかで、聞いた事が確か幸村様が教えてくれた三国志とかいう話の中で聞いた感じが。

「なら、この街の太守様は？」

「そんなの董卓様に決まってるじゃないっすか

」

またまた困惑を深めてしまう佐助。

この後閻温に、いつから起きていたか尋ねると

「乙女の秘密を聞くのは野暮っす」とかわされますます困惑する佐助であった。

佐助外史を知る（前書き）

ようやく操作はなれましたが、駄文は治らないが（\*|\*） 見て  
くれている人や楽しみにしてくれている人いたら感謝します  
さて今回は恋姫名物のあの漢女がでます

## 佐助外史を知る

董卓の名前を聞き、佐助が少し考え事をしてると帳遼が

「なあ、閻温一度城に戻って無事な姿みせな、みんな心配してるで」  
「まだ佐助さんにお礼してないっすけど仕方ないっすね。そうだ宿に案内するっすから、待っていてほしいっす。夕方過ぎには来れるから晩御飯おごるっす」

その後、閻温は佐助を宿まで案内してくれ

「絶対待ってるんすよ。女の子との約束破る男はもてないっすよ」と大声をだしながら城へと向かっていった。

佐助は少し休んだ後現状把握も兼ねて洛陽の街を見て歩く事とした。

「街並みは唐人町に近いし、店の看板も漢語か、本当にどこに来ちまったんだんだか」

佐助が深い溜め息をつく

「そのの、男ちよつと待て」

「あらん、卑弥呼逆ナン？男の趣味かえたのん？ならご主人様は私がもらうわよん」

佐助が振り返ると、そこには二人の男がいた。二人ともほぼ半裸で下は下帯のみであった。もし幸村様の領内にいたら佐助は問答無用で捕縛するであろう。

「なんでしようか。生憎私はこの街に始めてきて道などは知りませんよ。」

「よく見る卑弥呼、この者はこの世界の者ではない。正史のしかも儂とおなじ日の本国の者じゃ。のう真田幸村に仕えてる忍び 佐助殿。それと貂蝉残念ながら儂はご主人様一筋じゃ」

「幸村様の事をご存じなのですか、ここはどこなんです？どうすれば幸村様の元に戻るのですか。教えてください」「色々とここではあれだから儂達の家に来るとよい。そこできちんと説明してやる

う

貂蝉達の家にて

「さて、まずお主に外史と言う物の物を教えてやろう。お主や幸村が住んでいたのが正史、それに対して今お主がいるは外史。外史とは人々の想いにより作られし世界、ちなみにここは三国志という物語の外史じゃ」

「ならばここは明みんになるんですか。なら海を渡れば日本なんですね  
「今は明と言うより漢のほうが正しいじゃ。それに、ここは外史じゃ。海を渡つても幸村はおらんぞ」

「ならばどうすれば戻れるのですか」

「多分お主はこの外史に選ばれたのじゃ。ならお主が何か成せぬかぎり戻れはせんだろう。」

今は見て聞いて自分が成す事できる事を見つけるのが一番じゃ」

「あつ、それとここの外史の武将達は女の子が多いのよん。それも可愛い娘ばかり。まあ私達漢女には負けるけどねん」

「それと真名というのに気をつけるのじゃ。ここの外史には真名という物があつての、ここの外史の者達は偉く大切にしているの、本人の許可なくその名で呼べば斬られても、文句は言えないからの」

「わかりました。色々ありがとうございました。正直まだ混乱していますが頑張つてみます。では失礼いたします」

そう告げて佐助は貂蝉達の家を後にした。

「ねえ、卑弥呼伝えるのあれだけでいいの？」  
「あの者なら大丈夫じゃ。きつと新しい影響をこの外史にもたらしてくるはずじゃ」



佐助外史を知る（後書き）

閻温の真名どじつどじつ…

佐助真名を知る　そしていじられる（前書き）

閻温の真名は黎にしました。　黎明のイメージで昼間（姫達）と夜（佐助）を繋ぐって意味で。

## 佐助真名を知る　そしていじられる

卑弥呼達と別れ宿に戻った佐助は、改めて所持品の確認を行う。

自分の愛用している無銘の忍び刀・棒手裏剣・くない・薬数種類・飴売り用の飴・忍び装束・幸村様から頂いた砂金と刀

「幸村様どんな国に行ってもいい様に砂金をくれたんだな。でこの刀は…」

刀を鞘から抜いた佐助の目から涙が溢れてきた、その刀は主人である幸村の佩刀の正宗であった、鞘を変えてあり抜くまで気がつかなかったが。

「この様な大事な刀を佐助のような忍びに、勿体のうございます」佐助が感激に浸っていると、突然戸が開いた。

「佐助さんいるっすか？晩御飯食べにいくっすよ。あれ、佐助さん泣いてるんっすか？もしかして私がいなくて淋しくて泣いてたんっすか？もてる女はつらいっすねー」

「え、閻温殿ち、違います。これはその目にゴミがはいりまして」「なーんだ、つまらないっすね。それと閻温殿とは硬いっす。賈の眼鏡並みに硬いっす。私の事は真名の黎で呼んでほしいっす」

「いや、しかし閻温殿真名とは大切な物なので」「大事っす。始めて男の人に教えたっす。それで真名で呼ばれないのは屈辱っす」

黎は目をウルウルとさせて佐助を見つめている。「なんや、佐助硬いのも大概にせいちゆうーねん。男が女の真名もらったらすぐに真名呼んで自分の真名を教えな」「帳遼さん、そんな事いっても、自分には真名はありませんし」

「あー、字も真名もない人間なんておるかいな。嘘ならも少しうまくつかない。親御さんが泣くで」

「泣きませんよ。自分には親がないので。それに自分の国には真名は無いです」

「嘘つす。佐助さんは私に真名を教えたくないから嘘ついてるつす。」  
とうとう黎の目からは大粒の涙がこぼれてきた。

「え闇いや黎殿。嘘なんかじゃないです。自分はずっと東にある島国の生まれです。確か今の時代なら大和という国です。それに親がないのも、本当です。自分には親の記憶がありませんから」

「いや、佐助なんか悪い事聞いてもうたな」

「黎殿じゃいやつすー。黎って呼んでくれなきゃいやつすー。真名も教えて欲しいつす」

「いや、黎今そんな空気ちゃうで」

「れ、黎わかりました。自分のを事教えます。先言つた様に自分はこの国の生まれではありません。東にある島国で真田幸村様という方に仕える忍び、こちらで言う細作をやっていました。親がいないと言つのは物心ついた時には忍びの訓練をさせていたので」

「物心ついたうちからって、嘘やる。それこそ親が黙らんやろ」

「こちらの細作はわかりませんが、忍びは赤ん坊から仕込む事が多いんですよ。大概は育てれず売られた子や戦で親をなくした子、まれにさらわれた者もいます。自分はどれか、わかりませんがね。

でも役目柄、偽名を使う事が殆どなので佐助が真名に近いかもしれないですね。それでよければ呼んでください」

「わかつたつす。黎は佐助さんを信じるつす」

「しっかし、その忍びがなんで洛陽にあるん？」「信じてもらえないかもしませんが」

佐助は幸村が近々大きな戦を抱えていた事。そして役目で呼ばれ不思議な鏡を見せられて、気付いたら、洛陽近くにいた事を話した。

「わかつたつす。でも何で佐助さんはそんな硬い話し方なんす。真名を交換したも同然なんすから、もつと親しみやすい話し方がいいつす」

「いや、その自分はこの自分な見た目ですから、女性と話すのは苦手です。ましてお二人の様な綺麗な方を前にすると緊張してしまい、すいま

せん」佐助は顔を赤くしながら答えた。

「なんや、佐助えらい純情やな」

「佐助さん可愛いつす」

逃げを得意とする忍びではあるが、この場からの逃げ方が思いつかない佐助であった。

佐助真名を知る　そしていじられる（後書き）

今の夢　週間アクセス　100超え　無理だろな（|| | || |）

佐助洛陽の面々と会う(前書き)

話がすすまない(=|=:) 早く次の段階にうつらなきや

## 佐助洛陽の面々と会う

S a i d o 黎

うー、可愛いつす。佐助さんやばいつす。霧ちゃんは、顔いかついオッサンやんとか言ってたつすけど、あの顔を真つ赤にするとこ、食堂の椅子から足が届かないでプラプラさせてる所。これがブサ可愛つすね。しかもこれで強く細作の技もあるんすよ、もうめっけもんすね。

S a i d o 佐助

宿をでて、晩飯をご馳走になりに来たのだが、品書きは読めるんだがどんな料理かまつたくわからん。値段もわからないので、とりあえず黎殿におまかせする事にした。

しかしこの椅子とかいう床几高すぎやしないか。座るのにためらっていたら店の人が、お子様様の椅子お持ちしましょうかとか言うし、それをみて黎殿や帳遼殿がまた笑うし、勘弁してくれ。

S a i d o 黎

「それで、佐助さんはこの後どうするんすか？」

「とりあえず、当面の生活費を稼いで、旅に出ようと思います。色々思う事もありますし。それで出来たら飴を売る許可をもらえる場所を教えてください」

「佐助あんた運ええで。黎は軍師もしとるが、今は内政もしとるかから直ぐに許可できると思うで」

「それはありがたい。帳遼殿、黎殿の真名ご存じだったのですか」「許可は明日お城に来て売る物見てからつす。仕事の際は閻温つす、それ以外は真名で呼んでもらってるつす。それと佐助さん黎”殿”じゃなく黎つすよ、また泣くつすよ」佐助をいじりながらも、どうすれば佐助を洛陽に留める事ができるか探る黎であった。



Saido 佐助

「女性をいきなり呼び捨てにするのは抵抗が。あー、わかりました、だから黎泣かないでください、お願いしますよ」

「佐助、幸せ者やな、黎みたいな可愛い娘にここまで思われんなんで、祝いやお前も飲み」そういうと帳遼殿が並々と酒をついだ杯を渡してきた。

「すみません、酒は飲めないですよ。つてか帳遼殿楽しんでるでしょ」

「そりや当たり前や、しかし酒飲まんなんてつまらん」

「職業病といえますか。酒で失敗した忍びなんて誰も雇いませんからね。ここのご飯美味しいので満足ですよ」

翌朝

洛陽の城は中々の大きさと警備も嚴重であつた。まああれ位なら余裕で忍び込めるがっさりだなと思ひ聞くと、帳遼殿が明日ちっこい猿みたい男が閻温を訪ねてくると言つてたらしい。

黎に連れられて来たのは、広い豪華な部屋だつた、部屋には帳遼殿の他に数人の女性がいます。

あれは確か玉座じゃないか。ならあの儂げな娘が董卓？ 暴虐非道の？

「この度は閻温を助けていただきありがとうございました。あつ私はこの街の太守をさせていだいてる董卓と申します」自称董卓はそう言つと軽く頭を下げてきた。

「まったく。月がどうしてもつて言うから会わせたんだけども僕はこんな見ず知らずの男を、月に会わせるの反対だつたんだからね」

「詠ちゃん、失礼だよー。お礼はちゃんと言わなきゃ」

「大丈夫、恋わかる。その人危険じゃない。だから安心」

「ありがとうございます。それで商売の許可は？」

「佐助さんまず売る品物を見せてほしいです」

佐助は手慣れた様子で水飴を作り、黎に手渡す、たしかこの時代はまだ甘味は少ないはず、うけると思うが

「うん、自然な甘味ってやつっすね。でも砂糖高いっすよ。商売になりにくんじゃないっすか」

「それな大丈夫です。それは麦芽糖と言いまして麦から作っているので高くはありません」

「それなら大丈夫っす、うん甘すぎずいいっすねー」

「なあ、佐助うちにもそれ食べさせてな。恋もよだれ垂らしてるし、何本か作ってな」とりあえず何本かを作り帳遼殿に手渡すと、配ってくれている。

先ほど恋と名乗った女性は夢中で食べている、なんかはむはむっと音だしてる、黎とは違う可愛さだな。とか思ってるると何故か黎が冷たい視線を浴びせてきた。

「なあ華雄お前も食べへんか」帳遼が水飴を手渡そうとすると

「いらん。そんな怪しい男の作った物など。毒が入ってるかも知れないしな。それにこんな時期に飴売りなぞ、気にくわん。まあその背の小ささでは戦えないだろうがな」

「華雄さん失礼っす。佐助さんに謝るっす、それに佐助さんは強いっす、一人で黄巾の連中を倒したっす」

「なら手合わせをして、私を認めさせるがいい」「ったく。あの武誇りは病気やで。まあうちも佐助の実力みてみたいしな」

「なんだ、臆病風に吹かれたか？ならお前の主の幸村の名も恥をか  
くぞ」

「うー、すまないっす。昨日私が佐助さんの強さを自慢したのが気に入くないんっすよ。あの馬鹿猪いつか痛い目にあわせてやるっす」

「黎、今痛い目にあわせてもいいんだよな」  
そこには顔を赤くする純情な佐助ではなく、主を呼び捨てにされ怒る忍びがいた。

## 佐助洛陽の面々と会う（後書き）

オリキキャラデータ

佐助

身長 鈴々より小さい

年齢 25

特技 猿飛の術・手裏剣術・水飴作り等

苦手 若い女性

顔 猿顔 人によっては愛嬌のある顔に見える

閻温

真名 黎

身長 150くらい

服装 ワンピースにカーディガンを羽織っている

特徴 オレンジ色の髪をチョンマゲのようゆ結っている。口癖は

「つす。洛陽で文官をしている。口調等からは目立たないが結構な口の悪さをもつ。」

## 佐助手合わせする（前書き）

ちなみに佐助の口調は

商人をに化けてる時は

私ゝ丁寧語

忍びとして女性と接する時

自分ゝ硬い口調

男性または、よっぽど親しい女性

俺ゝざつくばらんな口調です

商人は変装の為、女性は苦手で距離をおきたいからです

## 佐助手合わせする

洛陽・練武場

「うー、心配つす」

「なんや、黎。佐助が強い言ったの自分やんか」

「それでも、もし怪我したら大変つす。馬鹿猪ならいい薬になるからいいつすけど」

「馬鹿猪つて。相変わらず遠慮ないな。佐助は刀やな。身長や腕の長さがあるから懐にはいるの厳しいかもな」

佐助が華雄の動きを観察していると

「どうした佐助。動かないで。さては我が武に臆したか」

（はあ、何もわからない相手にいきなり突っ込んでく馬鹿はいないつての。たく、これだから武将つて奴らは。）

佐助が心の中で愚痴つてしていると

「なら、こつちから行ってすぐに終わらせてやる」

華雄は斧を振り回すも、適度な距離を保つ佐助にギリギリでかわされていく。

「ちよこまかと逃げおつて。そこを動くな」

「逃げなきや、怪我して終わりじゃないですか。黎も心配してるみたいだし終わらせませす」

「くつ、黙れ」

華雄が佐助との距離を埋めようと斧を片手持ちにして振りかぶった瞬間佐助も動いた。

（今のは何や。華雄の呻き声をがしたかと思うたら、地面へと叩きつけられて、佐助の刀が華雄の首筋に当てれてる）

「へう。佐助さん凄いな。恋ちゃんは何したか見えた？」

「佐助華雄の指とつて投げた」

「華雄さん。これで終わりですかい？」

「なあなあ、佐助今のどうやったん？」

「別に華雄さんのお留守になった親指をとった後に、腕の関節をきめて投げただけですよ」

「親指だけでかいな」

「人の体は突然の痛みを感じるとそこに意識が集中すんですよ。」

「へー、凄いな。流石黎が気に入るだけあるな。よしっ、次の相手はうちや。」

「駄目っす。佐助さんは疲れてるっす。」

「あれ位で疲れるわけないやろ。強い奴と戦いたいんは武人の性やて」

「みんな私の事忘れてるだろう」涙目で華雄がつぶやく。

「なんや。華雄いつまでも寝てん。邪魔やからはよどき」

「馬鹿猪早く佐助さんに謝るっす。これに懲りたら大人しくするんすね」

「へうー、詠ちゃん華雄さんいじけちゃってるよ」

「月ほつときなさい。黎じゃ、ないけどいい薬だから」

〈第二戦・帳遼〉

(帳遼殿は永卷きに近い獲物か。こりや迂闊に近づけないな)

「ふん。今度こそ佐助の負けだ、神速を誇る霞の技と偃月刀の長さなら佐助が近づける訳がない」

「馬鹿猪、いつの間に復活したっすか。」

「黎その馬鹿猪と言うのをやめる。私は馬鹿でも猪でもない華雄だ」

「自覚ないのは、むしろ哀れっすね。佐助さんにちゃんと謝ったら猪にあげてやるっす」

「ふん。霞が負けたら土下座でもしてやる、霞負ける訳がないしな」

「さすが佐助やな。きちんとうちの飛龍偃月刀の間合いをとっとる。でもこの速さについてこれはせんやろ」

帳遼は、そう言うつと一気に間合いを詰めて偃月刀を突き振り降ろし

ていき佐助は避けるのに精一杯という感じになる。

「これで終いや」

帳遼は佐助の頭上から一気に偃月刀を振り下ろしたが、練武場に響いたのはドゴツという地面をえぐる音だった。

「なっ。佐助はどこや」

「ここですよ。ここなら獲物の長さは関係ないですからね」

帳遼が目にしたのは偃月刀の柄の上に立つ佐助である。

「猿飛の異名は伊達じゃないんですよ」

佐助は柄から飛び上がり帳遼の顎に強かに蹴りをはなった。

「っ」。女にはもう少し優しくせな、もてへんで」

「大丈夫ですよ。何がどうなっても、自分が女性に好意を寄せられるなんてあり得ませんから」

「悔しいけど、今回はうちの負けや。」

「へう、佐助さんって強いね。霞ちゃんにも勝っちゃった」

「佐助強い。恋も苦戦すると思う」

「まあ、恋以上にあの鈍感男には黎が苦戦しそうやけどの」

黎は文官な筈なのに、手合わせもするのかと、いまいち理解できていない佐助であった。

佐助手合わせする(後書き)

そろそろ黄色( || | || ; ) 人達ださなきやつ



佐助許可を得る(前書き)

小説を書く難しさを実感中) - - ;

## 佐助許可を得る

閻温（黎） 執務室

「商売の許可だすうえでいくつか条件をつけさせてもらつす。その条件をのんでくれたら城内での販売も許可するつす。」

「聞かせて下さい」

「一つ目飴を売るついでに街の警備を行つて欲しいつす。人の集まる場所に行くんすから。」

二つ目は街の様子や民の声を伝えて欲しいつす。私達が相手だと警戒して本音が聞けないつすから。」

三つ目が一番重要つす。先の二つもあわせて、まず受けるかどうか聞かせて欲しいつす」

黎いや閻温は、厳しい文官としての顔を佐助にむけてきた。

「わかりました。お願い致します」

「なら、その堅苦しい喋り方をやめて欲しいつす。真名を許した相手にそんな喋り方をされたままじゃ乙女の名折れつす。」先までの厳しさは、こへやら、黎は目を潤ませて佐助を見つめてくる。

「わかった。わかったから、泣くな」

「それで、いいつす。でもさすが佐助さん、強いつすね。あの華雄や張遼に勝つんすから」

「いや、俺よりあの二人の方が実力はあるよ。まあ一番は武将と忍びの差だな」

「どうゆう事っすか」

「武将は名を重んじ、忍びは結果を重んじる。武将は名が売れてなんぼだから、どうしても勝負の内容にこだわる。俺達忍びは情けなかるうが、卑怯だろうが結果を全てにする」

「あー、張遼も勝利宣言してたっすもんね」

「そつ、あんな事言ったら次は、決めにくるのまるわかりだし、華雄は焦りから隙がありまくりだったしな」

「そんなもんなんすかね。」

「さて、働かない者食うべからず。早速稼がせてもらいに行くよ」

数十分後閻温執務室

「黎、はいるで」

「帳遼今は仕事だから喋り方に気をつけて欲しいっすよ」

「硬い事いいなや。で突然どしたん？」

「今日から佐助さんが飴売りのついでに街の警備もしてくれる事になったす。後城中にも商売にくるからよろしく頼むっす」「黎もしつかりしとるな。商売の許可を餌にただで警備させるんかいな。城に来させるのは佐助に女に慣らす為か」

「あくまで商売のついでっすよ。文官も武官も女性が殆どすっから、

無理にでも慣れて欲しいっすからね」

「後は佐助に洛陽に長くいて欲しいんやろ」

「悪いっすか。強いし頭も回る、それに優しいし真面目、手元に起きたいの当たり前っすよ」

「それは文官閻温としてやる。女の黎としては、違っんちゃうかな」

「うっ、うっ、うっ、うっ」

知らぬ間に、がーるずとーくの話題となっていた佐助であった。

佐助許可を得る（後書き）

少し幕間を書いたら ようやく展開がおこせそ

## 幕間 恋編

### 恋編

佐助の水飴は、洛陽でなかなかの評判となっていた。特に呂布こと恋は、いたく気に入ったらしく頻繁に買っていた。

「佐助。お願い」

「呂布殿、毎度ありがとうございます。そうだ、今度いつものお礼に特別な飴を差し上げたいんですが」

「期待している」

「では後程。城に行きますので」

### 数時間後城内

「呂布殿、何人に話されました」

そこには呂布の他黎、董卓、張遼、陣宮が揃っていた。

(正直この飴は手間かかるから、あまり知られたくないんだが)

「佐助さんの特別な飴を呂布だけに食べざる訳にはいかないっす」

「私も佐助さんの飴は好きですから、良かつたら食べたいです」

「なんや、佐助。おもしろい事からうちを外すのなしやで」

「佐助は最近恋殿と会いすぎなのです。二人つきりなんて絶対だめなのです」

(全員ひかねーな、こりゃ)

覚悟を決めた佐助は一度固めた飴を火鉢で柔らかくして、ある物の形へと近づけていく。

「前に呂布殿が犬を大切そうに抱いておられたので」そう言って佐助はその飴を差し出した。

「セキト…」

「上手つす。さすが佐助さんつす。でも何で普段は作らないんすか？」

「あー、これは手間かかるしな。ましてこっちはどんな生き物が人氣から知らねーしな。ここだけにしてくれ」

「へうっ。可愛いです。佐助さん良かったら私も欲しいです」

「酒のつまみにはあかんけど、うちにも一つ頼むわ」

「ねねも、恋殿と同じのが欲しいです」

その後一人一つでは、治まらずリクエストは飴が無くなるまで続けた。

「佐助ありがとう。恋の事は今度から恋でいい」

「恋って真名ですよ。良いんですか？」

「佐助いい人だから」

「なら改めてよろしくお願いします。恋殿」

フルフルツ 「恋も黎と同じ話し方がいい」  
そう言いながら、佐助の袖を掴んでくる。

「あー、わかった。よろしく頼むな恋」

コクッ

ちなみ可愛い物が大好きな華雄だが、普段佐助への態度が悪いと黎に呼ばずれず、悔し涙を流していた。



## 幕間 月編

### 月編

佐助が城内で飴を売っていると

「忙しいところすみませんが佐助さん、良かったら聞きたい事があるのですが」本当にすまなそうに、声を掛けて来たのはこの城の城主である董卓である。

「これは董卓様、では後ほど玉座の間にお伺い致します」

「あの、できたら詠ちゃん達には聞かれたくないなので私の部屋でお願いします」

### 月の部屋

「あの佐助さん座ってください」

城内で女性に強制接触させれ話をするのは大分なれたも、部屋で二人つきりになるのは緊張する為、佐助は部屋に入ってから直立不動であった。

「申し訳ありません。どうも女性と二人きりつてのは緊張しまして」

「黎ちゃんとは、あんなに仲がよろしいじゃないですか」

「そうですかね。それでお話と言うのは？」

「佐助さんのお仕えてしいた太守様の事をお伺いしたくて」

「幸村様ですか？民の事を思い、常に民と共にいられていました」  
いつの間にか、佐助は椅子の上で正座をしていた。

「きっと素晴らしい方なんですね。私は洛陽の太守である自信がなく、せめて参考になったらと」

「洛陽は素晴らしい政治がされてますよ。街の民も笑顔で感謝していますよ」

「内政は詠ちゃんや黎ちゃんのお陰ですし、治安は霞さんや恋ちゃんが頑張ってくれてますから」

「幸村様ではないんですけど、石田三成様って方が今してね。その人の政治の考え方がこうなんですよ。大一大万大吉、万民が一人のため、一人が万民のために尽くせば太平の世が訪れる。董卓様は、いつも民の事を思われていますし、文官も武官、民達も董卓様を慕っております。だから大丈夫ですよ」

「でも…」

「董卓様ご無礼を致します」そう言うと、佐助は董卓をいわゆるお姫様抱っこをして、窓から外へと飛び出した。

Saido月

佐助さんがご無礼をつて、言ったと思ったら、窓からでて、いつの間にかお城の屋根の上に来てた。

「見てください、董卓様。洛陽の街を、平和ないい街です。」

これは貴女がいて、貴女じゃなきゃ守れない平和なんですよ。それを知って下さい」

不思議と高い場所なのに、全然怖くなかった。大好きな洛陽の街が見えてるのもあるけど、佐助さんにこうしてもらっていると、すごく安心できる。

私達はしばらく洛陽の街を見た後部屋へと戻った。

「この事は賈馱殿や黎には内緒にして下さい。色々面倒になりますから」佐助さんは困った顔で頼んできた。

私はちよつと、意地悪をしたくなり、「一つ条件があります。今度から私の事は月と呼んで下さい。これは命令ですよ」

それを聞いた佐助さんは、困った顔をしていたけど黎ちゃんの名前を呼んだ時嬉しそうな顔した佐助さんも悪いんですからね。いつか私を嬉しそうに真名を呼んでもらいたいですし。

幕間 月編（後書き）

作者は石田三成が好きです（笑）

幕間 帳遼編（前書き）

今日見たら、この駄文に1650の閲覧数が…驚きと感謝です

## 幕間 帳遼編

### 洛陽の居酒屋

「くー、仕事の後の一杯は格別やな」

張遼が至福の一杯を味わっていると、居酒屋の店主が声を掛けてきた。

「これは張遼様、毎度ありがとうございます。」

「酒はうちの生きがいやからな」

「そついえば最近お一人で、いらっしゃる事が多いですね」

「華雄はのやつは飲んだら暴れてまっし、恋と飲んだらうちが破産、詠は説教してくるし、一人の方がましや」

「前は閻温様と、よくいらっしゃっていたでは、ありませんか」

「黎か、あいつは…ほれ、噂をすれば、なんとかやらや」

張遼が顔を向けたほうには

「佐助さん、ここの居酒屋はご飯もつまいんすよ。早く行くつすよ」

「黎、焦らなくても居酒屋は逃げないし、俺もガキじゃないんだから、手を引つ張らなくても大丈夫だって」

「せつかく佐助さんがご飯に誘ってくれたんす。早く座るつす」

張遼はニヤニヤした顔で、それを見て

「黎の奴は、最近ずっと佐助さん佐助さんでうちはあてられっぱなしやて」

（まったく、変われば変わるもんやな）

佐助がくる前の洛陽

「さて、仕事も終わったし、黎飲みに行くで」

「またっすか？昨日飲みに行ったばかりじゃないっすか」

「一人で、飲んでもつまらんやん。頼むわ。なー」

「たく。仕方ないっすね。」

洛陽の居酒屋

「誘っておいて、なんやけど、うちらも寂しいの」

「なんですか？」

「侍女の連中みても、やれどの武官が格好いいやら、あの文官は優しいやらって騒いでるやん」

「それが、どうしたんすか？」

「世の中、女と男の二つやで。黎はさびしゅうないんか？」

「興味ないっす」

「少しも、ないんかい？」

「女の武將に負ける武官も、優しいだけで使えない文官なんて、関わるだけで時間の無駄どころか損っすよ」

「うちは武と酒があるけど、なんや寂しいのおー」

「寂しくもないし、無駄よりましっすよ」

………（つつたく、自分で佐助に、泊まりがけの視察頼んどいて、上の空になりまくってたくせにの）

今日つまみは、親友の久しぶりの笑顔と決めた張遼であつた。



## 幕間 帳遼編（後書き）

次の黎編の後から、話動かします

幕間 黎編（前書き）

前回と同じく こっぴあずかしい展開に

## 幕間 黎編

堰温こと黎に、洛陽から離れた町の視察を頼まれ、三日振りに佐助が洛陽へ戻ってきた日

「おーい、黎。佐助が戻ってきたみたいやで」

ニヤニヤしながら、霞が声を掛けてきたっすけど、気づいたら私は走りだしていたっす。後ろから「泣いたカラスがなんとかやな」って、茶化す声が聞こえてたっすけど。

（不思議なもんすね。男と関わるのは時間の無駄とか思ってたんすけど）

佐助が外史にきた日

あの日、私は一人で、近くの村の視察に行ってたんすよね。洛陽から近いし、大丈夫だと思ってたんいたんすよね。

「見るよ。可愛い娘が一人で寂しそうにしてるぜ」

「こりゃ、俺達が遊んでやらなきゃな」

黄巾の連中が、私の行く手を遮る様に困ってきたんすよ。

「邪魔っすよ」

「そんな、つれない事いわないで、楽しい事しよーぜ」男達は下品な笑いを浮かべて、こっちをみている。

(こんな事なら、霞か恋に護衛を頼むんだっすね)

「厄介事は好きじゃないんだが、こんなカスを見逃したら幸村様にどやされるな」

声をした方を見ると背の小さい男が、黄巾の男達に近づいていつてるす。

(どうして男って生き物は自分の実力をわからないんすかね、でもこの隙に逃げるっすよ)

小さい男と黄巾の連中が、言い争っているので、隙を伺っていると

「幸村様の名前を呼び捨てにすんじゃねー」

小さい男の雰囲気、変わり濃厚な殺気をまとってるっす。

私は、戦場にも、何回も行ってるっすけど、あんな濃厚な殺気は初めてだったっす。

さらに、驚いたのは小さい男の動きだったっす。もの凄く速さで、走りながら、性格に黄巾の連中の首を切っていくんすから。

情けない話男が、目の前にきた瞬間、気絶したんすよ。

「おい、起きろ。いや頼む起きてくれ、お願い起きて下さい」

気がつくと、小さい男が何か話しかけてきていたっす。

薄目を開けてみると、先の殺気は、もうなくむしろ情けない感じっす。なんかしてきたら、懐の短刀で刺してやるっす。

警戒しているも、男は襲うどころか近づいても来ないっす。

かなり長い間、そうしていると、小さい男は、私の足跡を確認していたっす。

まあ華雄よりは頭良さそうっすね。

小さい男はため息をついて、謝りながら、私を抱き上げてきたんすよ。

凄く優しく、あの小さい体のどこにこんな力があるんすかねと、考えていると小さい男は、走りだしたすよ。

不思議な事に、抱えた私は揺れるどころかむしろ心地よいぐらいだったす。

小さい男は、佐助と言ったす。

なんでも東にある島国で忍びという細作みたいな事をしてるらしいっす。

利用できる、ふんだ私は真名を許す事にしたっす。

でも利用って、考えてのも、つかの間気づいたら佐助さんに惹かれていたっす。

そんな事を思いながら、走っていると、いたっす。佐助さんっす。

私は寂しかった三日間の気持ちをぶつける様に、笑顔で言ったっす。

「佐助さんお帰りなさいっす。待ちわびてたんすよ」

話したい事も聞きたい事もたくさんあるけど、今は佐助さんの隣にいれる幸せを実感しまくるっすよ。

幕間 黎編（後書き）

さあ ようやく、次の段階へ

佐助、旅立つ（前書き）

ようやく、ようやく洛陽編終わり

## 佐助、旅立つ

飴売り兼警備中の佐助は、洛陽の街を見て思う。

確か、史実の董卓は悪政を敷いた為に、劉備を始めとする同盟軍に滅ぼされたんだよな。この街をみる限り大丈夫だよな。

佐助は、洛陽の街も董卓軍も気にいっていた、見ず知らずの自分も受け入れてくれただけではなく、暖かい気持ちにさせてもらっている。時々思う幸村様の所に戻れないなら、この街で暮らすのも悪くないかなと。

「佐助、今ちよつとよいかな？」

佐助に声を掛けてきたのは、筋肉質の身体をまったく隠す気がなさそうな男いや漢女、卑弥呼であった。

同じ日本生まれと、いう事や男の気持ちも乙女の気持ちもわかる卑弥呼に佐助は、話を聞いてもらう事が少なくなかった。

「卑弥呼殿いかが致しましたか？」

「相変わらず、堅苦しいの。佐助お主三国志は知っておるの」

「ええ、幸村様から聞いた事があります」

「なら、董卓がどうなるかも、知っておるの」卑弥呼は重厚な視線を佐助にぶつけてくる。

「いや、しかし月殿は悪政はしておりませんし」



「お主、木曾 義仲は知っておるか」

「ええ、源氏の将で天子を擁した後、京から平氏を追い出すも、治安をうまく回復できず…」

「そう、源義経に倒された。治安以上にあやつが倒されたのは、妬心じゃよ」

「嫉妬ですか」

「そう、京を制する者は天下を制する。ならこの国の京はどこか。ここ洛陽じゃよ」

「いや、しかし」佐助は崩れゆく大事な何かを繋ぎ止めようと、言葉を探す。

「外史といつても、正史の歴史からは逃れらぬ。間違いなく董卓討伐は起こる」

「そんな…」佐助は全身の力が、抜けてく気がした。洛陽で手にした幸せが、砂の様にこぼれていく。

「そんな顔をするな。もう少しすると、天の御使いが降りてくる。それにお主もある正史と同じ結果になるとは限らんのじゃよ」

「自分ですか」

「そう、外史は人々の想いが影響する。後の世では、お主も幸村も人々の想いを受けている。天の御遣いよりも強くな」

「自分に何ができるのでしょうか？」

「旅をして、有力諸侯と接し董卓達を匿う場所を作ってもらうのはどうじゃ」

「わかりました。やります。いや、やってみせます」

### 閻温執務室

「旅つすか」

「ああ、金も溜まったしな」佐助の目を見つめてくる黎とは、反対に目を逸らす佐助。

「私には本当の事を言って欲しいです。佐助さんは私をそんなに信用できないいつすか」黎はこぼれ落ちる涙を拭いもせずに佐助を見つめてくる。

「ふー。俺は忍び失格かもな、目的の為なら自分の体が傷つくのも平気なんだかお前が傷つくのは耐えられん」

佐助は自分か今の時代より後の人間である事、  
袁紹を中心とした反董卓軍により董卓が滅ぼされる事、  
歴史がその方向に進むの止めれない事を伝えた。

「やっぱり、つすか。最近袁紹の馬鹿が色々挑発して来てるっすからね、それで佐助さんはどうするんすか」

「俺はどこかの諸侯に食い込み、この国の仲間を受け入れる場所を作ろうと思う」

「わかったす。後の事はまかせるす」

#### 佐助旅立ちの日

黎の配慮により、俺の旅はすんなりと認めれた。ただの商人が城に出入りするのを快く思わない奴等も少なくないらしく、追放の形をとる事で城内の不満解消にも繋がたらしい。

「見送りは、張遼殿と恋か。世話になったな」「月や詠は立場上、来れんし華雄は、あんな態度取った手前気まずいらしてな」

「佐助、絶対また会う」

「んじゃ、湿っぽい柄じゃないから、行くわ」黎と会えなかったのは、寂しいが…仕方ない。

「うしっ、行くか」「おーっす ……」

「えっ?」

「何をボーっとしてるっすか。佐助さん行くっすよ。」

「いや、あの閻温さん?」

「佐助、幸せ者やの。文官の立場を捨てて着いてくんやと。まっ、

三日だけ佐助に会えないだけで、使い物にならなくなった奴やからノシつけてくれてやるわ」笑いながら、手で追い払う様にしてくる張遼。

「黎、いいのか」

「何いつてるつすか。佐助さんこの国の事あまり知らないつすよね。董卓様を守りたいのは私も一緒すよ。」

（董卓様や恋も佐助さんに真名を許したらしいつすからね、他に誰が佐助さんを気に入るかかわからないつすからね。油断ならないつす）

こうして、外史に呼ばれた忍びと、それを慕う姫の旅は幕を開けた。

佐助、旅立つ（後書き）

佐助も一刀も劉備サイドの予定だけど、旅の間誰と絡ませよ

## 黎、決意する

### 旅初日の事

「いきなり、諸侯の所に行っても上手くいって雑兵扱い、殆どが門前払いになると思うんすよ」

「なら、まずは名か」

「そうっすね。最初は旅の商人の護衛とかが、いいかもしれないすね。商人同士の繋がりには凄いつすから」

「有力な商人なら、既に護衛を得てるだろ。どうやってそこに食い込む？」

「最初っから、護衛じゃなくても、いいっすよ。有力な割に護衛の実力が伴わない様な商人の後をついてけばいいんすよ。旅の道連れにして欲しいとかお願いして」

「んな、都合よく黄巾の連中が食いつくかね」

「今は街道を歩けば、熊や虎に会うより黄巾の連中に襲われる危険がある確率が高いんすよ。」

まして護衛のわりに、いい荷駄を運んでくれば、あいつらは食いつくっすよ」

「そこで俺が黄巾の奴等を倒す…か」

「そうっす。そこで佐助さんをお願いがあるっす。」

「まあ、できる事ならな」

「なら、商人には私達は旅の夫婦って、言つつすよ。うん、それが一番自然で怪しまれないっす」（佐助さんの実力なら、黄巾の連中なんて余裕っす。）

佐助だけの名が売れば、佐助に興味をもつ乙女がでかねない、商人が娘や部下とくつつけようとするかも知れない…だが名が売れたのが、夫婦でならば

（戦いの、基本は先手必勝っすよ）

董卓の為、乙女としての幸せの為 燃える黎であった。

黎、決意する（後書き）

微ハーレムいったけど、黎の独壇場になりそうな…



## 幕間 黎、策に溺れる？

佐助さんと一緒に歩く二人旅…のはずだったんっすが

「佐助さん申し訳ないっす」

私は隣を歩く予定だった佐助さんに謝る。 何故なら私閻温は、隣ではなく、佐助さんの背中にいるんすから。

旅を始めて、わかったのは、佐助さんの歩く速さと体力の凄さだったっす。

早さにも、体力にも、まったくついていけない私を佐助さんは、飴売り箱を改造して、私ごと背負える様にしてくれたんすが。

「後できたら、あの猿飛の術とか、崖を登るのは、できたら遠慮したいっす」

私ごと箱を背負った佐助さんは、とんでもない早さで歩きだしたんすよ、早さに驚いてるのも、つかの間佐助さんは、そのまま木に登ったと思ったら、隣の木へピョーン、またピョーンって飛ぶんすよ。

それが落ち着いたと思ったら、崖を登るんすよ。

絶対、ぜっーたい隣なんて歩けるわけないっす。 背中にいるだけで涙とまらないんすもん。 確かに早く大きい街に着いて商人を吟味しなきゃいけないんすが…

野宿した事ないなんて、言わなきゃよかったっす。

佐助新たに知り合う。(前書き)

オリキャラ二人目です

## 佐助新たに知り合う。

黎が、へ口へ口となりながらも、頑張った「我慢した？」お陰で、予定よりも早く大きな街に着いた。

「この街は、交通の拠点となっている。この辺りの商人は、商売の時ここを利用する事が多いんすよ」

確かに、大小様々な護衛隊達が、雇い主の商談を終わるのを待っていた。

「私は文官だから、わからないすけど、佐：あなたはどの護衛にしたいすか」黎は嬉しさと、恥ずかしさを全開にして、聞いてきた。

「そうだな。あそこだな」佐助が見たのは、真新しくも威圧感のある装備をつけ、一際目を引く護衛達である。

「あ・あ・あなた…、そ・それは何故でっすか」

「黎、不自然だから無理するな。まっ不自然なのは、あいつらも一緒だな」

「うー。佐助さんはノリが悪いす。そんなんじゃ私以外の乙女に相手にされないすよ。理由はなんなんすか」

「なんで、そんなに不機嫌になる。あいつらは、こけ脅しだよ。戦を知ってる人間は貧相だろうが信用できる武器を持つもんさ。それ

に武具の装飾なんて邪魔にしか、ならねーよ」

「なら、決まりっすね」

Saido???

商談が、決まって帰るのは良いんですが、どうもお父様がつけてくれた護衛の方達は、言うことは立派なんですけども……

ため息混じりにそんな事を考えていると、一組の男女が声を掛けてきた。

男性は、子供みたいに小さな背にお猿さんみたいなお顔をしている方。

女性は、女の私から見ても可愛らしい明るい雰囲気をもった方です。二人は夫婦で商売に行くから、途中まで一緒に行かせて欲しいのと話でした。

護衛の方達の、大言壮語を聞くより、同じ商人同士の方が益のある話ができると思い、直ぐに了承いたしました。

「私の名前は王烈と申します。道中よろしくお願い致します」

佐助新たに知り合う。(後書き)

王烈は、三国志にでてきた名士で、後に商人になるも 才をおしまれ引き抜きあつても、誰にも仕えなかつたそうです。

設定は外史補正入りまくりです

## 佐助異名をえる

腰まである長い髪に、抜けるように白い肌。

王烈と名乗る女性は、まさに深窓の令嬢という言葉が体現していた。

その為か

（大丈夫つすよ、大丈夫。今私と佐助さんは夫婦と名乗ってるし、佐助さんの魅力に気付ける乙女なんて、中々いないっす。∴大丈夫つすよね）

「この先はどんな道になるんだ？つて黎、おい黎」

「はっ、あなたじゃなく佐助さんっ、やっぱりあの女を選んで私を捨てるんすか」頭の中で、色々な物語を展開させていた黎が、危ない目線で佐助を睨んでくる。

「何わけのわからない事を言っている。この先に賊が襲ってきそうな場所はあるのか」

「えっ。あ、あっ。そうっすね。もう少し行くと森に囲まれた道になるはずっす。街で聞いた話では、その辺りで賊がでるらしいっすよ」

「森か。願ったり叶ったりの場所だな」

佐助にとって、森は独壇場。名を挙げるには、うってつけの場所である。

森を半分ほど過ぎた辺りでしようか。どこに隠れていたのか、突然黄色布を巻いた人達が、現れたらしいのです。

「賊だー。数は30人ぐらい。やるぞお前ら」

勢いだけの言葉と裏腹に、案の定こちらの護衛はおされているようです。

「仕方ありません。私も、でます」愛用の薙刀を持ち、黄巾党のいる場所にむかった私が見たのは

先ほどの男性が、木々をお猿さんの様に、飛び交いながら次々と黄巾党を切り倒していたのです。

王烈 Saido end

黄巾党に、とつて森は自分達の身を守る鎧のような場所でもあった、護衛達の武具も装飾が木々に引っかけかり、うまく扱えずにいる。しかし相手が忍び、まして猿飛の名を冠する佐助であるなら、その立場は逆転する。30分もしない内に、黄巾党は全滅させられた。

「さすがです。佐助さんやっぱり人間見た目じゃないです。中身です、実力です。おしとやかより明るさです」

「あのありがとうございました。佐助様と…洛陽の文官の閻温様ですよね」

「何故おわかりに」

「閻温様のお顔は何度か拝見しましたし、商売に関係する文官でも、賄賂を受け取らない閻温様は有名ですから。」

「うー。佐助さんがノリ悪いからバレるんすよー」

「しかし、なぜお二人は旅を」

「自分が今仕官する先を探しておりまして、閻温殿とご一緒させてもらっているんですよ」

「だから、佐助さんの事を広めて欲しいっす。賊退場の夫婦・黄巾退治の恋人とかでも、いいっすよ」

「わかりました。私も色々な諸侯の方と、顔見知りですし、それとなく話をしますね」

王烈と別れた後も、黄巾退治を続けた二人には、異名がついた。黄巾殺しのチビ猿・鬼猿使いの女・王烈を救った小さい戦士等

「納得いかないっすー」心から叫ぶ、黎であった。



佐助異名をえる（後書き）

ようやく、話がうごいてきたかな？

佐助、御遣い一行と出会う(前書き)

ようやく一刀くんの出番

佐助、御遣い一行と出会う

幽州・啄群

「おい、デブ見るよ。チビより小さい猿みたい奴がいい女を連れてるぜ」

「ほ、本当なんだな。う、うらやましんだな」

「アニキ、こられて俺もチビから卒業ですね」

「おい、チビ猿その女置いていけ」

「お、おいてくんだな」 デブと呼ばれた男が、黎に手を伸ばそうとしすると、黎は佐助の後ろに隠れる。

「チビ猿の後ろじゃ、まる見えだぜ。姉ちゃんそんなチビほつといて俺達とあそぼつぜ」

「うっさいす。佐助さん以外の男が私に触るなんてありえないんす  
「よ」

「デブ、まずそのチビ猿をどける」

「黎さん、面倒くさいから、こいつら相手にしないってのは」

「ありえないっす。佐助さんが片付けた方が早いです」

「ですよー」。っしょっつと

Saido???

私と桃花様、鈴々は、占いにある場所へ行くと、そこには光り輝く服を着た天の御遣い・御主人様がおられた。

「ねえねえ、愛紗ちゃん。小さい男の人が襲われてるよ」

「大丈夫です、桃花様。鈴々行くぞ」

「あー、愛紗」

「なんですか、御主人様。今は一刻を争う時です」

御主人様は、平和な国から来たから、わからないのかも知れないが。

「いや、必要ないみたいだよ」

「えっ?」

「愛様ちゃんあのちっちゃん人凄いかつたんだよ。近づいただけで、三人がバタバタ倒れたんだよ」

「近づいただけでなんて…。鈴々は見えたか」

「ちっちゃんいお兄ちゃん首に手刀を叩き込んでいたのだ。鈴々目が良いから見えたのだ。でも鈴々よりちっちゃんのに強いのだ」

Saido黎

何回見ても、佐助さんは強いっす。

奥で見てた四人組も、呆気にとられてるっす。

「ふえー凄いね。ちっちゃいのに強いんだねー」抜けた感じの女が、声を掛けてきたっす。なんかあのでかいだけの胸に危機感を感じるっす。

「桃花様、どんな怪しい術を使うかわかりません。あまり近づかない方が」黒い髪の女がやたら失礼な事を言ってくるっす。

「にやはは。愛紗はお兄ちゃんの前で活躍できなかったから悔しいのだ」赤い髪の小さく元気な女の子だ。

「鈴々と変わらない背なのに凄いですね。あつ、俺は北郷一刀と言います」

派手な服を着た男が、握手を求めてきているっす。

ないっす、この場合は先に佐助さんに話しかけるのが礼儀っすよ。しかも三人も乙女をはべらせていながら、やらしい目で見てきてるっす。

軽薄の二文字がぴったりな男は無視っす。

「私の名前は閻温っす。向こうにいるのが佐助さんっすよ。」

「よろしく。私は劉備だよ」

「えっ」

佐助と一刀、二人の正史の人間が出会い、ハモる瞬間であった。

佐助、御遣い一行と出会う(後書き)

ようやく原作のスタート地点) . . . (

## 佐助、劉備達と接触する

S a i d e 一 刀

愛紗達と出会った時に、その噂を聞いた。

鬼猿と呼ばれる佐助と言う、小さな男の話。

その男はまるで猿の様に身軽で、次々と黄巾党を倒している。

佐助という日本風の名前、猿の様に身軽：それはまるで

「佐助さんって、もしかして真田幸村に仕えていたんじゃないですか」

「確かに、自分は幸村様にお仕えしていましたが」

「御主人様、この小さいな男の事をご存知なんですか」

「俺が未来の世界から来た事を話したよね。この人は同じ世界の五百年前の人なんだ」

S a i d e 佐 助

穏やかな雰囲気を持った女性は、劉備と名乗った。

劉備玄德 三国志の英雄で仁愛の人、

俺が董卓を託そうとした諸侯の一人。

「佐助さん、行くつすよ。こんな礼儀もしらない奴らと、これ以上



関わる必要ないっすよ。話も出任せにきまつてるす」

「なっ、御主人様が嘘をついたと言うのか」黒髪の女が、体を震わせて怒り始めている。

「そっちが先に佐助さんをチビとか怪しいとか馬鹿にしたんすよ。佐助さんは、私に絡んだ黄巾の連中を倒しただけっすよ」

「くっ、御主人様は天の御遣いなんだぞ」

「その軽薄がつすか。もし、そうだしても、貴女が威張る事でもないですし、佐助さんも天から来た事になるんすよ」  
「黎は佐助が、馬鹿にされたのが癪にさわったらしく、言葉に容赦がない。」

「うん、今のは愛紗ちゃんが悪い」

「愛紗はお兄ちゃんの事になると熱くなるのだ」

「愛紗、謝ろう。それに佐助さんは、愛紗が必要だと言ってた鬼猿だと思っよ」

「わかりました。佐助殿 申し訳ありません」

「いいですよ。チビも怪しいも、良く言われる事ですから」

「そう言っただけだと、ありがたい。私は関羽長と申します」

「張飛なのだ」

「ほれ、黎。礼儀を説いた奴が、返礼しなとまずいぞ」

「うー佐助さん。わかったすよ。私は閻温と申します。」

「で佐助さん達はこれからどうするの？私達は御主人様と一緒に来てくれたら助かるだけどなー」

「佐助のお兄ちゃん強いし賛成なのだ」

「いいですよ。でも条件があります。北郷殿と二人で話をさせていただきます」

「.....」

「佐助さん、話ってなんですか」

「聞きたいのは、二つ。あの三人の事と。幸村様が、どうなったかです」

「多分あの三人は、佐助さんが思っている通り、蜀の劉備・関羽・張飛だと思えます。真田幸村は大阪夏の陣の後討ちとれたと聞いています。ただ……」

頭の中が痺れている、幸村様が討ちとれた……

「北郷は、鹿児島島の島津の分家になるんですが、こんな歌が伝わっているんです」

花のような秀頼様を、鬼のような真田が連れて、退きも退いた

り鹿兒島へ

「そこで天寿を全うされたとも聞いています」

余計な心配するなど、幸村の苦笑いを聞いた気がした佐助であった。

佐助、劉備達と接触する（後書き）

幸村の歌は、鹿見島に本当に残っているものです。

## 佐助、忍びの技をみせる

とりあえず、劉備達と今後の話をする為に近くあるという村に来たのだが…

「ひどいっすね。」

「ああ、多分黄巾党の連中だろう。略奪だけでなく、暴力への歯止めも効かなくなっただけじゃある」

俺達が見たのは、まさに地獄絵図だった。夜なのに、家が燃える明かりの中村から、聞こえてくるのは、痛みによるうめき声と悲痛にくれる泣き声だけ。

Saido黎

私も洛陽にいた時に、黄巾党に襲われた村に被害確認にいった事はあるんすが、ここまで酷いのは初めてだった。

劉備達は義憤を、露わにしているっすね。賊を滅ぼしてやるって、息巻ているのは、いいっすけど。

佐助さんに、声を掛けようとした瞬間、恐怖を感じたっす。佐助さんは静かなんすけども、体中からは殺気が溢れていたっす。多分あれが忍びとしての佐助さんの姿なんすね。

「ここで、あーだこーだ言っても、何も変わらないっすよ。現状把握をするっすよ」

佐助さんが、忍びなら私は軍師、やれる事をやるっすよ。

その後私達は生存者がいる家と、向かったす。

村の民達は、生気をなくしていたつすが、関羽の我々には天がついているって、言葉でやる気をみせたつす。

まあ少しは関羽を見直してやるつすかね。

しかし佐助さんの異名が、黄巾に死を運ぶ猿つて大袈裟なものにまであっていたのは苦笑したつすけど。

話が一段落した後佐助さんが

「黎、村の指揮を頼めるか」つて頼んできたつす。

「もちろんすよ。佐助さん軍師閻温にまかせるつすよ。」

「頼んだぜ。なら俺は本気の忍びの仕事を黄巾の連中にみせてやる」  
そう言つと佐助さんは闇に溶けて消えたつす。

S a i d o 関羽

「閻温殿、次の指示をお願いしたい。ところで佐助殿の姿が見えませぬが」

「佐助さんは、忍びの仕事をするつて、いなくなつたつす、私には何すか教え欲しかつたんすけどね」

「忍びは、またの名を乱破つていうんだ。戦の前に相手方に破壊工作とかをしかけるんだよ」

「御主人様、なら佐助殿は」

「多分、一人で黄巾党の陣に向かったんだと思う」

「そんな、無謀です。止めなくては」

「佐助さんが、俺の知ってる佐助なら多分大丈夫だと思うよ。それより閻温さん大丈夫ですか」

私はいつの間にか、地面に座り込んでいた。本音を言えば今すぐにも、佐助さんを追いかけて止めに行きたいんですけど。

「大丈夫です。軍師は軍師の仕事をするっすよ」

佐助さん私に、何も言わないで心配を掛けたんすから、絶対戻ってくるんすよ。

S a i d o 佐助

この世界に来て初めて忍び忍び装束を纏う。

村で聞いた場所に近づくと、奴らは酒に酔いしれていた。

呆れた事に見張りもない。

近くの木に潜んでいると、何も知らない獲物がノコノコと近づいて来た、大方小便にでも来たのだろう。

「飲んだー。飲んだー。明日は女が待つてえ」

佐助は、男の口を押さえ、そのまま首を掻ききる。

息たえた男から黄色い布を奪い、佐助は宴へと消えていった。

酒に酔っている男達は、誰も佐助に不信感を抱かない、日毎に新たな顔が加わっているのです、知らない顔を見るのも少なくいからだ。

「悪い、頭はどこだ。明日いい目みたいから、これで機嫌をとりにくてな」

佐助は、村から持ってきた瓢箪をみせる、無論中身は空だが。

「お前も好きだねー。お頭ならあそこの小屋だよ」

男が指差したの、古い小屋であった。

「お頭失礼しやす」

「あつ、なんだ。お前は」

小屋の中には数人の男達が、奪ってきた酒と食物で宴会を開いている真つ最中である。

「今日の村で、いい酒を手に入れたんで何とかこれで明日は俺にも旨い思いさせてくださいよ」

「あー、いいぜ。俺達が味見した後ならっつ」

男達の顔に、下卑た笑顔浮かんだ瞬間、佐助の投げた棒手裏剣が額に突き刺さっていた。

「ったく、カスは死んでもカスだな。さて」

「おい野郎共、嬉しい知らせだ。お頭達は、飲みすぎたから明日は起きるまで起こすなだよ。先に俺等が女を味わいまくっても、かまわねえそつだ」



佐助の声を聞いた男達は、思い思いの歓声をあげる。

「さあ前祝いだ。飲みまкруうぜ。酒ならまた奪えばいいさ」

佐助の煽りで、ますます熱狂していく宴。

「さてと、次はつと」

佐助は、水瓶に痺れ薬を仕込んだり、弓の弦を切ったり、馬の手綱に切れ目を入れていく。

あまりにも自然すぎる動きに、酔っ払った男達は疑念すれ抱いていなかった。

男達が酔い潰れた頃には、佐助は担げるだけの武器も持って、また闇夜に消えていった。

翌朝

「おい、起きろ。昨日の村の連中が責めてきた」

「俺の剣がねー」

「体が痺れて、動かねえ」

「誰か、早くお頭を起こせ」

「ひっ、お頭達が殺されてる」

黄巾の陣は、大混乱に陥っていった。

そこに關羽、張飛の強者が、村人達を従え斬り込んでいく。

混乱を、立て直さない黄巾党は、瞬く間に敗れさった。

「勝った、勝ったよ。御主人様、愛紗ちゃん私達勝ったよ」

「やったのだー」

勝利に湧く、劉備一行と村人達。

その片隅で

「どれだけ私が心配したかわかってるんすか。佐助さん、今回は賊だから良かったすけど、正規の軍が相手の時は、せつかく建てた策を練り直す必要もあるんすらね」

今回の一番の立役者が、こっぴどく黎からお説教されていた。

佐助、忍びの技をみせる（後書き）

ようやく、忍びらしい事ができたかも。  
ご都合主義なのは、わかってる。

佐助 怒る（前書き）

星好きは注意を（ - - ）次話でちゃんとします

## 佐助 怒る

劉備達と共に、黄巾党を討伐した次の日。

「ねえ、御主人様、愛紗ちゃんこの後どうしようか」

「当然、他の黄巾党を倒して我らの名を挙げるべきです」

「そういえば、閻温ちゃんは軍師なんだよね。良かったら意見聞かせてくれないかな」

「そうっすね。まずはこの地の太守に報告をだして目通りを願うっす。それで、できたら義勇軍として組み込んでもらうのが妥当っすよ」

「我らの武では不足というか」

関羽殿が、興奮してきてる、黎は相手にしたくないのか、あからさまに溜め息ついてるし。

「黎が言うのは拠点の確保だろ。小さい村を拠点にしたら、討伐で留守にした時に目の敵とばかりに賊に襲われるだろうしな」

「劉備殿と太守様が、親友なら、何か思い出はございますか？」

「えーと、白蓮ちゃん、とにかくいい娘だったから、私達に協力してくれる筈だよ。後佐助さん、硬い話方はやめよーよ」

「無理っすよ。劉備殿、これでも佐助さんは、女性と話をするだけ、

ましになったんすから」

「えー、もつと硬い話し方だったの」

「硬いどころか、前は女性がいると必要な時意外は口を開かなかたつすからね、話すのを避けてたつて言ったほうが正確かもしれなかつすね」

「仕方ねーだろ。忍びの時は周りは野郎ばつかだつたし、こんな猿野郎に好き好んで話しかける女なんていなかったしな。いたとしても探り入れに來た敵の忍びぐらいなもんだし」

「全く、私がどれだけ苦労したかわかつてるんすか」

「だーから、黎には感謝してゐるつて、俺みたいなのに、色々話しかけてくれたし、真名も預けてくれたしな」

「むー、なんか楽しくない。佐助さんも御主人様みたいに女の子と、いづばい仲良くなりたくないの？」

「ですから劉備殿、北郷殿みたいな美男子なら仲良くなりたくない女性も多いでしょうが、自分には有り得ない話ですよ」

「そうつすよ。佐助さんは、どごぞの軽薄と違い真面目なんす。硬派なんす」

「あの閻温さん、軽薄つて、もしかして俺の事」あー、北郷殿が落ち込み始めてる。

「討伐の後、村の若くて綺麗な女性だけに話しかけていたのは、ど

この誰っすか。佐助さんは殆ど寝ずに怪我の手当てをしてたんすよ」

「へー、偉いね佐助さん」

「不安な人を落ち着かせるのも大事な仕事ですよ。そゆうのは自分には無理ですよ。野郎共と馬鹿話してるほうが楽なんですよ」

「なんか、佐助のお兄ちゃん大人なのだ」

「張飛殿、自分はこの中では一番の年上なんですから当たり前ですよ。」

「女性に関しても、もっと大人になって欲しいんすよね…」

「いや、今の俺みたら幸村様驚くつて。才蔵辺りは信じないだろうが」

「むー、佐助さん閻温ちゃんとだけ仲良くてずるいー。よしっ、決めた。私もお友達になりたいし、これからは佐助君って呼ぶ」

「だーっ、もうお任せしますよ。早く太守様の城に出発しますよ」

「佐助君、照れてるんだ。かわいいー」

(劉備玄德、危険っすね。早くこの集団から離れるのが得策っすね)

公孫贇居城

「桃香、久しぶりだな。賊退治してもらって助かったよ」

「白蓮ちゃん、凄いねー。太守様なんだねー」

「桃香は今までどうしてたんだ」

「御主人様やみんなと一緒に、人助けをしてたよ」

「人助けか。塾で一番出世が期待されてたのにな」

「私には無理だよー。」

「全く、欲がないっ！かお人好しというか。まっこの近くにもかなりの人数の賊がいて、中々手がだせなかったから、正直手を貸してもらえるのは、かなりありがたいしな」

「私は役に立たないかもしれないけど、御主人様やみんなは凄いよ」

「へー、そっちにいるのが噂の天の御遣いか。」

「そうだよ。後愛紗ちゃんも鈴々ちゃんも強いし、佐助さんも凄いんだよ」

「ふむ。貴男が噂に聞く。猿鬼か、噂の通り背は小さいが隙がまったくない」

話に割って、入ったきてたのは、青色い髪に真っ白な服を纏い、槍を携えた女性であった。

「趙雲、今は大事な話の最中だ。客将がでる場面ではないぞ」

「これだけの戦力が、整ったのだから、出陣するものと思いませんか」

「あのな、そう簡単に出陣なんて、できるわけないだろ」



「公孫贇殿、慎重も大事ですが勇も必要ですぞ。幸い一騎当千の英傑が、私を含めて四人もいる。よもや烏合の衆の黄巾賊に遅れをとることはないでしょう」

S a i d e 劉備

白蓮ちゃんが困ってる、からなんとか助け舟をだそうと考えていると

「太守様、戦を知らぬ者との論議は無駄以外の何ものでもございませぬ」

佐助君が今まで見た事のないような厳しい顔で白蓮ちゃんに話しかけていた。

「猿鬼殿は、我が武を侮辱すおつもりか」

趙雲ちゃんが、怒ってる。

「武と戦の違いもわからぬ者はだまれと言っているのだ。戦は勝てるように様に仕向けなければ勝てぬ。個人の武なぞ、条件の一つにすぎぬ。」

「言わせておけば、猿鬼殿は、よほど我が槍を喰らいたいらしいな」

あー、趙雲ちゃんが槍を構えた。とめなきやー。

「大丈夫っすよ」

そう言つと閻温ちゃんが、私の肩に手を置いてきた。でもその目は、真っ直ぐに佐助さんを見つめている。

「いい加減にしろよ。戦なんてのは民や国の事を思うなら避けれるなら、避けなきゃいけないんだよ。どうしてもしなきゃいけない時は最善の準備をして行つもんだ。手前の武を見せびらかしたんなら大道芸でもやってな」

「くっ、我が武を見くびるなよ」

趙雲ちゃんが、部屋から出て行つちやった。

「なんか佐助君怖いよ。趙雲ちゃんの事嫌いなのか？」

「違つつすよ。劉備殿、佐助さんは人が傷つくの嫌いっすし、人を傷つけて喜ぶ奴も嫌いっすよ。でも一番嫌なのは誰かが傷つのが、解ついで、何もしない事なんすよ」

「閻温ちゃん、どうゆう事」

「あのまま勢いで戦をしてたら、勝てる戦も勝てないっすよ。その時の戦死した兵や、その家族の事、そしてそれを背負わなきゃいけない趙雲殿の事。それを思うと、佐助さんは自分が嫌われても止めたかつすんよ。」

全く、不器用っすよねって、閻温ちゃんが笑いながら教えてくれた。

「でも、それじゃ佐助君は嫌われ損だよ」

「前に佐助さんがこう言つたんすよ。忍びは、あくまで影、名誉はいらぬ。必要なのは結果と自分を知ってくれている人の一言だっ

て。今は幸村さんって人が、いないっすから、私が佐助さんの隣に  
いてあげたいんすよ。私が佐助さんを嫌う事なんてないっすからね」  
閻温ちゃんの顔は、まさに恋する乙女そのものだった。なんか羨ま  
しくては悔しいな。

佐助 怒る（後書き）

戦描写が不安（・・・）

佐助 趙雲の救出へ行く(前書き)

さあ、この程度の文章に何日もかかる自分が悔しい。

## 佐助 趙雲の救出へ行く

side 黎

「大変です。趙雲様が、お一人で出陣されました」

なっ、あの女は佐助さんが心を鬼にしてまで守ろうとしていたのが、わからないんすか。

あの手は心配すれば調子にのるから、ほっとくのが一番すね。

うん、公孫贇殿も似た考えっのようすっね。

集団より個人を優先していたら、政はできないっすから当たり前っすね。

「なんとか助けられないかな」

軽薄御遣いは、何言ってるんすか？ そんな事したら、どれだけの命が危険にさらされるかわからないんすか？

あー、軽薄大好きな関羽やお人好し劉備が流されてるっすよー。

「閻温さん、何か策とかないかな」

軽薄、うさん臭い爽やかさで何を言ってくれてんすか。軍師だからって丸投げっすか。

あり得ないっすよー。

「黎ちよっといいか」

佐助さん何っすか？軽薄の相手で疲れた私を心配してくれるんすか。

佐助さんの話の内容は、策に役立つものだったっす。

うっすい内容しか言えない軽薄御遣いに見習せたいもんすね。

「では策を伝えるっす。まずは関羽殿と佐助さんが精鋭の兵を連れて、趙雲殿の救出に向かうっす。

少し賊を倒したら、まず佐助さんが一人で撤退。で敵の勢いが強まる前に関羽さんも、一度下がるっす。この時趙雲殿を引きずっても下がって欲しいっす。その時賊を相手に佐助さんが印字打ちつてのをして、撤退を支援する手筈っす」

「佐助君、印字打ちつて、なんなの？」

「印字打ちは、忍びがよく使う技で、早い話が石を投げる技なんです」

「佐助殿、石ころで、賊は倒せないかと」

「まあ関羽殿、まずは見てください」

佐助さんは手首に布を巻きつけた後に、布の端に石を包むと、勢いよく回して、石を放ったす。

……石が木にめり込んだっすよ。佐助さんに威力があるって聞いてたっす、ここまでとは思わなかったす。

「とりあえず俺は適当な崖の上から印字打ちをします、下に投げる事で勢いも増しますし」

「そうすると、賊は石が届かない位置に固まって進軍するっすから、丁度いい位置に弓兵を設置して一斉射撃をするっす。賊の勢いが、弱まったところで関羽殿と趙雲殿が賊に突撃を行うっす。

間を置いて張飛殿に横撃を加えて貰いたいです。賊が弱ったら、背後から公孫賛殿が騎馬隊で挟み打ちにするっす。」

「印字打ちは得意ですし、崖の上なら石も多いから自分にお任せ下さい。ただ石を拾う時間を少なくするのに誰かに手伝ってもらえたらよいのですが」

side 劉備

ふえー、佐助君の石凄いな。あんなの当たったら痛いだけじゃ終わらないよ。

えっ、石拾いそれなら

「はい、私が石を拾うの手伝うよ」

「駄目です。桃香様危険です」

「愛紗ちゃん、私も何かしたいの。崖の上なら賊の人達も来ないから安全だよ。崖には佐助君が連れて行ってくれると思うし」

「しか桃香様が行かなくても」

「御主人様は私達の象徴だから、本陣にいなきゃ駄目だし、それに前に閻温ちゃんが佐助君に背負われて崖を登っても平気だったって



言ってたよ」

「いや、劉備殿。平気ではなく泣きながら自分の頭を叩いて文句を…」

「佐助さんそれは言わない約束つすよ」

むー、また二人で楽しそうにして、決めた絶対に行くんだから。

「それに崖の上からなら戦の様子が、きちんとわかると思うんだ。お願い愛紗ちゃん」

「仕方ないですね。桃香様を頼みましたよ佐助殿。それではまずは趙雲殿のところいきましよう」

side 佐助

関羽殿と一緒に趙雲殿の救出に向かった。何故か行く時黎の視線がとんでもなく冷たかったのが気にはなるが。

少し遠くから、趙雲殿の名乗りをあげる声が聞こえてくる。いや、一対多数で、名乗りは有り得ない。せめて奇襲にして欲しかった。

「すいません関羽殿、先行します」

つたく、あれじゃ体力配分も考えてない感じだな。

side 趙雲

猿鬼殿に言われた事を見返してやろうと、一人飛び出したがいつの間にか、賊の死体が足元に積み重なり足場が少なくなってきた

ている、それに息つく間がないせいで、体力もきつい。これなら戦を知らぬと言われても仕方ないか。

目の前に賊の、剣が迫ってきた、諦め目をつぶったが：衝撃がこないなので目をあけて見ると、額に小刀の様な物が刺さった賊が倒れていく所だった。

「ったく、生きるのを諦めて、どうする。戦の最中に目を閉じたら終わりですぞ」

呆れた様に呟く猿鬼殿だったが、懐から取り出し小刀の様な物を次々と賊に向かって放っている。

「ふむ、猿鬼殿その小刀の様な物はなんですか？」

「随分と余裕ができましたね。これは苦無って物ですよ。それと自分は佐助です」

「佐助殿のご無事ですか」

「関羽殿大丈夫ですよ。では趙雲殿も加えてひと暴れとしますか」  
黄巾党にしてみれば一人が三人になったただけだと夕力をくくっていられたのは、一分もなかったかもしれない。

関羽の青龍偃月刀には、間合いに入れず斬られる。

趙雲の槍の速さにも、ついていけず貫かれる。

佐助の素早さに翻弄され斬られていく。

「佐助殿そろそろ頃合いかと」

「ええ、お二方とも後ほど」佐助は風のように、後ろへとさがっていく。

「趙雲殿、もうひと暴れして、我らも引きますぞ」

「承知した」

佐助が一人減ってもその勢いは変わらずにいた。

「あつ、佐助君こっちこっち」劉備殿が、手を振って合図をしている。

「それでは、劉備殿、嫌かもしれませんがおぶりますよ」

佐助は劉備を背負ったまま、崖に向かっていく。

「あつ、佐助さんの頭に桃香の胸が。くっ、うらやましい」

思わず本音をはいた一刀に

「兵が命がけて戦っているのに、ありえないっすね」閻温の冷たい視線が向けられていた。

side 劉備

佐助君、凄い。私を背負っているのに、もの凄い早いだもん。崖を登ったと思っただら、ついてたし

「さて、劉備殿お願いしますよ」

よしっ、頑張つて石を集めるぞ。

自分で渡しておいて、なんだけども石つて怖いんだね。佐助君の石に当たった賊の人達が、次々に倒れていくんだもん。

賊の人達は、佐助君に誘導される様に弓兵さん達の所へ。

離れた所から見ているとまるで物語を見ている様だった。

弓兵さん達に変わって、愛紗ちゃんたちが、突撃したかと思ったら、鈴々ちゃんが横撃を加えて、白蓮ちゃんが挟み撃ちに。

呆然としていた私に佐助君が、終わったみたいですよと声を掛けてきて始めて我に帰ったんだもん。

みんなのところに戻る途中、佐助君がいつの間にかとった、こくわの実を内緒ですよと笑いながらくれた。

佐助君に背負われて食べるこくわの実は、いつもより甘く思えたのは、気のせいじゃないと思う。

佐助 趙雲の救出へ行く(後書き)

印字打ちは、弓矢より重宝された手段で慣れた人なら鎧の上からでも倒せたそうです。

## 幕間 黎 戦後に同盟を組む

side 黎

本当に、なんなんすか。ここの連中は、戦に勝ったって、はしゃいで宴をするって…

宴はあくまで兵士を慰労する為に行うんすよ。

佐助さんが、治療のついでだからって、こっちの被害を纏めてくれるんすよ。

「閻温ちゃんは、お酒飲まないの」

「劉備殿、飲むっすけど佐助さんがまだ治療中すから」

「桃香だよ。閻温ちゃん私の事は真名で呼んでよ」

「私達そんな仲良くないっすよ」

「だって、恋敵には正々堂々としたいだもん」

「何言ってるすか。私は北郷殿には、これっぽっちも興味が無いっすよ」

「やだなー、閻温ちゃん。御主人様はお友達だよ」

「意外っすね。美男子で優しい御遣い殿が劉備殿の好みと想像してたんすが」

盛り上がる宴の中、二人の間だけに緊張した空気が漂っていた。

「ぶー、馬鹿にしないで欲しいな。純粋な愛紗ちゃんなら、天の御遣いの御主人様が優しいだけでも、好きになるけど私は違うよー。」

「第一、恋敵って私が誰を好きなのか、わからないじゃないっすか」

「やだなー閻温ちゃん。佐助君の事を好きなのは周りにバレバレだよ」

「うっ。劉備殿は佐助さんのどこに惚れたんっすか」

「前から気にはなってたんだよ。でも今日の戦が終わった後にね、佐助君が喜ぶんじゃないかと、すっごい悲しい顔してたの。味方だけでなく賊の人達の死も悲しんでる様な感じだったな。それみたらなんかキーンってなっちゃって」

「わかったっすよ。私の真名は黎っすよ。真名交換したところで一つ提案があるっす」

「何、黎ちゃん？」

「同盟を組むっす。これから新たな人材を登用していくと、中には佐助さんの魅力に気がつく乙女がいると思うんすよ。それを阻止するっす。」

「うん、わかった。佐助君に変な乙女が近づかない為に」

「まず今危険な乙女いないか話しあうつす。」

「愛紗ちゃんは、御主人様大好きだから大丈夫。鈴々ちゃんは、恋愛とかまだ興味ないと思うし」

「公孫賛殿は、軽薄御遣いの言葉に喜んでいたし、趙雲殿は戦の後に軽薄御遣いが素早く声をかけていたから危険は少ないつすね。」

「でも、どうやってこれからの娘達はどうやって防ぐの」

「義勇軍の頭と軍師が組むんすよ。なら…」

「そうか。新しい娘は、できるだけ御主人様に近い配属にするんだ」

「そつすよ。佐助さんは新しい娘に自分からは近づかないつすしね。軽薄御遣いは、仕事にかこつけて、うつすい言葉を言うに決まってるつすよ」

「そつだね」「そつつすよ」

盛り上がる宴の中、違つ意味で盛り上がる二人は、異質な空気を放つていた。

.....

「あれつ、佐助の旦那震えてどうした」

「いや、なんか知らないが、俺の知らない所で何か動いた様な」

佐助の知らぬ間に、結ばれた同盟。

何人が参加する事になるか、わからない同盟ではあつたが、後に佐



助の運命に大きな影響を与えるものとなる。

幕間 黎 戦後に同盟を組む（後書き）

少しずつでも、増えていくお気に入りや感想はテンションがあがります。他の人の十分のくらいしかないんですけどね。

**幕間 二人の軍師対二人人の同盟（前書き）**

軍師はあわわとはわわな人です

## 幕間 二人の軍師対二人人の同盟

最近の活躍により、劉備達義勇軍への希望者も増えきて面接を行う事になった。

広場に集められたら希望者は、まず佐助が細作の可能性があるかどうかを遠目で確認。

疑いのない者は武官・文官の希望者にわかれ 文官を劉備と黎が、武官を劉備と趙雲が実力を試験する。

ちなみに一刀は、好みや趣味で選り好みをしかねないとの事で、任せられたのは、最初の挨拶のみとなった。

「はわわ、雛理ちゃん凄い人だね

「あわわ、朱里ちゃん私達大丈夫かな？」

黎が行った試験は政に関する言葉の読み書き及び意味を書く問題。算学は数式を書いて答えを導かせる物だった。

「はい、合格。二人とも明日から来て欲しいです」

「黎ちゃん随分あの二人はあっさり合格させたね」

「水鏡塾は教育方法もしっかりしてるっすから」

「朱里ちゃんさすが閻温さんだね。」

「うん。てつきり貴女ならこの戦どうするみたいなお問題かと思っただのに」

「読み書きの力を見ながら内政の能力をみる問題と計算式が建てれ

る事の確認と理論的な考え方ができるかをみたんだね」

-----

「戦は生き物つすからね、いくら奇策を思いつけても戦場の雰囲気  
に流されたり自軍の状況把握をできないと意味ないすつからね。軍  
師に使えるかどうかは内政で働いてもらいながらみるつすよ」

「人柄は私から見ても問題なかったよ」

「桃香は人柄を見抜く目がしっかりしてるから頼もしいつすよ。た  
だあの二人は……」

「うん。黎ちゃん可愛いから御主人様の内政補佐から始めてもらっ  
ね」

「ついでに、軽薄御遣いに読み書きと政治判断を教える役目を与え  
るつすよ」

「「まず、二人防げたね（つすね）」」  
部屋にはクッククックと計算高い笑いが響いていた。

孔明も鳳統も試験の目的は読めても、恋する腹黒二人の腹の底は読  
めていなかった。

幕間 二人の軍師対二人人の同盟（後書き）

佐助同盟 早速動きました。

## 幕間 同盟その二幕

義勇軍における佐助の役割は主に文官の仕事と近隣の村への伝達や視察となった。

読み書きは忍者時代に幸村から仕込まれており問題はなくできていた。

また幸村は報告する際にただ伝えるだけでなく、何故そう思って、どうすれば良いかまで考えさせて報告をさせていたので、佐助の視察報告は内政に携わっている公孫贛・劉備・黎に重宝がられていた。  
(殆ど劉備・黎が独占していたが)

「劉備殿、やはり村の食料の備蓄は少なくなっています。とりあえず今食べれる山野草の食べ方など伝えたので当面の飢餓はさげれますが兵を派遣して新たな開墾の手伝いを行うのも必要かと」

「さーすーけーくん。硬いよー。内容も話し方もかーたいー。きちんと真名で呼んで黎ちゃんみたいに仲良しさんな話し方じゃないよ返事しないよ」

「今は公務中ですし」

「いつつもそうやって逃げるじゃん。佐助君仕事終わったらどこかに消えるんだもん」

「鍛錬や薬草や食料の採集をしますので」

「きこえない。真名じゃなきゃ聞こえない。だからまだ報告も終わらないよ」

「と・と・桃香殿これでよいでしょうか」

「まだ駄目だよ。ちゃんと黎ちゃんの相手する時みたいに」(ふえー黎ちゃん言った事本当だ。佐助君には理屈より甘えた感じが効くんだ)

「ぬぐつ。と・桃香。わかった。

わかりましたよこれで満足だろ?」

(佐助君可愛いー。耳まで真っ赤。照れてるんだー)

「なんか桃香、最近黎に似てきたな…」

女性には慣れたつもりだが、いまだにいじられるのは慣れてない佐助であった。

-----

「ありがとう。黎ちゃん佐助君が真名で呼んでくれたよ」

「良かったっすね。こっちもよい知らせっすよ。あの新しいちびっ子文官に張虎がくいつたっす」

張虎それは、軽薄御遣いの呼び方が誰かに聞かれたらまずいので同盟でつけた一刀の呼び方

張り子の虎を略称しただけであったが

「思惑通りだけど、早すぎて、ちよつとね…」

一刀じゃなく佐助を選んで正解だったと感じる桃花であった。



幕間 同盟その二幕（後書き）

幕間 後一人は書きたいな 一刀・関羽・張飛・趙雲フラグは、  
たないがこんな駄文にリクエストあったら教えて下さい

幕間 佐助 一刀と自分を比べる(前書き)

なんか毛色の違う話になった

幕間 佐助 一刀と自分を比べる

天の御遣いの存在を示し人心の安定をはかる為に、一刀と警護の武將が近くの村々を巡回する事にした。

今回の警護は佐助となったのだが……

(しっかし、御遣い人気は凄いね。行く先々で人だかりはできるし、黄色い声援の嵐だもんな)

佐助は隣を歩く少年と自分を比べてみる。

すらりと伸びた背に長い足。

かたや子供並みの背に短い足。

あちら整った顔に優しい表情。

こちら猿みたい顔に無愛想な表情。

(つたく、どうして俺の周りにや、いつも美男子がいるんだろうね。昔は才、今は北郷殿か)

「さて北郷殿、ようやく戻ってきましたね」

「佐助さんの方が年上なんですから敬語はやめてくださいよ」

「軍師閻温からの指示ですよ。御遣いの効果をあげるには、まず周

りが敬なきやいけないって」

周りの人間から、ないがしろにされている者を民衆も敬わないのだから。

「神輿になる覚悟を決めたんなら我慢して下さい」

巡回の間、一刀の倍いや数倍以上の仕事为民の為にした佐助ではあるが、その殆どを一刀の手柄としていた。

劉備の義勇軍が注目されているのは、天の御遣いたる一刀がいてこそである。

董卓救出の為に義勇軍を強力にする決意をした黎は、周り人間には一刀を敬わせたし、手柄を一刀や義勇軍に集中させていた。

手柄をたて有名になれば董卓軍に所属していた閻温の存在を知れてしまうのと、佐助の隠密行動の妨げになるからでもあった。

その結果、天の御遣い北郷一刀の人気をさらに高まっていた。

街の前には、御遣いの帰りを待つ民衆がすでに集まっていた。

一刀を見つけると、ここでも黄色い声援の嵐がおきる。

反面佐助に注目する者は殆どいなかった。

(やれやれ、またこの扱いか) 佐助から思わず苦笑いが漏れる。

「才蔵やつと帰ってきたな」

「故郷ではなないが、俺達の住む村だし、帰ると嬉しいからな」

村の入り口に、農民の娘、商家の娘、職人の娘からクノイチまでが、おそらく村だけではなく近隣の娘達が集まっているよであった。

この村では細工師として忍び暮らす佐助と才蔵であったが、才蔵の美男子ぶりは近隣に響き渡っており、この有り様となっていたのだ。

この時も佐助に気づく者はおらず、しかも娘達の中には佐助が密かに思っていた娘もいた。

もちろんその視線は佐助ではなく才蔵に注がれていたのだが。

（あの時からだな、女子と距離を置き始めたのは）

-----

（時と場所変わっても、俺の見た目はかわらないからな。同じで当たり前か）

「帰りなさいっす。待ってたっすよ」

「佐助君お帰り。寂しかったよー」

（いや、変わったか、今の俺には一人も帰りを待っていてくれる人がいたんだ）

物心ついた時から忍びの修行をさせられていた佐助が憧れていた言

葉。

自分の帰りを待つ人への言葉。

佐助は自分の心中にあるの暖かさを味わいながら言った。

ただいま

と

**幕間 佐助 一刀と自分を比べる（後書き）**

ちなみに一刀は、武将以外にも侍女 街の娘に大人気

佐助は同盟軍二人と、兵士 職人 農家の男性に慕われてるって設定

佐助 王烈に再び出会う(前書き)

王烈 覚えてくれた人いるかな



## 佐助 王烈に再び出会う

佐助や黎の画策もあり、御遣い一刀の人気は熱狂的なものとなってきていた。

「独立の機運は高まったが」

「無い袖はふれないっすよ。義勇軍を維持する金がないんすよ」

（幸村様からもらった砂金を使えば、しばらくは維持できるが、それじゃ義勇軍における俺の力が強くなりすぎる）

そんなある日、公孫贄軍・義勇軍の主な面々に召集がかけられた、ある大商人が、今噂の天の御遣いに会いたいと申し出てきたのだ。

「王烈と申します。この度はお目通り嬉しく感謝に堪えません」

そこにいたのは、以前佐助達が道連れを頼んだ商人王烈である。長く艶やかな黒髪、透き通った白い肌に整った顔、何よりおしとやかな物腰、王烈は周りの女性から羨望の眼差しを、男性からは熱い視線を受けていた。

一刀は「大和撫子キターっ」と叫び全員に白い目で見れていたが。

「丁寧にありがとな、で王烈殿はどんな用件なんだい」

「幽州に来て、噂の天の御遣いが所属する公孫贄様にお目通りをお願いしない商人はおりませんから」

商人としては、自分達の印象が良いに越した事はなく、天の御遣いと懇意になりたいのは当たり前である。

「それにお会いしたい殿方がおりましたし」

途端に関羽を始めとする一刀と親しい女性達の顔が険しくなる。

「佐助様、以前は危ない所をありがとうございました」

王烈は顔を赤らめ佐助に頭を下げてくる。

途端に穏やかな表情になる関羽達

そしてうなだれる一刀。

そして

(ちよつと黎ちゃん何あの女。佐助君の知り合い?)

(幽州にくる時に同道した商人つす。佐助さんと私を賊退治の夫婦として噂する様に頼んだに佐助さんの噂だけ広げたくてもない女つす)

(ちよつ、なに夫婦って聞いてないよ)

(同盟前の話つすよ)

また一刀の被害者がでたねー位の軽い感じでしたのに、まさかの佐助狙い?が発覚し焦る同盟の二人であった。

「お久しぶりです王烈殿。別にお礼を言われるような事はしていませんよ」

「いえ佐助様、あの護衛に任せていたら商品どころか私の身も危うかったのですから是非お礼を致したく」

「お礼ですか。ふむ、ではちょっと話があるのですが後程私の部屋  
にお願いします」

「わかりました。お話し楽しみにしていますね」

（黎ちゃん、なんかいい雰囲気だよ）

（大丈夫ですよ。あの朴念仁の佐助さんが親しくもない乙女となん  
て有り得ないですよ）

「桃香、黎一緒に部屋に来てくれないか、おいつ、二人共話を聞け」

.....

佐助の私室

熱っぽい目で佐助を見つめる王烈、その王烈を敵意丸出しで睨む黎  
と桃花、全く気づかない佐助という微妙な空気が部屋には流れてい  
た。

「さて話というのは、他でもない商人王烈殿にお願いしたい事があり  
まして」

「なんなりとお申し付け下さい。義勇軍に援助は惜しみません」

「援助じゃなく商談ですよ。まず義勇軍で王烈殿達の護衛役をさせ  
て欲しい事と」

佐助は愛用の飴売り箱を開け、取りした袋を王烈に手渡した。

「これを貴女の才能に融資したい。その利益を義勇軍に還元して欲

しいのです」

「ちよつ、佐助さんそれは幸村様から貰った大事な砂金って言うってじゃないっすか」

「だから今使うんだよ。寝せておいたらただの砂と変わらないし、このまま売っても使つちまえば無くなるしな、増やすには才ある商人に融資するのが一番だ」

砂金を受け取った王烈の目から涙が溢れてきた。

王烈は日々に絶望していた。

商人としての才は一族の中でも抜きんでていながらも、まだ若いから、女だからと大きな商売を任せられずにおり、その才能を警戒した兄弟からは縁談を勧められたり、持参金や容姿だけを目当てとした軽い男達に口説かれるのも珍しくなかったからだ。

そんな中で出会った佐助は王烈の知っているどの男性とも違っていた。

甘言も言わず、誠実さが溢れる言動。

乙女にも引けをとらない強さ。

何気なくみせる気遣いや優しさ。

黎との夫婦の異名を広げなかったのは、軽い嫉妬でもある。

その佐助が、大事な砂金を自分の才能を信じて融資してくれるというのである。

「佐助様ありがとうございます。私は商売に励み必ずこの御恩に報いてみせます。」

もちろん佐助は、王烈の商売の才能も、一族における状況も確認済みでの融資であった。

「あと、私の真は節と申します。これから節とお呼び下さい」

「あー節殿、お願いします」

「さて、これで独立の算段が整ったわけだ、じゃ北郷殿達に報告しに」

「ちょっと、待つつす。王烈殿と乙女だけの話があるから佐助さんは部屋をでるっす」

「いや、ここ俺の部屋だし」

「佐助君、男の子でしょ。つべこべ言わずにでる」

その後、乙女三人による話し合いがもたれ、王烈こと節が同盟の三人目の加入者となった。

.....

後日

「佐助君、私も何か欲しい」

「桃香、何かって?」

「黎ちゃんに動物さんの形した飴でしょ?節ちゃんには砂金でしょ」

「私には」

「あー、流石に忍び道具つてのは、… そうだ、何日か待ってくれ」  
さらに後日

「ほい、桃香約束の物、一応手作りな。女性に物を贈り物をした事なんてないから、こんな色気ない物になって勘弁な」

それは手の平に収まる木製の猿であつた。猿が桃の実を大事そうに抱えていた。

「俺の国で、根付けて言うんだ。紐をつけといたから持ち歩きもできるぞ」

「ありがとう。佐助君嬉しいな。」猿「佐助が桃の実」自分を大事そうに抱えている、綺麗な着物や宝石より桃香には嬉しい贈り物となつた。

またまた後日

桃香が自慢した事により、黎に猿が夜明け空（黎明）を仰ぐ猿を彫つた印籠を、節には砂金の袋を抱えた猿が彫られた帯留めをつくる事になつた佐助であつた。

この後、佐助同盟の加入者の証として、佐助お手製の猿製品を持つ事とされた。

佐助 王烈に再び出会う（後書き）

王烈の真名は、閻温の真名にどうですかって感想で言ってくれたものを流用。

閻温は腹黒タイプなので節はあわないかと考え 大和撫子商人 王烈こと節となりました。

猿シリーズ同盟予定者の全員分考えれるかな。 最近 霧隠才蔵をだすか悩み中

佐助 親友と再開する（前書き）

佐助の場合、年や立場ちかいほーが絡みやすい事もあり才蔵登場



## 佐助 親友と再開する

義勇軍会議場

「佐助君のお陰で、お金の問題は解決したし後は兵隊さんだね」

「節がうまくやってくれているしな。兵隊に関しては、街や村の当主、後継ぎ以外の男女に声を掛けてある。」

「もつと大体的に行えば人が大勢集まるんじゃないか」

「一刀殿、当主や後継ぎがいなくなれば当然民が困る。そうしたら公孫贄殿の治安に響く。公孫贄殿は恩人であり桃香の親友ですよ。仲違いは避けたいんですから」

「後継ぎでなくても、大切な働き手が多いと思いますが」

「大丈夫ですよ関羽殿。声を掛けてあるのは、食料備蓄が少ない地域を中心にしてますし、街では自分の役割を見つけれず身体を余してる奴が殆どです。言い方が悪いかも知れませんが厄介払いに近いかもしれない」

「それに下手に募集を掛けて兵隊になれない民まできたら、今は困るだけっすからね」

「白蓮の周りには、俺達の事を快く思っていない奴もでてくるみたいだから独立には丁度いいのかな」

「御主人様の名声が高くなりましたしね、仕方ないですよ」

「ですね。でも公にするにはまだ早いので皆さんこの事は「内密」にして下さい。では解散します」

とりあえず会議を孔明が閉めて終わったのだが

### 同盟話し合いの場

「何嬉しそうに言ってるんすかね。それもこれも佐助さんの流言の結果なんすよ」

「黎ちゃん、大声で言いたそうだったもんね」

「当たり前っすよ。あの御遣いがさぼっている時も女と遊んでる時も佐助さんが働いた結果なんすから」

「仕方ないですよ。佐助様がそう仕向けたのですから。」

「そうだよ。佐助君の実力魅力を知っているのはは、私達だけで充分なんだし」

「そう言えば佐助さんが公孫贄に贈る物があるって言ってたっすけどなんすかね」

.....

出立の日

「今まで色々ありがとだね白蓮ちゃん」

「いやこっちもお陰でこの辺りの黄巾族を大分片づいたし」

「そう言えば、佐助君が白蓮ちゃんに贈り物をするって言ってたけど、何もらったのかな」

「ちょっ、桃香、顔が怖いつて。目が笑ってないつ。鎧あぶみつて、言つてな馬の鞍に取り付けると足を乗せれて凄く便利なんだ。なんでも王烈のところまで今度から販売するから使って欲しいと言われてな」

「鞍にお猿さんについてないよね」

白蓮の肩を両手でしっかり掴む桃香、目はまだ笑ってない。

「ないない。蓮の花があしらってあるだけだよ」

「なら良かった。それじゃ行くね白蓮ちゃん。たまに御主人様に会いに来ていいからね」

「う、うるさい。余計なお世話だ」

「白蓮ちゃん、お顔真つ赤にして可愛いー」

「桃香様、そろそろ出発致しましょう」

「うん、愛紗ちゃん。いこつ」

「でさ、これから具体的にどうしていく？」

「会議の話もきちんと聞いてない御遣いは、ただどしっり構え座つてればいいっす」  
今更な発言をする一刀に呆れを通り越して、相手にもしたくないという感じの黎。

「御主人様、我等は賊の被害にあつてる街や村を拠点に賊を撃破していきます」

「佐助君が、先行して情報を集めてくれるんだよね。愛紗ちゃん佐助君働かせすぎじゃないかな。体壊さないかな、体壊す前に私が寂しさに耐えられるかな」

「桃香様我慢して下さい。情報収集の確かさ素早さどれをとっても佐助殿にかなう細作はいませんので。何より佐助殿についていける細作がありませんので」

「佐助さんについて行ける細作なんていないっすよ」

正史

島津領内幸村の隠れ家

「才蔵様怪しい奴が幸村様に会いたいと来ていますが」

「嘘こくんじゃねえよ。この場所知ってる奴はみんな顔見知りだろが」

「失礼するぞ、ふむお主が才蔵か。御主人様に負けず劣らずの色男じゃの。これは一人で来て正解じゃな」

そこに現れたのは、いつも半裸の漢女卑弥呼である。

「死にたくなきゃ帰りな。お前みたいな化け物みて幸村様の目が潰れたら困る」

「ぬー、これはM心が。いや今はそんな場合ではない。主の友佐助が今どうしているか、知りたくないか」

「貴男は佐助が今なにしてるのかご存知なのですか」

「幸村様、今はお隠れの立場、そう簡単に出れては困ります」

「才蔵、隠居居の真似も飽きてな。何り可愛い部下の現状は知りたくないか。客人あがられよ」

「今度は渋くだんでいな男とは、嬉しいばかりよの。しかしこれでは佐助が卑屈になるの無理ないか」

卑弥呼から語れたのは、今佐助は異世界におり、ある武将の手伝いをしている事、また佐助を慕う女性が数名いる事を伝えた。

「佐助を慕う女性だ？騙すじゃなくか。んじやなきやお前みたいな化け物だろ」

「客人すみませぬ。佐助は何度かおなごに手酷く扱われた事があり親友の才蔵は心配してるんですよ」

「あいつが使えないと俺の仕事が増えるからですよ」

「ご心配なく儂が知ってる三人の女子は全員見目麗しく真剣に佐助を好いておる、この鏡をみてみい」

不思議な事にそこには黎、桃香、節の同盟三人が映し出されていた。

「ねえー佐助君まだー？黎ちゃん佐助からのお知らせ来てないのー？」

「佐助さんが出てまだ二日っすよ。私も我慢してるんすから」

「義勇軍に同行している時ぐらいは佐助様のお側にいれると思いましたが、二人とも警沢ですよ。たった二日会えないぐらいで」

「おいおい、こいつら揃いも揃って伴天連の術にでも掛かったんじねえのか。わかった佐助違いだ。あのチビ猿がこんな美人に好かれる訳がない」

「才蔵お主も素直じゃないな。あれだけ心配してた癖に。そんなに信じられぬなら卑弥呼殿に頼んで佐助のいる世界に行つて確かめてくればいいじゃないか」

「幸村様それならこの土地は誰が守るんで」

「島津領には、徳川の狸じじいも手をだせないから大丈夫だよ、頼めますか卑弥呼殿」

「決めるのは儂ではなくあくまで外史ですがの」

「一応佐助達に手紙を書くから、少し待たれよ。才蔵お前も一応旅の準備をしておけ」

「あの女達も鏡も信じられないが、主命なら準備しますよ」

数刻後

「さて才蔵、手紙とこれを持っていけ」

「幸村様それは愛用の村正じゃないですか。」

「隠居には必要ないしな。お前が選ばれなきゃ返してもらっさ。あと卑弥呼殿できるなら二人の近況等を伝えにまたお越し下さい」

「承知した。さて才蔵殿この鏡を見るがよい」

「佐助が選ばれたんなら俺は有り得ない思っが…」

部屋の中を佐助の時と、同じ光が包んでいく。

「馬鹿な部下ほどいなくなれば寂しいもんだな」  
残された幸村が一人呟いた。

- - - - -

「おい、こちらここはどこだよ。日本にこんな荒野ねえぞ」

「ここは人の想いにより作られし世界、外史じゃよ。ちなみここは  
三国志の外史になるがの。」

「三国志？んな話信じられるか」

「そのうち嫌でも解るがの。ちなみ先の三人のうち一人は、あの劉  
備玄德じゃぞ」

side 佐助

(さて、早く帰らないと黎が怒るし、桃香は泣くし、節は恨めしい  
目で見えてくるな)

待つ人がいる帰り道で佐助は見知った顔を見つけた。

「これは卑弥呼殿。こんなところで何をして？って才蔵？お前なん  
でここにいるんだよ」



「たく、相変わらず騒がしい猿だな。幸村様がお前が女に騙されるか心配だから見てこいとよ」

「俺を騙す女？誰だそれ」

「しらばつくれるなよ。まさかお前があんな美人三人に好かれる訳がないかならな。俺が確かめてやる、傷は浅いうちのほうがりやすいな」

「三人。あー黎達か。大丈夫だ。あの三人に限ってそれはない。それよりこの世界の事を伝えるぞ」

.....

「マジにここは三国志の世界かよ。それに主な武将が女だ。それに真名に天の御遣いだあ？」

「俺も最初は信じなかったが本当だ」

「この景色みる限り、日本じゃねーしな。お前が美人三人と親しくしている事以外は信じてやる」

「どんだけ信じないんだよ、まっとりあえず今から戻るから一緒に来い」

「いいぜ、真実がわかったら。やけ酒にお前の奢りで付き合っ  
てや  
ら」

「ぬかせ」

口では悪態をつく二人だったが、親友との久しぶりの会話に笑顔が溢れていた。

.....  
義勇軍拠点地

「佐助ただ今戻りました」

「佐助君おっそーい」

「佐助さんお帰りなさいっす。待ちくたびれたっすよ」

「佐助様、久しぶりにお会いでき節はうれしゅうございます」

「遅くなって、悪かったっす。不思議な事に昔の仲間に来てな。紹介したいから、みんなを呼んでくれ」

「この無駄に色男なのが、才蔵。一緒に雪村様にお仕えしていた」

「うるせいよ。ちび猿」

才蔵を見た女性兵士達は頬を赤く染めて熱っぽい視線をおくっている、いや関羽や趙雲達も目が離せないでいる。

一刀が美少年とすれば、才蔵は美青年、大人ならではの男の色気が溢れていた。

「佐助さん、才蔵殿も忍びなんすか」

「ああ、腕前は俺が保証するぞ」

「えー、ならなら佐助君だけが調査に行かなくて、よくなるんだよね」

「佐助様のお側にいれる時間が増えますね」

side才蔵

(この三人か)

「おい、お前ら何が楽しくてうちのチビ猿君をおちよくっている？事と次第じゃタダでおかねえぞ」才蔵からは殺気が満ち溢れてきた。

「おい、才蔵。冗談でも許せない言葉だぞ」

「チビ猿お前、最近鏡見てねーだろ。どう考えても女に好かれる面じゃねえんだぞ」

才蔵の怒りによる殺気は、腕のたつ武将でも、平気で居られぬぐらいのモノである、その為か主君の危機に反応すべき関羽や趙雲も直ぐに反応できずにいた。

しかし

「そんな事ないもん。佐助君は私の大事な人だもん」  
毅然として才蔵に相對する桃香。

「私の佐助様に対する気持ちを愚弄するなら斬りますよ」  
薙刀をかまえる節。

「待つつすよ。二人とも才蔵殿の考えは私達同盟と同じものつすよ。  
佐助さんを傷つけないんすよ」  
冷静な判断を下す黎。

「俺の殺気を浴びて平気などころか、きちんと対応するか。良かつ  
たな佐助よーやく、よーーやく奇跡的にお前に春がきたな。  
この三人を手放したらこんな奇跡二度とおきねーぞ」

先までの殺気は、嘘の様に笑い転げる才蔵であった。

佐助 親友と再開する（後書き）

佐助ふらぐ 一刀ふらぐ 以外に才蔵ふらぐもたちます 佐助ふら  
ぐと才蔵ふらぐら被りませんが

佐助 霸王と出会う(前書き)

作者の恋姫歴

二次創作で興味をもつ

無印購入も、一刀の無節操についていけずクリア前に放棄

当然真も未プレイ

なので展開は無印も真 混ざっています  
ご勘弁を

## 佐助 霸王と出会う

才蔵が加わり情報量、戦闘力が、格段に伸びた義勇軍。

「おい佐助。お前の事だ、黄巾党の首謀者の情報つかんでるんだろ」

「つかんでるっーか、なんっーか。張角三姉妹ってのはわかったが、連中あとは全く吐かないからな。下手したら舌を噛み切る」

「忍びの責めに耐えるとはね、あいつ等元は農民なんだろ」

「農民だからかもな。熱狂的な信者って感じさ。まるで一向衆だよ」

「小粒な集団をいくら倒しても効果はうすいぜ」

「今の義勇軍じゃ相手の規模間違えると、全滅だよ」

「優しい佐助さんの割には厳しい評価だな」

「うるせーよ。全員経験が足りなすぎるからな。今後の事は桃香や黎と相談済みだ」

「嬉しそうに真名呼んじやって。鼻の下伸ばして油断するんじゃないぞ」

-----

「この近くで陳留の曹操が黄巾の大軍と戦って苦戦してるっす。曹

操は勢いがあるから共闘できれば評判も高まるっす」

「姦雄曹操か、佐助こっちの曹操はどんな感じだ」

ちなみに才蔵は、劉備達を見て色んな意味で、衝撃を受けたらしい。

「節の話じゃ、背は小さいが迫力は凄いらしい」

「チビ同土話が合っくんじゃねえのか」

「あー、曹操は女だが女好きらしい、節も狙われて苦労したみたいだ」

「へー、なら佐助お前は恋敵ってどこか」

side 曹操

「義勇軍が共闘したいですって、秋蘭そんな骨がある義勇軍なんていたかしら」

「最近噂の天の御遣いという男を擁している劉備のところだそうです」

「天の御遣いね。確かあそこには関羽や王烈がいるはずね」

「それと一時期噂になった猿鬼もいるそうです」



「とりあえず目通りを許可するわ」

「共闘ね、とりあえずあなた達の実力を見たいから武将による模擬戦を行って勝ったら許可するわ。負けたら関羽と王烈は、こちらにもらうのが条件ね」

「二対二の形式でやらせてもらおうよ」

（劉備達の義勇軍の将は、一人一人は強いけど、得意とする武器は槍とかの中間距離が殆ど。

それなら得意武器が幅広い我が軍の将が有利ね）

「ならこっちの代表は俺と才蔵でやらせてもらう」

（向こうの代表は、多分あれが佐助ね。それにしても、本当に猿ね。もう一人が才蔵からしら。男二人で勝てるのか見せてもらうわよ）

「こっちからは、まず季衣と流琉まかせたわよ」（噂じゃ、佐助は刀を使うみたいから近づくのも難しいわよ）

「つるぺたキターッ」

（あれが天の御遣い？関羽はあんな品のない男が気に入ったって言うのかしら。まだ佐助のほうがましよ）

季衣も流琉も懸命に狙うが、相手が悪すぎた、途中で軌道を変えない鉄球や円盤では佐助達に易々と避けられてはしまうのだ。

「流琉あたらないうー」「季衣焦ったら負けだよ」

瞬間佐助達の動きが止まる。

「流琉今だよ。向こうは進路がぶつかって動きが止まったみたいだよ」

「うん。勝てたね」

.....

「何かしら。今の動きは」

「見事ですね。避ける事で季衣達を焦らせ、その後、動きを止めて狙わせる。迫ってきた鉄球と円盤に蹴りを入れる事で軌道を変えて鎖と紐を絡ませましたね。ああなったら季衣達はどうしようもありません」

「ごめんなさい華琳様負けちゃいました」

「大丈夫よ。それより御遣いに変な事されなかったかしら」

「御遣いさんは来なかったですし、佐助さんも才蔵も紐を解くの手伝ってくれました」

「あの二人は御遣いよりは、ましそうね」

「いやらしい目で見てきた御遣いさんとは全然違いますよ。佐助さんは共闘するかも知れないからって動物の形した飴くれましたし」

「それなら良かったわ。次は春蘭・秋蘭お願いするわ」

（春蘭の大剣も秋蘭の弓も、かなりのものよ。さて今度は、どんな勝負を見せてくれるのかしら）

華琳 side . e n d

「佐助、俺はあっちの物静かな弓使いとやるから、デコを頼むぞ」

「わかったよ。霧隠れを久しぶりに見せてもらうぞ」

才蔵の特徴は、忍びの中でも抜きん出た動体視力の良さである。

相対した敵はことごとく攻撃をかわされ、

まるで才蔵が霧の中に隠れたかの様に感じてしまう。

まして正確無比な秋蘭の弓は、乱れがない分交わしやすいのであった。

「まさかこの私がこんなにも、あっさり近づかれるとはな」

「んな事言つて本気じゃなかつたらうが」

「ふっ、どうだろうな。でも姉者は強いぞ」

「ぬー。猿の様にチヨコマカと。お前動くな」

佐助に剣を交わされまくっている春蘭は、明らかに興奮してきている。

「交わさなきや、怪我するじゃないか。今は戦の前だぞ」

「うるさい。避けるしか能のない猿はだまれ」

「やれやれ、なら決着をつけるか」

「武器も構えないで何を言う」

さらに興奮した春蘭は、剣を振り回し、そこら中の地面に穴を作つていった。

「そこから動くな」

佐助を捉え一気に襲いかかる春蘭であつたが、佐助が後ろに飛び退くと、そこには自分であけた穴があつたのだ。

「う、うわー」

見事につまづく春蘭、佐助は春蘭が手放した大剣を空中で掴み転んだ春蘭に向けた。

「これで共闘決定ですね」

-----

「佐助のお兄ちゃん。鈴々にも飴を作って欲しいのだ」

「張飛殿がまいませんよ。何の形の飴です？」

「出番って文字を飴にして欲しいのだ」

「…わかりました」

佐助 霸王と出会う（後書き）

星もでてないや。

小説書いて実感 お気に入りが増えたり、感想書いてもらえるため  
つちや嬉しい。

これからも駄文にお付き合いください

佐助 共闘する 才蔵鈴々の になる

共闘にするに辺り現状の説明が曹操軍からあつたのだが。

side 佐助

「早い話が夏侯惇將軍が調子にのつて暴れまくつて、びびつた敵が籠城したと」

「で糧食も少なくなつてきて困つてると。馬鹿の尻拭いは好きじゃないが、こればかりは俺らの仕事だな。行くぞ佐助」

「ぐつ、馬鹿とは私の事か」

夏侯惇が、才蔵の一言で興奮している、いや仮にも將軍職の人間がそれはまずいだろ。

「姉者、落ち着け。姉者を愚弄しておいて、できませんでしたでは、ただですまんぞ」

反対に落ち着いている夏侯淵將軍が、こちらに釘をさしてくる。

「とりあえず見ていて下さい。んじゃ黎行つてくるから策はまかせたぞ」

「佐助さん任せるつすよ。さて朱里ちゃん雛里ちゃん軍師の仕事つすよ」

「はいっ！ やつと出番だね雛里ちゃん」

「良かったね。朱里ちゃん、でも私達まだ一回も言葉かめてないよ」  
曹操軍との軍議にむかう軍師達。

「佐助君、いつてらっしやーい。あーなんか今の私旦那様をお仕事に見送る奥様みたい。はれっ鈴々ちゃん才蔵さんを見てどうしたの？」

「と、桃香お姉ちゃん、なんでもないのだ」

「へーもう新婚気分か。いやー佐助君だっけ。見ている、こっちが照れくさくなるぜ」

「いいから早く行くぞ」

「待てよ。さ・す・け君」

才蔵のヒヤッヒヤッヒヤッという笑い声と共に忍び二人が陣から消えていった。

-----

「で佐助、こっちの城はどうだ？」

先と打って変わって真剣な表情の才蔵。

「皇帝がいた洛陽の城でも、余裕で忍び込めたよ。まっ、こっちは忍びはないから対策がしてなくて当たり前なんだがな」

「んじゃ。火でも放つか」



side 曹操

あの閻温とかいう軍師はもう少しすれば、賊が突っ込んでくるっすから、鶴翼の陣で待ってればいいっすよとか言ってたけれど

「曹操様、賊の城から火の手があがっています。」

黄巾党にしてみれば、踏んだり蹴ったりであつたたるう。籠城をしていたら、火であぶりだされ逃げた先にきちんと陣形をはった軍隊がいるのだから

（あの二人面白いわね。男なのは残念だけど我が軍に欲しいわね）  
今までの苦戦が、嘘のように片付いた曹操は、新たな人材確保に策を巡らせていた。

side 佐助

俺と才蔵が戻ってくると、いつもの三人に加えて珍しく張飛殿出迎えてくれた。

「ただ今つと、張飛殿どうしました」

「間違いないのだ」

あれっ、張飛殿がウルウルしている。

「才蔵のお兄ちゃんは、鈴々のお父さんなのだ」

「「えっ？」」  
突然の事に固まる俺たちを無視して、張飛殿は才蔵にすがりついて泣いている。

「なあ、桃香は確か張飛殿と幼馴染みだよな。どうゆうことかわかるか」

「えー、佐助君でも鈴々ちゃんのお父さんは大分前に戦に巻き込まれて行方不明なんだよ。……あつ！」

「どうした桃香」

「才蔵さんの顔どっかで見た事あると思っていたら、鈴々ちゃんのお父さんの絵姿とそっくりなんだよ」

「言われてみれば鈴々の大事にしている絵姿と瓜二つですな」  
騒ぎを聞き駆けつけた関羽殿も関心している。

「おい佐助。納得してないで、なんとかしてくれ」

そう言ってる割には、きちんと張飛殿の頭をあやす様に撫でてるし、お前意外と父性が豊かだったんだな。

「桃香か関羽殿。とりあえず張飛殿を落ち着かせてくれ」

義姉二人により、少し落ち着いていた張飛殿から父親の絵姿も見せてもらったが……

絵姿は、小さいな箱に収められていた、年数がたち古ぼけてはいるが、とても大切にされていたのかがわかる。

「あー、他人のそら似なんてもんじゃないな。」

「そうだね佐助君。こうして見ると本当にそっくり」

「いや似ていても、俺こないだこっちに来たばっかだし。つうか佐助俺とお前同い年だぜ、計算があわないだろうが」

「お父さんは鈴々の事嫌いだから知らないふりするのだ」張飛殿ウルウルから、本泣きに移行中。

「いいんじゃないか才蔵。義理の親娘にでもなれば」

「佐助、お前人事だと思って」

いや、才蔵お前そう言いながらも、服を摘んでる張飛殿を振り解いてないし。

「どうせ俺ら下忍は家族もつなんて夢のまた夢だったろ。張飛殿は強いし安心じゃないか」

「佐助さん家族持てないってどうゆう事っすか」

黎始め佐助同盟が詰め寄ってくる。

「あくまで俺ら下忍の話な。家族をもつと執着ができて忍び仕事に支障をきたすって上忍が許さないのさ。」

「そんなのあんまりだよ。誰でも好きな人と一緒にになりたいのに」

「ありがとな桃香。まっでも今の俺達には忍びの掟は関係ないしな」

「そうですね。今の佐助様は忍者さんじゃなく武将さんなんですから」

「そうっすよ。佐助さんは結婚しようが子供作ろうが自由っすよ」

「よかったー。これでー安心だね」

「何が安心だ。この色ぼけ四人組。話ずらして自分達だけの世界に浸るんじゃねー」

「何で先からお父さんは鈴々の事ちゃんと見てくれないのだ。やっぱり鈴々の事嫌いだから捨てたのか」

幼くして、親と別れた鈴々にとって絵姿の父親は心の支えであった。その父親と瓜二つの才蔵を父親と信じたいのであろう。

(まずい。今こいつの目を見たらまずい。)

元々才蔵は子供好きで、父性も豊かである。下忍の自分には無理だとおもっていたが家庭をもつ夢があった。

今泣いてる鈴々と目を合わせたら引き離す自信は全くなかった。

才蔵の不安を感じたのか、本泣きになる鈴々。

「泣かせた。泣かせた」

「いーけないんだ いけないんだ」

「ゆーきむら様にいつてやるー」

「おい、色ぼけ四人組息を合わせて変な歌を歌うんじゃない！」

「お父さんをいじめるのは、よすのだ」

涙目になりながらも才蔵を庇うように立つ鈴々。

その意地らしい姿に才蔵は

「大丈夫だよ鈴々。お義父さんはこれ位じゃ負けないよ」

「お父さんが鈴々って言ってくれたのだ」

才蔵に抱きつく鈴々、その目から先とは違う嬉し涙がこぼれていた。

## 後日談

「なあ才蔵。もし北郷殿が張飛殿に手を着けたらどうする」

「おい佐助。あの馬鹿御遣い、鈴々になんかしたのか」

「もしもの話だよ」

「鈴々は俺を倒せる男以外には嫁にやらん。可愛い義娘をあんな甲斐性なしの御遣いにやる訳がないだろう」

（親馬鹿だ。親馬鹿がいる）

佐助 共闘する 才蔵鈴々の になる（後書き）

才蔵と鈴々が義親になったが、鈴々 下手な義母認めないかもな！。  
当初の才蔵の役割が：

佐助 修行の旅で孫策と出会う(前書き)

修行で誰と出会うか悩んだ末に孫策に決定。  
ちやいけない。

距離や日数は気にし

## 佐助 修行の旅で孫策と出会う

曹操軍と共闘を続け、黄巾党の平定に尽力した事により、桃香こと劉備は平原の相に任命された。

### 桃香執務室

中からは「うー、あー」と苦戦からか飽きてる為か桃香の唸り声が聞こえてきている。

「劉備様失礼いたします。佐助です」

机に突っ伏し半べそになっていた桃香だが、佐助の声を聞くなりガバツとと起き上がり喜色満面の笑顔になる。

「佐助君何かな。私に会いに来てくれたんだよね？」

「ええ、劉備様にお問い合わせきました」

「佐助殿、桃香様は今執務室中です。仕事以外の用件は後ほどにしてください。でも良かったです」

「もう、愛紗ちゃんの意地悪。で佐助君お願いって何？逢い引きなら何時でも仕事中でも大歓迎だよ」

「今軍も落ち着いていますし、しばし暇をいただきたく。期間は長くはありませんので」



「「えっ！」」

「佐助殿、理由をお聞かせ願いますか？」

「これから戦はさらに熾烈を極めると思っています。その対策と違ってもらえれば」

「わかりました。しかし佐助殿は我が軍に無くてはならない存在、私達だけでは決めかねます。他の将にもはかりたいと思えます。桃香様もそれでよろしいでしょうか…と、桃香様」

「グスツ。ざづけ君私の事ぎらいになっだから居なくなっちゃおう？そんなの嫌だよ」

桃香は赤子の様に大声で泣き始めた。

「ち、違っつて。りゅいや桃香の事を嫌いになる訳ないから」

「だっでー。ざっぎも真名で呼んでくれないんだもんー」

「それは今は公務中だからで。できるだけ早く帰るし帰ってきたら好きなだけ一緒にいるから」

「ほんどう？本当にぎらいになっでない？」

「当たり前だっつて」

そんな話をしていると戸が開いて

「才蔵入ります」

「鈴々入るのだ」

「お父さん。佐助のお兄ちゃんが桃香お姉ちゃんを泣かせてるのだ」

「鈴々、見ちゃいけません。おい、こら人の娘に痴情のもつれ何て見せてるんじゃないやねえよ」

「そこの親馬鹿、訳の分からない理由で怒るな」

また戸が開いて

「佐助さん、旅にでるんなら私も連れていくつすよー」  
既に旅支度をしてる藜。

「佐助様、節は何時までもお待ちしておりますから。ウウツ」  
顔を伏せながら、嗚咽をもらす節。

「どんな報告うけたら、そんな答えになるんだ。修行だよ、忍びの修行。勘を取り戻したい技があるから山籠もりをしたいんだよ」

「佐助山籠もりって、心の一法か」

「そつだよ才蔵。今のままじゃ敵軍の武将に負けるからな」

「お父さん、心の一法ってなんなのだ」

「鈴々、心の一法はまたの名を不動金縛りの術って言って、相手に使つと一瞬にして体の自由を奪う技なんだよ」

「そんな技があつたら、無敵ではありませんか」

「お父さん、鈴々も使いたいのだ」

「あれは技をだすまでに隙がありすぎる。戦場でそれはまずいからな。佐助はともかく鈴々の可愛い顔に傷がついたら大変だ。お嫁さんにいけなくなるぞ」

「鈴々はお父さんのお嫁さんになるから大丈夫なのだ」

「やばい。お父さん嬉しすぎて泣いてしまつ。おい、佐助どうせそのまま行くんだろ。俺はこれから愛娘との時間を過ごすんだから早く行け」

「駄目つすよ。佐助さん旅支度なんもしてないつすよ」

「黎、今回は支度はいららないんだよ」  
「そう言つと窓から飛び出て姿を消す佐助。」

「忍びが技を磨き直す時は、ひたすら食い飲み抱き己を充足させるか、自然に身を起き己を研ぎ澄ませていくんだよ」

「才蔵さん、佐助君大丈夫だよね」

「お前らがいる限り大丈夫ださ。俺もここに来て守る者ができたからわかるが、あいつはお前らを守りたいから悔やみたくないから行ったんだ。信じてやれや」

才蔵は鈴々の頭を撫でながら優しい顔で伝えた。

side 関羽

佐助殿が修行にでて、早一週間。佐助殿の仕事は、才蔵殿が肩代わりしてくれる事になり一安心した筈でしたが…

「桃香様やる気をだして下さい」

「うー、なーにー愛紗ちゃん」

桃香様は現在机にへばりついて微動だにしていない。

書類の間違いは可愛い方で下手をしたら仕事その物に手がついていない。桃香様の仕事は、ご主人様が負担されているのだが。佐助殿お願いだから早く帰って来て下さい。

side???

あの不思議な男との出会いは祭からの報告が始まりだったわね。

「人喰い虎？」

「そうだ策殿。既に何人かの民が被害にあっている。策殿も重々気をつけられよ」

「わかってるわよ祭。呉復活までは無茶しないわ」

そうは言ったものの、こんな面白そうな話をほっとく手はない。

虎の被害が出た森に入り村に声が届かない深さまで来た辺りで、猛烈な獣の臭さを感じて振り向くと噂の主がそこにいた。

「後ろから襲うのは女を怖がらせるだけで嫌われるわよ。」

（まずいわね。冥淋のお説教だけで済めばいいんだけど）

虎との距離を計りながら体勢を整えていると突然それは降ってきた。私と虎の間に、突然現れたのは多分男だと思う。背は小さいも、その気配は先の虎をも凌駕していた。

（この私が男に恐怖を感じている？何者なの？）  
私に関心がないのか男は振り向きもしない。文句の一つでも言ってみようとしたその時

「シエーツ」

男が虎に向かい十字を切り妙な気合いを入れたかと思うと、突然虎は体を硬直させたまま動かなくなってしまった。

side 佐助

城からでて山に籠もり感覚も戻って来たので技を試す獲物を求めていると丁度よい虎を見つける事ができた。

人を喰ったのか人を見つけても動揺しない、そいつは技を試すにはうってつけである。

(決まらなきゃ俺が餌になるだけさ)

無事に動かなくなった虎にトドメを刺すと後ろから強烈な気配を感じ振り向くと

「ちょっと貴男。こんないいを虎から救ったのなら何か言つもんじゃないの?」

「人がいるのに気付きませんでしたので申し訳ありません。あとこの場所と今日の日付を教えて下さい」

「乙女の言葉を見視するなんてもてないわよ」

ここは荊州らしく日数も城を出て二週間近くたっていた。

(今から帰ると合わせて三週間か。土産がこの虎じゃ機嫌なおらないだろうな)

「すみません、この近くの街で虎を売れる店と、女子が喜ぶ様な土産を売っている店があったら教えていただけますか」

「全く関心を示されないなんてある意味ショックね。まっ、民を守る者としては虎を退治してくれたお礼もしなきゃね。いいわ着いてきなさい」

-----  
孫策と名乗った女性に案内してもらえたお陰で虎は結構な値段で売

る事ができた。

「後は女が喜ぶお土産だっけ？確か今人気の装飾品のお店があるわよ」

「孫策殿何かから何までありがとうございます」

「お礼を言わなきゃいけないのはこっちよ。あのままじゃ私も無傷じゃ済まなかつたらうし王としても民を襲う虎を退治してもらえたんだしね」

「王族の方ですか。これは失礼致しました」

「いいわよ。今は名前だけの王なんだし。それより佐助が使ったあの変な技を教えて」  
孫策様は手をヒラヒラさせて笑顔で聞いてくる。

「あれですか。あれは心の一法と言いまして、かけた相手を気絶させる技と思ってもらえれば」

「強力な技だけど隙が多くて戦場では使いにくそうね」

「ですね。失敗した時は端から見たらへんな奴にしか見えませんか」

「確かにね。大声でシエーツもんね」  
笑いながら十字を切ってみせる孫策様には桃香とは違う上にたつもの魅力が感じられた。

「さてこのお店がそうよ。その娘に振られた私のとこに来ない？佐

助は強いし良い待遇で雇ってあげるわよ」

「そうならない様に努力しますよ」

「ブーブー。こんないい女に誘われたら直ぐに来るもんでしょ」

「一応平原の相劉備に仕える身ですし」

「劉備か、結構可愛いって聞くけど、もしかしてお土産は劉備に？それはなかなか無謀な戦いを挑むわね」

（佐助は背も小さいし顔もお猿さんだし、はたして上手く受け取ってもらえるかな？）

「桃香寂しがり屋ですから。三週間会わないでいたから宿めるのが大変ですよ。あっそれとそれもお願ひします」

「へー。やるじゃない真名預かってるんだ。でも三つは買ひすぎじゃない？」

「残り二つは違う人様ですから、さて孫策様色々ありがとうございます」

佐助から聞きだした後二人の名前は董卓に仕えていた閻温と有名な商人王烈だった。二人とも能力も魅力もある女性じゃない、佐助侮れないわね。



佐助 修行の旅で孫策と出会う（後書き）

才蔵が、予定と違いクールさがなくなり崩れていく。この駄文も見てくれる人がいて驚きと感謝です

佐助帰還する（前書き）

進まない話が進まない

## 佐助帰還する

劉備軍会議場

朝議

「内政も大分落ち着きお陰で税収も安定して来ております。それで今後の事ですが桃香様、桃香様」

「ボー………ツ、なっ何かな愛紗ちゃん」

「しっかり話を聞いて下さい。次の議題ですが閻温殿」

ソワソワソワソワ

「な何っすか？税収なら上がっているすよ」

「その議題は終わりました。王烈殿街の様子はどうでしょうか」

キョロキョロキョロ

「はい、商売はお陰様で順調です」

「つ、次の議題です」

ポーーーーーッ

ソワソワソワソワ

キョロキョロキョロ

「お三方、いくら佐助殿が今日辺り帰ってくるとはいえ気になさり

すぎです」

「えっ、佐助君帰ってきたの？」

「ど、どこっすか？」

「佐助様、節はここです」

「誰も佐助殿が、帰ってきたとは言っておりませぬが」

「ひどーい。愛紗ちゃん佐助君いないよ」

「う、嘘はいけないっすよ」

「関羽様非道いです」

佐助と才蔵が設置した遠国狼煙から、数日前に佐助帰還の知らせがあり今日辺りに佐助が帰る為佐助同盟の三人は落ち着きを失っていた。

「才蔵入ります。よっ朝議ご苦労さん。佐助の奴帰ってきたみたいだぜ」

「はいっ、朝議は終わり。私の権限で強制終了」

「桃香、節行くっすよ」

「佐助様お待ちしております」

三人は答えを聞く前に走り去って行く。

「桃香様まだ朝議が」

「愛紗三人共行っちゃったみたいだよ。今日ばかりは仕方ないよ」

「ご主人様」

内心これでようやく仕事が減り遊びにいける筈と目論む一刀であった。

side 佐助

たかが三週間されど三週間、忍びの技を磨き直すつもりの旅であったが、何気ない日常のありがたみを実感するはめになった。

「よう佐助。心の一法は、うまく使える様になったか」

「才蔵世話になったみたいだな。どうしても隙ができるから使い方が次第ってとこだ」

「貸しはでかいぜ。なんせお前の大事な三人は、ここんどこ仕事か手についていなかったしな。ほれ、噂をすればだ」

「佐助君お帰りなさい。会いたかったよ」

「佐助さん。次は私も連れて行くつすよ」

「佐助様。無事なお姿を見て安心しました」

三人の登場で、一気に賑やかになる。

「ああ、ただ今。お陰で納得いく仕上がりになったよ。技の披露だが……」

「佐助君。お部屋に行ってゆっくりお話しよ」

「いや、まず帰還の報告を」

「ここに城主と軍師がいるから問題ないつす」

「荷物の整理もあるし」

「私がやりますから大丈夫でございますよ」

「城のみんなに土産が」

「それは私達が先だよ（つすよ）（ですね）」

.....  
その日の夜城の屋根にて

「よっ、佐助ようやく解放されたか」

「ああ、土産も喜んでくれたしな」

唐突に真剣な表情になった才蔵が

「気を緩めるなよ佐助」

「ああ、家族をもつたばかりに死んだ仲間が嫌って程見てきたからな」

「己も捨てて初めて忍びか…」

それは忍びの修練の時に教え込まれた言葉。

己の命への執着もなくするのが忍びだと。

「あの三人は俺を捨てて、他の男を選んでも誰も不思議がらない女だ。何がいいのか、こんな猿を必要としてくれるんだ。あいつらの為なら、手前の命なんざに執着はしないさ。」

昼とは違う醒めた目の二人の忍びの間を夜風だけが通り抜けていった。

佐助帰還する（後書き）

どうしようも幕間をかくか悩み中



本日の平原は蝶仮面後に 影 佐助が頭痛となるでしょう

劉備軍会議の間

「最近、蝶仮面なる不逞の輩が街を騒がせております」  
えらくご立腹な関羽殿の発言であった。

「関羽殿、あまり怒るとシワがでてきて御遣いの坊主に嫌われちまうぜ」

「才蔵口がすぎるぞ。して関羽殿その蝶仮面とはどの様な者ですか」

関羽殿の話によると蝶仮面とは、白い着物を纏い蝶を模した仮面をつけ夜な夜な出没する謎の者。

酔って乙女に絡む者いれば打ち倒し、泥棒がいれば取り押さえる、無銭飲食にまで対応し、民に中々の人気らしい。

「ふむ、その様な素晴らしい御人には是非一度お目にかかりたいものですな」

何故か嬉しそうに趙雲殿が発言する。

「何を言うか。星、ご主人様や桃香様の治世が馬鹿にされている様なものだぞ」

「そうつすよ。第一夜に蝶はでないんすよ。正しく蛾仮面いや蛾面と名乗って欲しいっすね」

「なっ、何を言う黎。蝶仮面はそれは美しい者と聞くぞ。蛾面など

もつてのほかだ」

「蛾でも蝶でも対して変わらねえさ。夜は忍びの天下だ。俺等にまかせときな」

既に俺も参加決定ね。仕方ないか、他の人は、夜目なんてきかないだろうし。

「お父さん、鈴々も行きたいのだ」

いくら張飛殿の運動神経が優れているとはいえ、夜の忍びに着いて来るのは困難、さすがに才蔵も断るだろ。

「そうか。鈴々も蝶仮面に会いたいのか、夜遅いから仕事終わったらちゃんと仮眠するんだぞ。時間になったらお父さんが起こしてあげるからな」

あいつ、親馬鹿に磨きが、かかってきたな。

変わり果てた忍び仲間を見ていたら

「ねえねえ、佐助君。私達は何時頃に行こっか？晩御飯も一緒に食べよ。そして夜道を二人で歩いて、手なんか繋いだりしちやて」

「桃香様、夜に出歩くななんて危険です。お控えください」

「大丈夫だよ。何かあったら佐助君が守ってくれるし」

「愛紗安心するっすよ。私と節も行くっすから」

「えー、佐助君と二人っきりがいい」

「抜け駆けは、なしっすよ」

今回も俺の意見は、聞かれずと……

- - - - -

その日の夜

結局、四人で晩飯を食べ（城主に飯を奢るなんて、忍び時代にはありえない経験をさせれたが）夜の繁華街を、蝶仮面を探して歩いていると

「よー、ちび助。きれいな姉ちゃんを三人も連れて羨ましいな」

「一人ぐらい分けてもバチあたらないぜ」

「いいや、全員だ。その方が姉ちゃん達もいいよな」

わかりやすい酔っ払い三人組が、絡んできた。

「佐助君は小さくて可愛いし、強いし優しいの。邪魔しないでよ」

「酒臭いから近づかないで欲しいっす。後あんた達が佐助さんに勝てる所は皆無っすよ」

「佐助様との、大事な時を邪魔するなんてありえませんか」

佐助同盟の三人が口々に酔っ払いを罵る。

（蝶仮面には会えないが、こいつら倒さないと後がうるさいな）

その時

「乙女の甘い一時を邪魔する、無粋な輩。天が許しても、この蝶仮

面が許さない」

……屋根の上に居るのは、趙雲殿だよな……

「うわー、星ありえないっす、年を考えて欲しいっす」

「黎様、みんな思っても言わないだけなんですから」

「わー。蝶仮面さん格好いいー」

「一名程ずれた発言が聞こえてきた。」

佐助が啞然としていると

「よっ、佐助初日から不審者四人に出くわすとは、流石だな」

「お父さん、酔っ払いは三人しかないのだ」

「だよね、鈴々ちゃん。蝶仮面さん格好いいよね」

「桃香お姉ちゃんもそう思うか？」

「そうか！鈴々はああゆうのが好きなのか」

酔っ払いが、目標を変えたらしく

「ちびっ娘はねる時間だぜ、お父さんと帰りな」

「せめてまな板を卒業したら遊んでやるよ」

小さいって、だけで張飛殿にしたのか。

「鈴々は、これから成長するのだ」

胸の事を気にしてるのか、ウルウルとしている張飛殿。

「蝶仮面殿せつかく出てきていただいたのですが、今片づくと思いません」

あの三人失敗したな、今や磨きをかけまくった親馬鹿がいる目の前で愛娘を泣かすなんて

「お前ら、人の可愛い娘を泣かせたらどうなるかわかってんだろくな」

おー才蔵怒ってるねー。

その後の光景は阿鼻叫喚そのものだった、桃香なんて泣きそうだし。

「痛いかな？痛いのかな？おら、でも鈴々の繊細な心の痛みはこんなもんじゃねえんだよ」

「蝶仮面殿、警備の兵を読んできて下さい。後医者も」

「佐助殿…了解した」

俺はあの親馬鹿を止めないな…

.....

黎執務室

「昨日はお疲れさん」

「佐助さんおはようっす。星にも困ったもんよね、何で民は気づかないんすかね」

「この街の民は優しいからな、気づかないふりをしてくれているんだろ」

「とりあえず、今夜は俺一人で行くから」

「私も用事あるすつから、絶対ぜーったい一人で行くんすよ」

- - - - -

その日の夜

出掛けようとしたら桃香が訪ねて来て、半ば強引に夜警中。

「ねえねえ、佐助君恋人の振りしたら昨日みたいに酔っ払いさん来ないかな？そうだ！腕組んじやおうよ」

桃香が近づいて来たその時

「泥棒だ、そいつを捕まえてくれ」

商人の必死な叫びが響いた。

こつもお約束な展開だと、蝶仮面来るだろうな。

しかし……

「天が呼ぶ」「地が呼ぶのだ」「人が呼ぶ(のだ)」

「呼ばれて闇から現れ、闇に消える」

「仮面の親子、忍者霧影参上」

「鈴影参上なのだ」

……才蔵、屋根の上で何をしている？

あれか昨日張飛殿が落ち込んだから、元気づけようとしたのか！

つてか、真つ青な忍び服はないだろ？

張飛殿は真つ赤か。

手裏剣や鈴の模様がついた仮面なんてどこで買ったんだよ。

幸村様、才蔵が取り返しが、つかない事になっております。

- - - - -

また翌日の朝

「仮面の忍者など、蝶仮面の真似にしか過ぎないので」

趙雲殿えらく憤慨中、仮面の忍者は活躍したらしく、蝶仮面より人氣がでてるらしい。

才蔵と張飛殿は、勝ち誇っているし

「佐助君、夫婦忍者桃影と猿影も素敵だと思っただけだなー」

やばい、頭が痛くなってきた。

桃香が忍者って、……使えるかもな

佐助 桃香を忍ばせる、そして告白される(前書き)

お気に入り90に

冗談で言った100いくかも? 感謝しまくりです



## 佐助 桃香を忍ばせる、そして告白される

side 佐助

あの日、蝶仮面に憧れた桃香に俺は危険を感じていた。

政に携わる者が一つの価値を好むのは弊害が大きい、それが正義等という不確かな物であれば尚更である。

罪などはいくらでも濡れ衣を着せれる、言葉巧みに誘導され罪なき者を裁いてしまった時あの優しすぎる娘は耐えられるであろうか。

無実の罪で裁かれた者の家族に責められた時あの無垢な笑顔は消えてしまうであろう。

佐助にとって今や義勇軍の劉備は、大切な女性桃香となっていた。

嬉しそうに話しかけてくる姿は、もしかして自分に友人ではない好意を持ってってくれるんじゃないかと思ってしまう。

その度に桃香は、北郷殿の事を好きである、優しいから自分にも好意的に接してくれているんだと否定してきていた。

あの笑顔を消す訳にはいかない、例え自分が嫌われたとしても。

ならばどうするか、人の裏側は自分達忍びが一番知っている、言葉だけの正義の危険さを見せればよいのだ。

………という訳でが関羽殿、桃香と一週間程旅にしようと思つのですが

「佐助殿言いたい事はわかりましたが、どちらへ出掛けるのですしょうか」

「袁紹の所しようと思つています」

「わかりました。視察という形にしましょう」

「感謝いたします関羽殿」

（佐助殿の桃香様との二人旅できちんと気持ちに気付いてあげて下さいね、せめてご主人様の半分いや十分の一でも乙女の気持ちに敏感になって下さい）

敬愛する主が、自分とは真逆の恋の悩みを抱えている事に溜め息がでてしまう関羽であった。

side 黎

関羽殿からの報告は桃香と佐助さんが二人旅！

ありえないっす、断じて認めれないっす。節が商売で離れてる今私  
がなんとかしないとイケないっす。

とりあえず佐助さんに話を聞くんすよ。

佐助さんから理由は聞いたっすが、てか佐助さん桃香の気持ちを友人としての好意ってどんだけ鈍いんすか。

愛紗の黎も苦労するなって意味は……

佐助さんもしかして私の気持ちを、董卓様を救う仲間だからみたい  
に思ってるんじゃないっすか？

佐助さんだから、否定ができないのが怖いっすよー。

問い質そうと思ったんすが佐助さんの言葉で、全てがふっとんだっ  
す。

「俺の知っている歴史じゃ、そろそろ反董卓連合が組まれる。その頭は袁紹だ。今回の旅で俺は探りを入れてくるから黎もいざという時の準備頼んだぞ」

わかったつすよ、軍師は軍師の仕事をするつすよ。

でも佐助さん覚悟しておくんすよ。

旅が終わったら乙女の仕事をみせてやるっすからね。

side 桃香

視察 二人旅 佐助君と二人っきりの時間

きゃー、どうしよう。

旅で乙女から女になっちゃうかもー。

でも愛紗ちゃんは、何で私の手を握って頑張って下さいなんて言っただらろう？

- - - - -

私は今佐助君の背中の上。しかも佐助君が移動しているのは街道じやなく、木と木の間を跳んでいる。

こんなんじゃ話かけたら舌かんじゃうよ、昨日も宿に着いたらぐっすり寝ちゃってたしー。

確かに佐助君と旅をするとお馬さんより、早く移動できて野宿もしなくて済むんだけど、これじゃ黎ちゃんが前話してたのと一緒にだよ。

結局、袁紹さんの街に着くまでお話できたのはご飯の時だけ。

これじゃ何時もと変わらないよ。

そう言えば今回は何の視察なんだっけ？

side 佐助

袁紹の街は、賑やかであったが生活必需品がやたら高い、恐らく税金が高いんだろう。

とりあえず宿に着いた俺は桃香を忍びに仕立てる事にした。もちろん昼間っから忍び服なんて着ていたら逆に目立ちまくる。

桃香には短髪のカツラを被せ、男装をさせた。

桃香は不満そうだが、これから行く場所は桃香みたいな魅力的な女性が行くと危険だからって話すと、何故か喜んでいたが。

side 桃香

佐助君に連れられて来たのは、よく視察で行く繁華街じゃなく街外れの寂れた場所。

佐助君が言うには街の裏側に一番政治がでるって話だけでも…

確かに華やかな街からは想像ができない場所だった。

痩せこけた人や虚ろな目をした人がただ座り込んでいる。佐助君は袁紹のド派手な宝石の一つで、何人も救えるんだがなって淋しそうに話していた。

そうだよね、街の元気な所だけでなく、こついう場所にも目を届かせる政治をしなくちゃいけないんだ。

次に佐助君に連れられて来たのは、評定所の天井裏だった。

でも……そこで行われていたのは、言葉は正しく見せているけども難癖に近いものばかり。

ある子供は働かないのに贅沢な品を持っているって形見の宝石を取りあげていた。ある男の人はお腹を空かせた子供に、ご飯食べさせて盗みを働いて奴隷にされていた。

佐助君は、何で私にこんな物をみせたんだろう。宿で二人になった時に思い切つて聞いてみた。

「あの宝石は袁紹に献上されるそう。民から袁紹様にこそ相応しいと献上されましたとしてな、当然袁紹は知らない。あの父親の事も盗みを起こした原因は高すぎる税金と解らずに治世を乱した者しか見ないだろうな。なんで袁紹は気づかないと思う？」

「周りの人が教えてくれないからかな？」

「そうだ。多分自分に都合のいい事しか言わない奴しか置かなくなつたんだろ、袁紹なりの正義にあわせたな連中をな」

もし私が誰かの言葉鵜呑みにして、詳しく調べずに裁いて後から真実を知つたらどうしてたんだろう。

前に黎ちゃんが言っていた佐助君は、優しすぎるんだって、誰かが傷ついたら自分が嫌われてもそれを防ぐんだって。

本当に、本当に不器用で優しすぎるんだから

「佐助君の気持ち伝わったよ。私がううん、私だけじゃなく、黎ちゃんも節ちゃんも佐助君の事を好きなんだよ。友達としてじゃなく一人の男の人として大好きなんだからね、他の誰よりも愛してるんだよ。二人の気持ちもちゃんと聞いてあげてね」

佐助 桃香を忍ばせる、そして告白される（後書き）

感想&指摘お待ちしております。

んで黎編と節編読みたい人いたら言ってください。

駄文で頑張ります

黎の気持ち（前書き）

うん、恥ずかしい

## 黎の気持ち

佐助さんと桃香が視察から帰ってきたつす。  
異常に浮かれている桃香を問いただしたら

「佐助君に、気持ち伝えちゃった」。佐助君お顔真つ赤にして、何も言わなかったけど駄目つても言わなかったし」  
む、むかつくつす。何すか、その幸せ満開な空気は。

その後佐助さんから大事な話があるつて言われたつす。

桃香と、つき合うつから、距離を置くとか話したら泣くつすよ、もしくは…

「黎いよいよ、袁紹の馬鹿が連合の準備を始めやがった」

そ、そつちの話つすか、確かに大事な話つすね、うん、大事つす。

「しかも最悪な事に劉備軍も勧誘するらしい」

……それはまずいつすね、董卓軍まずいし、劉備軍もまずいつす、ついでに董卓軍にいた私の立場もまずいつす。

参加予定諸侯を聞く限り董卓軍に勝ち目は薄いつすね。

次に劉備軍、まだ参加できる段階じゃないつす、でも参加しなければそれを理由に攻めれかねないつす。



次に私は董卓様から見たら裏切り者っすからね、霞や詠には話してあるっすけど華雄や恋は怒りそうっすね。

「それでだ。参加した場合は黎お前は残れ。向ここの連中とも会いづらいだろ」

「いやっす。董卓様は自分がお救いするっす、霞も詠も恋も全員救うんすから駄目言われても着いていくっすよ」

(それじゃなきゃ佐助さんは、一人で色々背負いかねないっすしね)

「俺はお前を傷つけないんだがな」

(いやいや、只今乙女の心が大崩壊寸前すよ、それに…)

「じ冗談じゃないっす。私は董卓様を救う為だけに一緒に来たんじゃないっすよ。佐助さんと同じ景色を見ていたから、同じ喜び悲しみを味わっていきたいんすよ。一人で一人で全部背負うなんて酷いっすよ」

気付いたら私は佐助さんに抱き付いていたっす。

「私じゃ頼りないっすか。私が隣にいるのは不服っすか。どうして私の気持ちに気付いてくれないんすか」

私泣いちゃてるっすね。前なら男の前で泣くなんて、想像もしなかつたすよ。まして涙を武器にするなんて。

「そんな佐助さん大好きっすけど、大嫌いっす。」

私卑怯っすね。佐助さんがこう言われた、断れないって分かってるんすから。

佐助さんは、何も言わず優しく抱きしめてくれたっすよ。

背伸びして頭を撫でなでるなんて、こんな時に男の人に言うのは失礼かもしれないっすけど可愛いっすよ、私の大事な佐助さん。

黎の気持ち（後書き）

女性がみたらひくんだろな。  
節編も頑張ります

節氣持ちを伝える（前書き）

なんか幕間が長いな！

## 節氣持ちを伝える

私は王烈様の侍女をしているんですけど、王烈様は同じ女の私から見ても、美しく魅力的なんですよ。

最近、さらにお美しくなられて、なんでも恋をされているとか。王烈様に聞くと顔を真っ赤にされて否定するんですけども、あの方が見えれた時の態度をみたらバレバレなんですけどね。

しかし今日の王烈様は、少し違います。

手紙を読んだかと思うと肩を震わせています、何があったのでしょうか？

お茶をお下げしたら湯飲みにヒビが入っておりました。本当に何があったのでしょうか。

side節

「やられましたね」

機を見るに敏でなくてはならない商人が先を越されるなんて。

親友兼同盟の二人から届いたの手紙は、ノロケに近い佐助様に自分の気持ちを伝えたとの内容でした。

お二人とは違い、一緒にいる時間が少なく一緒にいれる機会が少ない、何ていうのは言い訳にしかありませんね。

佐助様は、私の商才を信じて大事な砂金を託してくれた方。

それだけでなくあひま鐙の作り方、水飴の作り方、薬の製造方法、商団への護衛兵の派遣、紙すきの方法を伝えて下さり私共の商売への貢献

は、はかり知れません。

そして何より、私にとっては愛しい殿方。

しかし用事もないのに、お城を訪れるのは不自然ですしね。

色々と考えていたら、奇跡が訪れました。

「王烈様、佐助様が見えられました」

私の顔がどんな風になったのかは、声を掛けてくれた侍女の態度を見ればわかります。

自分でも抑えられないぐらい笑顔になっているんですもの。

「忙しい所すまないな。袁紹が、反董卓連合を組むようだ。有力諸侯に檄文をだしている。うちにもくると思う」

「わかりました。武具や食糧の都合を、はかりますね」

「いつもありがとな。袁紹は見た目が派手な物を好む。後から職人に、型押しで作れる装飾を教えておくよ」

佐助様との会話はいつもこうです、相手の腹を読み直ぐに答えをだす、今のも提供する武具や食糧の代わりは袁紹様相手に儲ける方法を提示してくれたのですが、これで乙女心には呆れるくらい鈍感なんですよね。

「佐助様も戦に行かれるのですよね？」

「ああ、うちの軍は甘ちゃんが多すぎる。俺みたいな汚ねえ奴が必

要なんだよ」

「そんなおっしゃり方しないで下さい。私共商人にしたら最高の能力なんですよ」

「能力ね…俺は身も心も汚れてんだよ。数え切れない人を殺し、行った詐術も数知れず。黄巾なんぞ比べ者にならない外道だよ」

佐助様は寂しそうに、そう呟かれました。

そのお顔を見た私には、切なさが溢れ、自分の感情を佐助様にぶつけていました。

「なんでそんな悲しい事を言うんですか。私は武将ではなく、商人だからわかります。私の知ってる武将達は己の名声や欲の為に人を殺します。」

でも佐助様は違います。いつも誰かの為に動き、傷つき自分から汚れていく。そんな佐助様だからこそ商人としてじゃなく、一人の女としてお慕い申しているんですよ。」

私はその証ですと、佐助様の頬にそっと口づけをしました。

節氣持ちを伝える（後書き）

さあ、恥ずかしい文は終わった。 ようやく反董卓連合だ。

感想指摘、心からお待ちしております。



佐助 袁紹を策にはめる(前書き)

区切りがつかず長くなってしまいました

## 佐助 袁紹を策にはめる

### 劉備軍会議の間

とうとう来たか。反董卓連合の檄文、袁紹はご丁寧に董卓は暴政を  
しているなんて唱いやがって。

手前の禄でもねえ治世を棚にあげてよく言いやがる。

袁紹の細作を始末した結果わかったんだが、袁紹は洛陽の宦官達と  
手を組んでいた。

袁紹は名声が欲しく、宦官達は清い政治を行う月が邪魔になり、利  
害が一致したんだろう。

ふざけた真似してくれるねー、そんなバレバレの手口が忍び相手に  
通用すると思ったのか？

「才蔵話がある、これを見てくれ」

才蔵に見せたのは袁紹の細作が持っていた密書。

「こつちの世界にも下素がいるんだな。でどうしたいんだ」

「策がある、俺達忍びにしかできない策がな」

-----

まず行ったのは、流言 噂話を広めた。

連合の各諸侯の街、洛陽で袁紹と宦官が結託し茶番劇を演じようとしていると。

side 袁紹

（まずいですわね。どこであの話が、ばれましたの。いえただの諸侯の嫉妬による噂ですわ。）

「姫」。洛陽から密書がきたぜ」

「猪々子さん、声が大きいですわよ。」

密書の内容は、宦官側の将が兵を引き連れてシ水関に入るから袁紹が先鋒を務めて欲しい。

いくらか争った後にシ水関を捨てて虎牢関に逃げるから、そこで諸侯と董卓側の武将を争わせる。頃合いを見て、こちらの兵が袁紹軍を中に引き入れる手筈をとる。

「オーホツホツホ、これなら諸侯の疑いも無くなりますわね、天子様のお側に相応しいのは、名門袁家の私ですわ」

ちなみにこの策は黎が考え、節が商売相手の宦官に提示したものだ。節の使いの商人に化けた才蔵を、その宦官はとても気に入ったらしく、この件が済んだら才蔵を愛人として欲しいと節に頼んだらしい。お陰で策に微塵も疑いを持たなかったしな。

こんな大変な時には不謹慎かも知れないけど、嬉しい事がありました。

佐助さんが黎ちゃんのお手紙を持って訪ねて来てくれたんです。黎ちゃんは、私の不甲斐なさを見限って出奔したと思ってました、でも遠く離れても私の事を一生懸命考えていてくれたのですから。

「おー、久しぶりやの佐助、黎は元気か」

「帳遼殿にも手紙を預かっていますよ、後は… 眼鏡の軍師さんに」

「ちよつ、僕の名前忘れたの？もう詠でいいわよ。しかし黎はこつゆう策考えるの得意ね」

「黎は人の気持ちを読むのに長けてるからな」

「おーおー。真名で呼ぶのも慣れたみたいやの。流星は私の大好きな佐助さんやの」

帳遼殿がおもしろそうに冷やかしてくるが

「なつ何故そのことを」

「手紙に長々とノロケが書いてあるからなー。本当に親友への久しぶりの手紙の半分以上でノロケてからに」

「で佐助は、わざわざ手紙を届けに来たんじゃないでしょ？」

「ああ、この薬を月殿に渡しにきたんだ。後の手筈を頼みましたよ」

黎ちゃんの事は嬉しかったけど佐助さんは、黎ちゃんと凄いい仲良しになったみたいだし、他にも仲良しな女の人がいるみたいで、なんか悔しいな。

side 佐助

俺と黎は、劉備軍の主な武将に今回のあらましを打ち明けた。

「わかったよ。今回の黒幕は袁紹と宦官。だったら董卓さんを救うのを手伝うよ」

「朱里ちゃん、雛里ちゃんには現場の指揮をお願いするっす、二人なら怪しまれずに指揮を行えるっすから」

「お任せください」

「頑張りましゅ」

（ ）（ ）（ ）（ ）

「愛紗には虎牢関で華雄と勝負してもらっす、できたら捕虜にして欲しいっす」

「お任せください」

「それで帳遼殿には才蔵が、れ、呂布には俺が当たります」

「むー」

桃香かが睨んでくる。

「佐助くーん。いつの間に董卓ちゃんや呂布ちゃんの真名を預かったのかなー。くわしく聞かせて、欲しいな」

桃香笑顔だけど、目が笑ってないぞ。

「桃香、それも合わせて同盟で話したいん事があるんすよ」

黎が小声で何かを話し、納得させたみたいだ。

言い訳をさせてもらえば真名を預かったのは、桃香に会う前なんだよな。

でもあの目の笑っていない笑顔に言うのは無理。

速攻で話題変更。

「武具と食糧は節が都合してくれる」

「私達だけに良くしてくれて節ちゃん怪しまれないかな」

「他の諸侯とも取り引きしてるから大丈夫だよ。まっ、うちに来る武具は見た目は地味だが良質の鉄を使っている。袁紹のところは見た目を派手に仕上げたら大喜びみたいだった話だしな、いくらか仕掛けしたのもあるがな」

「鈴々は何をすればいいのだ」

「張飛殿の軍に才蔵を所属させますから、才蔵と打ち合わせて下さい」

どうせ、あの親馬鹿は必要な時以外は張飛殿にベツタリだろうし。

「それでは私はどうすればよいので」

「趙雲殿は… いつも通り軍を率いて下さい。以上軍議を終わります」

後ろで趙雲殿が騒いでるな、あとは頼みましたよ北郷殿

side桃香

「ふえー、人がいっぱいだねー」

「有力諸侯の殆どが、集まっていますからね」

「あそこで、諸公が軍議をしているから北郷殿、桃香、孔明殿が参加して来て下さい。桃香例の件まかせたぞ」

「佐助君、まかせといてよ。じゃご主人様、朱里ちゃんいこっ」

中に入ると、呆れ顔の白蓮ちゃんがいた。曹操さんも同じだ。

「白蓮ちゃん久しぶりー。ねえ軍議はどうなっている?」

「まだ策どころか頭も決まってるないんだよ」

「嘘だろ？」

「ありえないでしゅ」

「佐助君の予想通りなんだねー」

「「「えっ？」「」」

「おい桃香、予想通りって？」

「まっ、白蓮ちゃん私に任せてよ」

「オーホツホツホこの連合の盟主に相応しいのは誰なのかわかる方はいますか？」

「遅参した身で発言するのをご容赦願います。私は平原の相、劉備玄得です。盟主には名門袁家の袁紹様が相応しいと思います」

「劉備さんはよくわかっていらっしやいますね、仕方がないですわね貴女の顔をたてて私が盟主になってさしあげますわ」

「私共の様な若輩者の意見を取り上げてもらい光栄至極です。もう一つ願いがあのですが」

「よろしいですわ、おっしゃっくらんなさい」

「先程袁紹様の軍を見させは戴きましたが、とても荘厳で美しく、その雄姿を我が軍の兵士に見せてやり後学とさせて欲しいのですが」

「そうですね、そうですね。本当に仕方ありませんわね。よろ



しいです我が軍が先鋒をしてあげますからじつくりお勉強なさい」

「有り難き幸せです」

「それでは皆さん策は後で伝えますわ。我が軍の活躍ご覧になりなさい」(まさに手筈通りですわ。天も我が軍に味方しているんですわ)

幕を後にする劉備一行

「桃香、なんであんな事をいったの？」

「ご主人様うんとね、佐助君がね、袁紹は盟主と先鋒をやりたがるだろう、でも流した噂があり諸公は腹を探って動かないだろうから、桃香がおだてて袁紹の望みを叶えてやればいいって。まさかあんなにうまくいくとは思わなかったよ。佐助君誉めてくれるかなー」

side end

.....

劉備軍陣営

「ただいまー佐助君うまくいったよ。袁紹さんが先鋒するって」

「流石は桃香だな。頼りになるな」

「へっへー。将来は忍の奥さんだもん。これ位当たり前だよ」

side 黎

袁紹が無事先鋒になったつすね。あの金ピカな鎧は直ぐに目につくつすから、霞達にも連絡はいくつすね。

「すまない、劉備の陣はここか」

こっ、この声は、

「す、翠何しに来たつすか？」

「げっ、黎なんでお前がここに。配置の知らせに来てやったんだよ、劉備軍は袁紹達の後ろだそうだ」

閻温こと黎と、馬超こと翠 母馬騰の名代で、翠が洛陽に来た時から  
の知り合いであった。顔を合わせればお互いに軽い嫌味を言うい  
わゆる喧嘩友達でもある。

「わかったつすよ。一応ご苦労様と言ってやるつす」

「相変わらず一言が多いんだよ、この嫌味文官。関羽に張飛そして  
趙雲凄い面子が揃っているな。みんな一度は手合わせ願いたい奴ら  
ばかりだ。でその男が天の御遣いでもう一人のその小さい男も戦  
にでるのが」

「そつつすよ。天の御遣い北郷殿つすよ。それと佐助さんはうちの  
武将と変わらないくらい強いつすよ」

「冗談、まさかそんな猿みたいなチビが関羽とかと同じ力があるわけないだろ」

「佐助のお兄ちゃんは強いのだ。」

「そうですねよ馬超殿。佐助殿は強く頭も良い我が軍の要の一人ですよ」

「関羽まで、私をからかってるんだろ？」

翠が疑うのも当たり前、この世界では男は乙女に武で劣る事が殆どであり、ましてや関羽達一流武将と同じ様な実力の持ち主など聞いた事がないからだ。

「本当だよ。佐助君は強いし、頭も良いし、優しいし照れ屋さんで可愛いし、何より私の大事な人だから馬鹿にしちゃ駄目なんだよ」

佐助の援護が殆どノロケになっている桃香。

side 馬超

劉備軍への指示を届けに来たら、何故か董卓のところの黎がいた。洛陽を出奔したって聞いて心配してたんだけど、あの嫌味っぷりじや元気そうで安心した。しかし佐助と呼ばれている男はそんな強い気はしないんだけど劉備は妙に庇っていたけど。

次の瞬間、私は背後から凄まじい殺気を感じ振り向いた。そこには先まで劉備の側にいた佐助っていう男が立っていた。

「馬超殿、戦の前に、同盟軍の士気を崩す真似は関心できませんよ」  
穏やかな物言いでは、あるもただの脅しではない事はわかる。

「それが佐助さんの実力つすよ」

「黎なんでお前が嬉しそうに自慢してんだよ。はーさては、佐助の事好きなんだな」

いつも口で負けるケンカ友達をからかってやるう得意気に話す馬超。

「よくわかったすつね。私の佐助さんへの愛は誰にも伝わるんすね  
ー」

「かー、今度はノロケかよ」

「翠も早く相手を見つけろんすね。佐助さん以外なら協力は惜しまないつすよ。恋愛の先輩として教えてやるつすよ」

「うっさい、なら佐助に手をだしたらどうすんたよ」

「全力で阻止」

「ちよつ、なんで劉備まで？冗談だからさ、二人とも顔が怖い。出陣しなきゃ駄目だろ」

そんな騒がしさの中、一人佐助は、これから起こす策を確認していた。

袁紹よ、いよいよ始まりだ。茶番劇がお前の悲劇に変わるのを楽し

みにしてな

佐助 袁紹を策にはめる（後書き）

策に関しては細かいツッコミはなしで

感想お待ちしております

佐助 反董卓連合で暗躍する(前書き)

基本佐助は面にでないの  
で 他  
の国の武将とは必要な時以外はから  
みませぬ

## 佐助 反董卓連合で暗躍する

side 佐助

とりあえず指示された位置についたが：袁紹の兵ありゃなんだろうねー。金ピカの鎧って夜に虫集まるじゃねーのか？

「佐助さん袁紹軍の武器に何を仕込んだんですか？」

「ああ北郷殿、何本か重心をずらしてあるんですよ、普通の武器より勢いがつくようにね」

「なんでそんな事を？」

「あいつ等の戦を茶番で無くする為ですよ。小競り合いの筈の相手から鋭い一撃もらったらどうなりますかね。シ水関には袁紹が本気で責めるつもりだって噂も流しておきましたし」

「お互いの信用をなくする為ですか？」

「茶番とはいえ戦では神経が高ぶっていきまね、後才蔵が袁紹軍の兵に紛れて宦官側の兵を倒します」

「袁紹の面子も信用も兵も潰すんですね」

「そうですね。他の諸公に攻められたらシ水関の兵じゃ長く持たないですしね。さて北郷殿、自分はそろそろ失礼します」

その言葉と共に、佐助は陣を飛び出して行き、一刀は少し離れた場



所で佐助を見ていた桃香に気付く。

「桃香、佐助さんに話があつたんじゃないの？」

「今ね、佐助君に話し掛けたら泣いて止めちゃうから。危険な場所に行つて欲しくない、私以外の女の子の為に行かないで欲しいって。でもそんなワガママ言つても佐助君を困らせるだけだよね」

「危険な場所つて、佐助さんどこに行くの？」

「シ水関に潜入しに行くんだよ」

side節

「申し訳ありません、洛陽の支店は一時撤退します。戦に巻き込まれたくはないので、後うちの商人は貴男様に会いたいから洛陽に残るそうです」

言われた宦官は、才蔵様が会いに来るを知るとニヤニヤしました。

（男同士でなんて想像もしたくないですね。それに佐助様の方が可愛くて優しくては魅力的ですのに）

これから私達は支店を閉めて洛陽から脱出をします。  
商品と佐助様から頼まれたモノと一緒に。

「節殿お待たせしたのです」

陳宮様がうちの荷台隊と一緒にいらっしやいました。  
あれを運ぶには慣れた陳宮様のお力が必要ですね。

荷台には大きな箱が乗せられていた。

「それでは洛陽を出発するのです。あつこらセキト静かにするので  
す」

佐助が節に頼んだのは恋の家族とも言える動物達の移送であった。  
戦後の混乱では動物の移送は難しいし、宦官に抑えられたら恋が苦  
しむ羽目になるからだ。

「頼んだわよ、陳宮」

「はい賈馱まかせるです」

「それでは賈馱様は、あれをお使い下さい」  
節の指す方向には長方形の白い布に包まれた箱を乗せた馬車があっ  
た。

「僕は、できたら使いたくないんだけどね」  
賈馱は、沈痛な面もちで馬車を見ていた。

s i d e 佐助

しっかし、あれが戦場の軍かね。  
袁紹の兵隊達は、不抜けた顔で進軍しており、中には笑い話をして  
る奴もいた。

佐助が行くのは崖の上、袁紹軍を見下ろす形で進んでいた。

シ水関に潜入した佐助は兵士を物色し始めた。

（あいつにするか。）

俺は目をつけたシ水関の兵士に遠くへと、逝ってもらい鎧と武具を拝借する。

この策に唯一気づく可能性があるのは袁紹軍の顔良、逆に彼女を倒せば気づかれる可能性は低くなるし、親友の文醜は怒って攻めてくるだろう。

佐助が戦場に着くと合戦は始まっていたも、小競り合いしか起きていない。

前線で指揮をとっているのが顔良、文醜は策を壊しかねない為か前線からは外されている様だ。

顔良の動きに注目をしていたらシ水関がにわか騒がしくなってきた。

「おい、袁紹軍が本気で攻撃してきたぞ」

多分袁紹は煌びやかな武器を汚さない為に直前に兵に渡したんだろう、お陰で仕掛けに気づかなかった兵士の軽く当てるつもりの一撃が本気にちかい一撃になったわけだ。

「こっちは殺られた奴がいる、なんだよコイツ強いじゃねーか」

袁紹の兵に化けた才蔵も次々とシ水関の兵を倒している。前線が混乱し始めた今が好機だ。

佐助は、混乱に乗じ素早く顔良に近づく。

「顔良將軍ですね、お命もらいますよ」  
言葉と同時に抜き打ちの一撃を放った。

なんとか一撃を交わし佐助を睨む顔料

「何をするんです。約束が違うじゃないですか」

同時に槌を構え攻撃してくるも、佐助にはかすりもしない。

実力の差もあるが、強い男に会った事がなかった事と宦官達に裏切れた怒りが本来慎重な彼女を大振りにさせている。

そんな中、佐助は軽い隙を見せて誘いにでた。

「そこですっ！」

佐助の頭上から必殺の一撃を食らわせた彼女が見たのは、地面にめり込んだ槌に足をかけている佐助であった。

事態を理解するのにできた数瞬の間に、顔良は腹に鋭い蹴りをくらい意識を失っていった。

「文醜將軍、シ水関からの贈り物です」  
同時に佐助は、顔良を文醜に投げ飛ばした。

「と・斗詩、宦官ども許さねえ」

佐助の策とは知らずに、興奮し攻めてくる文醜、もちろん佐助が相手にする訳もなく混乱に乘じシ水関から姿を消した。

side 虎牢関

息を切らせながら、一人の兵士が虎牢関に飛び込んできた。

「た、大変です。董卓様の病状が悪化、先程息を引き取れました。」

虎牢関は一瞬水を打った様な静けさになり、すぐに嗚咽や、か弱い董卓の心労の原因となった宦官への怒りで満ち溢れ始める。

「お前ら落ち着きい、で詠からの指示は？」

「はい、董卓様の遺言があります。」

『皆様私の為に今までありがとうございます。皆様が頑張ってくださいましたが、もう駄目みたいです。どうか命を粗末にせず洛陽から逃げてください。天国にはまだ来ないでくださいね』

「それと賈馮様から董卓さまのご遺体を護衛する兵を派遣して欲しいとの事です」

「わかった。家族や恋人がいる奴らは絶対に残るのを許さんで。ほかの連中も腕に自信ある奴は月の護衛に行き。ここはうちと恋、華雄でみんなが撤退する時間を稼いだるから」

張遼は、そう言い残し虎牢関での自分の私室へと消えた。

s i d e 詠

僕は寝台に横たわる月を見つめていた。

つい先

それじゃ詠ちゃん後からねって佐助に渡された薬を飲んだ月。色々な不安が、僕の中を駆け巡っていく。

そんな中扉が開け宦官達が部屋に入ってくる。

ご丁寧にお抱えの医者まで連れて。

口では月の死を悲しんでいるが、本音は全く違うのはわかる。

さて、黎じゃないけど軍師は軍師の仕事を。

「皆様、ご覧の通り董卓は先程亡くなりました。僕は月と共に故郷に戻ろうと思います。よって董卓軍は事実上解散とします。反董卓連合の人達も董卓軍以外には危害を加えないと思いますし、月の私物以外は置いて行きますので皆様で形見分けとして下さい」

僕の話聞いて啞然としていた宦官達がチラチラと部屋にある物の値踏みをし始めている、浮かれているのも今のうちなんだからね。

その後、護衛の兵がシ水関陥落の知らせと一緒に到着した。

s i d e 佐助

あの後暴走した文醜に巻き込まれる形で、袁紹軍とシ水関の兵士が激突。

混乱となる中、劉備軍・孫策軍・曹操軍の活躍によりシ水関は陥落した。自ら先鋒をかってでも、戦果をまったくあげられなかった

袁紹は悔しさのぶつけどころがなかった様だ。

まさか結託していたシ水関に裏切られたなんて言えないしな。

虎牢関・洛陽・月の様子を確認した後に陣に戻った俺には、黎と桃香から心配を掛け過ぎだっていう、お説教が待っていた。

北郷殿や才蔵に助けを求めろも

「戦の最中に敵陣に潜入したら心配するの当たり前ですよ」

「顔良を相手にしてる時お前がチビ過ぎてはれないか俺もヒヤヒヤしてたんだぜ」

いやいや俺も月も無事なんだし…それ位で勘弁してくれても

その後各武将からも無茶すぎとのお説教を食らった佐助であった。

佐助 反董卓連合で暗躍する（後書き）

気付いた人殆どでしょうが月は死んでいません  
感想指摘お待ちしております



佐助 酒宴を開く(前書き)

ようやくもつ少しで反董卓連合終了

## 佐助 酒宴を開く

シ水関陥落の夜、袁紹は今日の失態を周りに当たり散らしていた。

「なんたる失態ですの。特に猪々さんあれほど突っ込むなと申したではありませんか」

「姫ー。だって斗詩が倒されたんだぜ。あのチビな男が悪いんだよー」

「おだまりなさい。シ水関にそんな男がいるなんて聞いてませんわよ」

「本当なんですってー。あー！姫あいつ、あのチビが斗詩を蹴ったんだよ！」

袁紹達が見たのは、ゆっくり誘うように歩く佐助であった。

side 曹操

「劉備軍から夕食の誘い？」

「はい、華琳様。佐助殿がシ水関敗残兵の探索の際、猪を仕留めたので、旧交を暖めたいとの事です」

「華琳様。僕佐助兄ちゃんの猪鍋好きだから行きたいです」  
既に行く気満々の季衣

共闘してた時佐助は度々仕留めた獣を、曹操軍に提供していた。特に猪鍋は好評であり美食家の華琳も気に入っていた。

「華琳様。戦最中に鍋なぞたるんでいる証拠です。行く必要はないかと」

「そう春蘭は残るのね。なら留守をお願いするわよ」

「そんなー。華琳様置いて行かないで下さいー」

(今日の麗羽達の不自然な動き、軍議での劉備の態度。この不自然な誘い面白くなってきたわね)

side 孫策

「あら、佐助久しぶりね。どう劉備達とはうまくやっている？」

「ええお陰様で。そうだうちの陣で、今日俺が仕留めた猪を鍋にして提供します。酒もあるので良かったら後程顔を出してください」

「お酒もあるの？やったー。行く、行くー」

「では後ほど。楽しい余興もあるので、良かったらそちらの軍師様もー一緒に」

佐助を警戒している周瑜に声を掛ける佐助。

「冥琳、あれが前話した佐助よ。」

「面白いわね、私が自己紹介してないのにも関わらず軍師と当てた事。行ってみる価値はありそうね。でも雪蓮今は戦中だから飲み過ぎはだめよ」

「何よー。冥琳のけちー、ブーブー。」

side 文醜

あのチビがあたいの斗詩を蹴りやがったんだ。それで姫の考えた汚い策も台無しにした。

目の前を歩く男は隙だらけで、とても斗詩を倒した奴には見えない。これならあつさり倒せる、敵の細作に仕立てれば問題なし。

が：文醜が勢いよく佐助を背後から斬りつけるも、一向に当たらないまるで幻を相手にしているかの様であった。

「ちよつと、猪々子さん。早く倒してしまいなさい」

「姫。なんか当たらないんですって。あれ、あのチビはどこに？あつ、いた。待ちやがれー！」

追いかけた先には、あの男だけじゃなく劉備、曹操、孫策がいた。

えつ、もしかして…あたい又まずつたの？

side 桃香

「これは袁紹様と文醜將軍。私共の陣に何かご用でしょうか？」

「貴女に用はないですわ。そのチビ猿をこっちよこしなさい！そのチビ猿はシ水関の兵に混じり私の部下を攻撃したんですのよ」

「袁紹様、証拠はございますか？私共は今日共に戦ってくれた曹操様や孫策に夕食を供させてもらっている最中、しかもここは我が陣にございます。証拠とそれなりの覚悟はありでしょうね」

普段とは違い、威厳と冷徹を持って対する桃香。

むろんこれは佐助による指示で当の本人は頭の中は

(佐助君、私演技上手でしょ。もう後から一杯誉めてもらんだから)

幸せな妄想を始めていた。

「それはその背の小ささですわ。うちの猪々子さんが見たから間違いないありませんわ」

「背だけですか？ここにいる佐助は、ありがたい事に曹操様や孫策様の知己を得させてもらっております。それに佐助は私が真名を許し、将来の伴侶と願っている者、その者を背だけで判断して斬ろうと言つのですか？」

(キヤー。言っちゃった、言っちゃったー。みんなの前で婚約宣言しちゃったー)

「先鋒たる私達が言うのだから間違いないですわ。貴女方は先鋒の大変さを知らないんから言えるんですわ」

「それならば、明日の先鋒は我が軍が勤めましょう。その結果次第ではそれなりの賠償を求めますよ」

(やったー佐助君、私は約束通り先鋒をとったよー)

「貴女の負けよ、麗羽。劉備の言う通り佐助は私の知己。

それに貴女の行動は立派な軍紀違反。戦で手柄もたてれない盟主様に酒宴の邪魔はされたくなくつてよ」

佐助の書いた策が読めてきたのか、袁紹を鼻であしらう曹操。

「かつ勝手にすればよろしいですわ。明日助けて下さいっ言っても我が軍は動きませんからね」

いたたまれなくなったのか、捨て台詞と共に後ろを振り返らず陣を後にする袁紹。

「それじゃ佐助。今回のカラクリを聞かせてもらいましょうか？どうせ貴男が影で糸をひいているんでしょ」

「流石は曹操様。袁紹と洛陽の宦官が結託して茶番劇を演じようとしていましたから、台本を書き直させてもらっただけですよ」

「だからあの麗羽が自分から先鋒をするなんていいだしたのね」

「ええ、小競り合いをした後にシ水関を受け取り虎牢関は他の軍をあてるつもりだった様ですね。それで明日ですが私共が中の武將を引きずり出して、引き付けるので曹操様と孫策様で虎牢関と洛陽を

落として下さい」

「あら、貴男達だけで大丈夫かしら？」

「ここだけの話、董卓が病死したらしく、虎牢関は兵が少なくなっている様です」

「ねえ、佐助の話冥琳どう見る？」

「明命が掴んできた情報と一致するわね。あと調査中の明命が、全く追いつけなかった影は多分佐助達ね」

「佐助に明命を鍛えてもらおうかしら」

「良い案だけど、そうしたら明命はあれに恨まれるかもね」

笑いながら冥琳が指さす先には、曹操に佐助との会話を邪魔され、ジト目で睨む桃香がいた。

（さーすーけくん。私頑張ったんだから、かまってよー）

「ほら佐助。いつまでも曹操とばかり話をしていると大切な劉備が焼き餅やいちゃうわよ」

孫策は、わざと大きな声で佐助に話し掛ける。

「さーすーけー、桃香は寂しいんだぞー。いっつもいっつもお仕

事―、お仕事―で。もつと私の相手をしろ―」

接待のつもりが、途中からやけ酒気味になり佐助に絡みだす桃香。

「まったく、酒宴に招待した主が酔っ払ってどうすんだよ」佐助は口では厳しく言いながらも、優しく桃香を抱き寄せ自分の体にしなだれかけさせる。

「へへー。佐助君の体硬いー。お父さんに抱っこされてるみたい…」

少しすると、桃香は安心した様にスースーと寝息をたて、夢の中へと旅立って行った。

曹操軍や孫策軍の相手を他の武将が勤める中、佐助は桃香に抱きつかれながら明日の決戦に思いを馳せる佐助であった。



佐助 酒宴を開く（後書き）

感想指摘お待ちしております。

感想くるとテンションあがります

佐助 無事に董卓達を救う（前書き）

よーやく反董卓連合が終了ー！。

幕間かいたら次の展開を考えねば

佐助 無事に董卓を救う

虎牢関決戦の日

「関羽隊整列！今日は我が先鋒となる。目標は華雄將軍との一騎打ち、皆の援護を期待している」

「張飛隊いくのだ。今日はお父さんが張遼との一騎打ちをするからみんなで助けて欲しいのだ」

「趙雲隊整列！今日のはあの呂布が相手となる。佐助殿と呂布の一騎打ちに巻き込まれぬ様に」

各將軍の号令と共に兵が整然と行軍して行く。

side 虎牢関

「無事に月も落ち延びたらいで。さて後はうちの仕事や。佐助からの指示ではうちは張飛隊にいる才蔵って男と華雄は関羽と恋は佐助と一騎打ちや。怪しまれない様に本気で戦うんやで」

「わかった」

「当たり前だ。関羽など我が斧の錆してくれ」

(しっかし佐助は怪しまれない様に出撃を促すって言ったが、  
どんな合図をおくるんかいな)

そんな中、虎牢関に關羽の舌戦が響いてくる。

「華雄將軍よ、いつまで関に籠もっている。自慢の斧は飾り物か？」

「ぐっ、くぬうー」

「落ち着け。華雄あれぐらい聞き流しい」

「霞わかつている。大丈夫だ」

「我が軍の軍師閻温から言伝がある。

『馬鹿猪へ。ちょっとは成長できたっすか、今だに斧を振り回して武、武騒いでるんじゃないっすか。それじゃ猪じゃなく豚にするっすよ。後無駄に露出の多い格好もやめるんすね、どうせ胸も成長できないうから。寄ってくる悪い虫も蚊ぐらいかいなっすよ。昔のよしみで私と佐助さんの結婚式には招待してやるから精々うらやましがらんすね』  
だそうだ」

「黎の奴言いたい放題やな。華雄大丈夫か？華雄？どこに行きいったんや」

「華雄突撃に行った」

「恋まじか？しゃーないうちらもでるで」

関羽対華雄

佐助殿から言われたのは華雄は、興奮すると猪に磨きがかかり動きが単調になるとの事

「関羽！。黎をだせー、今度という今度はあの口悪軍師を泣かしてやる」

「黎殿は本陣だ。会いたいなら、まず私を倒すんだな」

「なら、くらえっ」

(佐助殿と黎殿が言ったのは本当だな。動きが単調で大振りすぎる)

関羽にしてみれば、今の華雄の攻撃をかわすのは造作もない事。

「関羽よお前の武器こそ、飾りか。さては私の斧が怖くて近づけないのだな」

そう言つと華雄は大上段に構えた斧を振り下ろした。

当然そんな攻撃が関羽に通じる訳もなく、華雄の隙ができた腹に関羽の蹴りが強かにはいった。

「ぐっ、貴様も私を愚弄するのか。武人に武器を使わずに相対するのか」

今だに立てぬ華雄の首筋に刀を突きつける関羽

「私は佐助殿に体術を習つてるからな。この四肢も私の武器だ」

その言葉と共に華雄を峰打ちにしその意識を刈り取る関羽。

「華雄は劉備軍の関羽が生け捕つた。華雄隊の兵も大人しく投降す

るがよい」

-----

### 才蔵対帳遼

「おいおい、神速なんてこつぱずかしい異名でその程度か？」

「かー。こいつめっちゃ腹立つ、お前こそ先から避けるだけしか  
能ないんかい」

神速を謡われる帳遼であったが相手が悪すぎた。

才蔵は速さを尊ぶ忍び中でもその動体視力は飛び抜けているのだから。

「わかったで、さてはうちの色っぽい格好を堪能しようとしてるな。  
このスケベ」

「何寝言ほざいてんだよ。そんな露出狂みたいな格好うちの鈴々に  
悪影響与えたらどうしてくれんだよ！」

「くー。むかつくー、もう策も何も関係あらへん。親娘共々打ち取  
らなうちの乙女心がもたへん」

（な、何やこいついきなりの無口なりおって。纏っている空気があ  
りへんくらい冷とうなっとなる）

鈴々に敵意を示され本気になった才蔵が繰り出していくのは鞭の様  
にしなる蹴りと大気を切り裂く様な手刀。

無言の才蔵により、見る間にボロボロにされていく帳遼。

「お、お父さんやめるのだ。佐助のお兄ちゃんとの約束を破ってしまうのだ」

「うん？、鈴々か。あちゃー、ちょっとやりすぎだな。鈴々は女の子なんだからこのお姉さんみたいに、はしたない格好したら駄目だぞ」

「わかったのだ」

「おい、誰かその女を籠に入れる。鈴々に見えない様に布かなんか被せておけよ」

布を被せたのは、誇り高い帳遼が生け捕りされた姿を曝さぬ為であった。

-----

佐助対恋

黄巾を単騎三万人倒したつてのは、嘘じゃないかもな。

普段の恋からは想像すらできない凄まじい闘気に気圧される佐助。趙雲隊の兵士に至っては気圧されて近づく事すらできないでいる。

「恋嬉しい。本気で佐助と闘える」

恋は自分の強さからくる恐れのために人から遠ざけられていた。

ましてや自分の闘気に耐えているのが初めて真名を許した男であったのだから。

(やれやれ、こりゃ又桃香や黎に説教されるな)

流石の佐助も、恋の猛攻を交わすのが精一杯で、反撃の糸口すら掴めずにいた。

（一瞬だ、一瞬でも隙をつければ）

気を抜いたら恋の攻撃による風圧で体を持っていかれそうになる佐助。

（ちょっと賭けになるがやるしかねえーな）

佐助は攻撃を避ける際に足元の石を恋に向かって蹴り、恋が避けた瞬間に飛び込んでいった。

side 趙雲

凄いな… 目の前で繰り広げれる死闘は武を志す者ならば、誰もが憧れる高見みであった。

呂布の猛攻は凄まじく、それを避ける佐助殿の体捌きも素晴らしい。そんな中、一瞬の隙について佐助殿が飛び込んでいった。

あれでは呂布に真つ二つにされてしまうのではないか。

見ていた誰もが佐助殿の死を覚悟した瞬間

「シエーツ」



佐助殿がそう叫んだかと思うと呂布の体が硬直し、倒れこんだ。

「すみません趙雲殿意識がもちそうにないです。才蔵に後始末は頼んだと…」

佐助もそのまま気を失ってしまった。

- - - - -  
side 才蔵

「あーあ、戦おわったから鈴々と飯でも食おうと思ってたのに」

佐助に後始末を頼まれた才蔵は洛陽に来ていた。連合軍が洛陽に来る前に始末しなければいけない事があったからだ。

その背後に近づくと無言で首を捻る。

「約束通り俺が逝かせてやったからな」

才蔵が見下ろす先には宦官が物言わぬ死体となり横たわっていた。

side 詠

馬車は一路平原へと向かって行く。

先から馬車が揺れる為か、月の入っている箱からは、  
「詠ちゃんまだ」

「痛いよー」  
と情けない声が聞こえてきている。

「こら、月死体は喋らないの。平原まで我慢しなさい」

「へう」

馬車は青空の下、真っ直ぐな道を進んでいく。

僕には、それがこれからの未来を示している様で自然と笑みがこぼれてきた。

side 佐助

目が覚めると、真っ暗な部屋で寝台に寝かされていた。  
まだ重い頭を、強引に動かし恋との一戦を思い出す。

「なんとか勝てたが、今回はやばかったな」

俺の安堵の溜め息に合わせて闇から

「やっぱり、やばかったんすね。ど・れ・だ・け・心配したかわか  
ってるんすか？」

「佐助君シ水関で言ったよね。もう心配かける様な事はしないって  
そうなんだー、佐助君は直ぐに約束破るんだねー。それとも私との  
約束なんてどうでもいいのかな？」

「佐助様が倒れられたと聞いて、どれだけ心配したか佐助様にはお  
分かりになってももらえないでしょうね。中々目を覚まさない佐助様

を見て節が、どれだけ涙を流したのかわかりますか」

何時の様に同盟三人からのお説教と、休みの逢い引き、贈り物を約束させられる佐助であった。

**佐助 無事に董卓達を救つ(後書き)**

強引な策で、反董卓連合終了。 作者の頭じゃこんなもの

感想 指摘お待ちしております

黎く不器用な忍びと一途な軍師（前書き）

オリキャラ黎に興味ない方は微妙かも…

## 黎く不器用な忍びと一途な軍師

side 黎

これから私は、董卓様達にに会いに行くんですけど正直気が重いつすね。

捕虜として連れてきた霞、恋、華雄と恋の家族と一緒にきたね、そして今日董卓様と詠が平原に到着したんすけど霞達は董卓様の無事を確認してから今後の事を決めるって言ってるんすよ。

昔の仲間だから、いや仲間だからこそ勝者と敗軍の将として会うのは辛いんすよね。

いくら董卓様の為とはいえ自分勝手に飛び出し、違う軍の軍師とし洛陽に攻め込んだんすからね…

佐助さんが私をたぶらかしたと思い、仲間に加わらなかったしたら昔の仲間とは言え……

佐助さんも桃香も一緒に会って言うてくれたのは凄く嬉しかったんすが私がつけなければいけないケジメっすから、気合いを入れて皆が待つ部屋の扉開けたんすよ。

部屋にいたのは久しぶりに会う懐かしい面々、洛陽に帰ってきた感じがしたっすよ。

「久しぶりっすね」

裏切り者と謗られる覚悟もあつたんすが

「黎久しぶりやの、ちっとは佐助と仲は進んだんか？後なんやあの才蔵ゆう根性悪い男は人を変態扱いしおってからに」

「黎貴様、誰が成長していないだって。少しほんの少しだけど胸も成長している」

「黎、元気そうで安心した」

「ねねも安心したです。又前みたいに策について教えるのです」

「僕も安心したよ。でも月に変な薬飲ませるのはこれで最後にしてよね」

「黎ちゃん、ありがとね。今の立場もあるのに一生懸命してくれて」

「董卓様みんな私の事を許してくれるんすか？」ホツとしたのか、目から涙をこぼす黎。

「あほか。許すも何もうちらが無事なのは黎が頼んでくれたからやる。うち以外は、無傷やし。あの男思い出しても腹が立つ、乙女の柔肌に蹴りくれおつてからに」

「それにね、平原のみんな黎ちゃんを怒らないで欲しいってお願いに来てくれたんだよ」

「関羽、趙雲、孔明、鳳統は、いかに黎が洛陽を心配してたか僕達に話してくれたよ」

「張飛は才蔵を引っ張って来て『お父さんが、やりすぎてごめんなのだ』って、うちに謝ったし」

「劉備もきた、黎ちゃんは大事な友達だから許してあげて欲しい言

った」

「節殿からも頼まれてやったです。『黎様は今回心労であまり寝られておりません。劉備様達のところがお嫌なら私共が生活の場を提供しますから』って言ってたのです」

「佐助さんはね、私達みんなに頭を下げで黎を責めないで欲しいってお願いしたんだよ。私にくれたお薬は一時的仮死状態にするお薬なんだって、もし何かあつたら腹切るなり責任とるなり何でもするから、黎を責めないでやってくれって」

「佐助さん、桃香、節、みんなありがとうです。それなら協力してくれるんすか？」

「当たり前や。無職になつた責任はキチンととってもらつて」

「わかつたつす。所属は霞、華雄は武官、恋は本陣の護衛役と遊軍、ねねは文官に、董卓様と詠は侍女をして欲しいつす、慣れたら誰の侍女をやりたいか希望を聞かせて欲しいつす。」

その後、歓迎会の酒宴が開かれる、ちなみに一刀は、口説いて劉備軍参加をご破算にしかねないとの事で、この時初めての顔合わせとなった。

「佐助さんお願いがあるんすけど…城の屋根に連れて行って欲しいつす」

- - - - -

外は満点の星



「どうしたんだ、高い所好きじゃないんだろ」

「もうその話は忘れるっすよ。お礼が言いたかったんすよ、佐助さんが反董卓連合の事を教えてくれなきゃ董卓様も洛陽のみんなも私も無事ではいらなかったっすから」

一呼吸おく黎

「何より佐助さんは私に人を好きになる気持ちを教えてくれたんすよ。気付いていたっすか、佐助さんと話ができたり目があっただけでも私は嬉しいんすよ」

「だからこれはお礼じゃないっす。私がしたいからするんすよ」

城の屋根の上、満天の星の下、不器用な忍びと一途な軍師の影が重なりあった。

黎く不器用な忍びと一途な軍師（後書き）

指摘感想お待ちしております

**幕間 佐助同盟緊急会議（前書き）**

感想がユーザーのみ受け付けに、なっていたので外しました

## 幕間 佐助同盟緊急会議

佐助同盟緊急会議

「桃香、節こないだ世話になつたつすね」

「そんなー、わざわざいいよ。でも今日はいきなり会議ってどうしたの？」

「洛陽で加わつた人達の事です」

「さすが節、察しがいいつすね。今日は佐助同盟・洛陽乙女への対策会議つす」

「まず危険度が低いのは賈馱、陳宮、華雄、帳遼の四人は大丈夫つすね」

「黎ちゃんなんでー？」

「賈馱が大事なのは董卓様すからね、今私や桃香との関係を悪化させる事はしないつす。陳宮も同じく大事なのは呂布つすから、それにまだ恋愛には興味ないつしね。華雄は、洛陽で佐助さんに悪態ついた時には懲らしめてやったから大丈夫つすね。」

「帳遼は親友の男に手だす訳ないやろつ言つてたし最近はお蔵さんに絡んでる時多いつすから」

「鈴々ちゃんがお父さんとの時間邪魔されるのだから怒つてたもんね」

「それで残りのお二方が危険なんですか？」

「董卓ちゃんも、呂布ちゃんも佐助君に真名を許したんだよね？」

「董卓様は周りに宦官とかしか男がいなかったすからね、仕方ないつては仕方ないつすね。呂布は初めて自分と同じぐらい強い男を見つけて興味を持ったんすね、後セキトの飴で懐いたんすよね」

「佐助君、人を喜ばせるの好きだからね。大概はいい人で終わってくれるんだけど」

「そこが又いいんすけどねー」

「とりあえずそのお二方には警戒が必要と」

「そうつすね、場合によつては同盟に加える必要もあるつすね。董卓様も恋も十分牽制になるつすから」

「話変わるけど、黎ちゃんあの酒宴の後佐助君と二人で何してたのかなー？」

その後色々和白状させられ残り二人が新たに計画を建てたのまた別の話。

**幕間 佐助同盟緊急会議（後書き）**

指摘感想お待ちしております

月 同盟にはいる(前書き)

今日は連投します

## 月 同盟にはいる

side 董卓

一緒に侍女をしている女の子に聞いたんですけど、佐助さんは、侍女を必要としないそうです。

洗濯、掃除、料理を一人でこなして侍女の出番が全くないって、ちなみにご主人様が一番侍女が多くて競争率も高いそうです。

「月は誰の侍女になりたいの？」

「うーんまだわかんないよー。詠ちゃんは？」

「僕は黎に誘われてるんだ。文官の仕事を手伝って欲しいんだって」

私はどうしよう… 黎ちゃんに相談してみよーかな

side 黎

「誰の侍女がいいかつすか？」

「うん、黎ちゃんここの事詳しいから教えて欲しくて」

「御遣いは速攻却下っすね。桃香のさぼり癖は月様じゃきついですね、星は悪影響しか与えかねないすしね」



「佐助さんは侍女を必要としないの？」

「そんなのガラじゃねえって、断るんすよ。身の回り事は、殆ど一人で、やるすつからね」

「あまりお城にもいないんだよね」

「そーなんすよ。佐助さんの情報収集能力は軍師としては必要不可欠、でも乙女としては側にいて欲しいす。ジレンマっすよー」

「佐助さんがお留守の時のお部屋の掃除とかは誰がしてるの？」

「私か桃香か節で、手が空いてる人が担当してるっすよ」

「みんな忙しいのに大丈夫なの？」

「私と節は機会少ないんすよ、桃香は逆に政務をサボってまで掃除行こうとするんすよ」

一度関羽が探しに行くのと佐助の寝台で幸せそうに寝ている桃香を見つけた事もあったのだ。

「決めた。黎ちゃん私佐助さんの侍女になる」

「ゆ、ゆ、ゆ月様。なんですか？」

「こないだ洛陽に来た佐助さんね、疲れてたけど休まないで直ぐまた戻って行ったの。だから私佐助さんが何時でも気持ちよく帰る場所を作って待っていてあげたいの」

「も、も、もしかして、もしかするっすよ。月様も佐助さんの事を

「？」

「わからないよ、今までそんな事考えた事ないから」

多分結婚相手は、親の決めた誰かになるって思ってたしね

寂しそうに呟く月に

「わかったつす。月様を同盟に招待するつすよ」

敬愛する元主は、今自ら進もうとしているその手助けをしてあげたい。

それに：佐助の仕事で政務に関しては桃香、情報収集は自分に、外交関係は節に、生活は月が担当すれば同盟による包囲陣を作って他の乙女との接触を制限するんすよ。

-----

「月いつも掃除とかありがとうな。何かできる事あったら言ってくれ」

「へう。な、なら私も佐助さんが作ったお猿さんのが欲しいです」

後日月には仕事道具を入れるカバンが贈られる。

カバンには月見をする猿が刺繍されていた。

月 回題にほころ(後書き)

恋とひしこやん

桃香 涙後に嬉し涙（前書き）

ユーザー以外でも楽しみにしてくれてる人いるかな？

## 桃香 涙後に嬉し涙

徐州太守への任命

反董卓連合の成果により劉備に与えられた褒賞

充分すぎる出世であったが、当の本人は…

（無理だよー。私が太守様なんて、今でも大変なのにー）

仲間は口々に、出世を祝ってくれる、無論弱音をはける立場でないのはわかっている、わかっているが……

このままでは、政務もはかどらない為に、一時休憩とし街にでる桃香。

ぶらぶらと歩いていると一角に人だかりをみつける。

（あそこにお店なんてあったっけかな？）

人だかりの先にいたのは佐助君だった、佐助君は飴を器用に動物の形にして並んでる人に手渡して行く。

「佐助殿が戦で苦勞した民を元気づけたといって始めたんですよ」  
声を掛けてきたのは警備で街に着ていた愛紗ちゃんだった。

「愛紗ちゃん、佐助君が一人でやってるの？」

「なんでも王烈殿の店で商品を買った民に引換券を手渡してるそう

ですよ。親御さんには手伝いを頑張っている子供に渡して下さい」

「佐助のにいちゃん、俺犬ほしいー」

「私はネコー」

「うちの子には、パンダを」

「わかった、わかった。順番にな」

「子供達は佐助殿の手元を見てますが、桃香様は佐助殿の顔を見ているんですね」

「もうー愛紗ちゃん、佐助君子供が喜ぶと嬉しそうに笑うからつい」

「あー、劉備様だー。劉備様も佐助のにいちゃん見にきたの？」

「桃香に関羽殿お一つどうですか？」

「佐助君私はお猿さんがいいー。愛紗ちゃんは何もらうの？」

「私はもう大人ですから、別に欲しくはありませんがネコを…」

「はうー、ネコ可愛い」佐助の飴を見て悦に入る関羽。

「さて、今日はお終い。お前ら手伝いを頑張ったら又やるからな」

子供達は口々に佐助に挨拶をして帰って行く。

「関羽殿、飴の代金として桃香を借りますよ」

そっぴい終えるのが早いか佐助は桃香をお姫様抱っこすると走り出した。

「頼みますよ。今桃香様を元気づけれるのは貴男だけですから」

関羽は桃香の残した政務を片付けに城に向かっていった、ネコ型の飴をしつかりと握りしめ。

「さて、着いたぞ」

着いた先は小高い崖の上、前に桃香が佐助の投石を手伝った場所に少し似ていた。

「ガキの時分忍びの修業が辛くなるとよく、高い場所に行ったんだよ。もしかして自分の家族が見えるんじゃないかとか俺の居場所が見つかるんじゃないかってな。

桃香、徐州に行くの不安か？ここなら何を叫ぼうが泣こうが誰にも聞かれないさ、ガキの俺が実証済みだ」

「佐助君私不安なの。愛紗ちゃん達武官さんみたいに強くないし、黎ちゃん達文官さんみたく頭も良くない、節ちゃん達商人さんみたくお金も稼げない。徐州行ってみんなにお仕事で迷惑かけて必要とされなくなるのが怖い。ご主人様一人いれば充分だって私はいらないって言われそうで不安なの」

涙目で佐助を見つめる桃香。

「幸村様が昔御しゃったんだ、君主に必要なのは武でも文でもなく部下の能力を見極めてそれを信用していく事だって。桃香は人の良

い所見つけるの得意だろ」

「でばー、それならご主人様も一緒だもん」

(うー私、泣いてるからうまく喋れないでない)

「俺が何で劉備の義勇軍を選んだかわかるか？」

「だまだまで会っただがらでじょー」

「違っよ、お前の笑顔を見たからだよ。人を暖かい気持ちにさせる笑顔なんて滅多にないからな。この人なら信用できるってな」

「ぞれだげー？」

「それだけって、昔俺は笑顔が大嫌いだったんだよ。この見た目で忍びだろ、俺が見る笑顔は嘲笑か作り笑いだけだったんだよ。幸村様に出会い仲間と笑う事を知り、この世界に来て大事な異性と笑顔で話す楽しさを知った。お前の笑顔が俺には必要なんだよ」

「ぎざんと言葉で言ってーよー」

「桃香お前の事が好きだ、だから俺にお前の笑顔を守らせる」

佐助君はそう言って口付けをしてくれた。佐助君がくれた飴より甘い口付けだった。

帰り道

「へっへー、お前の笑顔を守らせるか。なんか求婚の言葉みたいー」

「頼む、頼むからその恥ずかしい言葉はもう言わないでくれ」



佐助君安心して、みんなに自慢したいけど、きちんと私の中に大切に閉まっておくよ。

でも徐州で私を泣かせたら、覚悟してね。

桃香 涙後に嬉し涙（後書き）

感想指摘お待ちしております

才蔵 佐助の過去を語る（前書き）

今回は殆ど才蔵の一人語り

なぜ佐助は女性を苦手とするのか

## 才蔵 佐助の過去を語る

一刀執務室

愛紗が最近、各部署で仕事が滞りがちとの報告をあげてきた。

徐州への移動の為、猫の手を借りたいくらい忙しい時期なんだけど…

「原因はやっぱり佐助さん？」

「多分そう思われます」

佐助さんは、今徐州に先行し色々下準備をしてくれている。

「佐助殿の仕事は多岐に渡っておりましたからね。才蔵殿は張飛隊の副官としての仕事もありますし」

「最近、桃香や閻温さん元気ないもんな」

「月殿や呂布殿も様子がおかしいとの事です」

「時期が時期だから、賈馱さんに内政手伝ってもらおう。書類に署名入れなきゃ、しばらくは誤魔化せると思っし」

「はい、桃香様には星を、黎には帳遼殿を、呂布殿には華雄殿を補佐にいれました」

side 才蔵

「お父さん、お願いがあるのだ。桃香お姉ちゃんが元気ないから元気づけてあげて欲しいのだ」

鈴々は、佐助がいなくなり元気がない劉備が心配との事。本当に鈴々は可愛くて強い上に優しい自慢の娘だな。

「わかった。佐助が居なくなって元気なくしている奴らに話しておけ、俺の知ってる佐助の事なら何でも教えてやると」

その日の夜

「で劉備や閻温、王烈はともかくなんで御遣いの坊主や関羽がいるんだ？てか殆どの武将がいるじゃねーか」

「せっこい男やの。佐助はうちの仲間やで。ええやないか」

「誰がせこいだよ。で何が聞きたい？」

「佐助さんは、向こうに彼女とかいなかったんすか？」  
黎が警戒をする様に質問をする。

「いるわけねーだろ。年近い女友達もいなかったかもな」

「はいはい、なら好きな女の子はいなかったの？」  
安心したのか桃香は、勢い良く質問をする。

「居たぜ、見事に振られていたがな。『私より背が小さい人は無理』とか『鏡見た事あるの』『私人間以外とは付き合えない』とかな」

「そんな酷い事言われて佐助さんは平気だったんですか？」

「酷い事？どこがだよ佐助はチビ猿、これは動かしようのない事実なんだぜ。第一忍びつてのはな、何でも利用するんだよ。あいつは自分がモテないのを愛嬌として潜伏先の野郎の中溶け込んでいったよ」

「それでは何で佐助さんは女性を苦手になったのでしょうか？」  
話の矛盾に気づき質問をする節。

「おー流石は商人の王烈だ。鋭い所をつくねー、あんな事なきや違つたらうさ」

「あんな事つて、佐助さんに何があったんですか？」  
月は、佐助に何があったのか心配なのか既に涙目となっている。

「こつから先はあいつのあまり触れて欲しくない話だ。興味本位のやつは消えな」  
才蔵は殺気を隠そうともせず、問い質す。

「恋は残る、佐助の事少しでも知りたい」

揺るぎない目で恋が見返してくる。

結局、全員が残りやがった。

幸村様こいつらなら話して大丈夫ですよね。

「あん時の相手は普通の村娘だったな。名前そんなのは話を聞けば

何で言わないのかわかるさ」

「出会ったのは偶然、何でも神社の境内で泣いてるのをたまにみかけたらしい。よせばいいのにあの馬鹿は、心配して励ましたりおどけて笑わせたりしたんだとよ。娘も佐助の容姿を気にするでもく、普通にいやむしろ仲良く接していた」

「佐助のやつ嬉しそうにはしゃぎやがってな。普通の村娘だから俺も幸村様も対して警戒しなかったさ。あいつも表向きは細工師だったしな」

「今思えば、きちんと調べておくべきだったって凄く後悔したさ。娘はちょっと前に奉公先の武家から暇をだされていたんだ」

「暇をだされた理由？その武家の若様と恋仲になったらしく武家の母親が暇をだしたんだとよ、うちの息子にはきちんとした身分の嫁がふさわしいってな」

「で、この若様いや俺としては馬鹿様と言っても言い足りない奴なんだが、こいつは見た目は良いが女にだらしない。少しでも好みの女を見ると口説く禄でなしでな。」

でも身分が身分だから誰も何も言えなかった、でその馬鹿様はますます調子にのると村娘の事も遊びだったらしいが、本気になられて面倒くさくなつたから母親に泣きついたらしい。娘には母親を説得したら迎えに行くとか言つてな」

「だけど、待てど暮らせど愛しの若様は迎えにこない、不安になった時に佐助と知り合つたんだな。そのまま終わってりゃ良かったん

だが、あの馬鹿様捨てた村娘がもつたいなくなつたのか、村にまで会いに来た、でその時佐助と一緒にいるのを見たんだな」

「修羅場になつた？そんなんじゃねーよ。どこで知つたのか若様は佐助が幸村様のお気に入りの者と知つたらしい。この若様実力はな癖に欲だけは人一倍いや何倍も強い強欲者でな。幸村様が秀頼様や三成公に頼りにされているのが気に入らなかつたらしい。でも幸村様には逆立ちしても適わない。でもなんとか幸村様に何とか一泡ふかせてやりたい」

「それで若様は村娘を利用する事を思いついたんだ。村娘に佐助を呼び出させて人の婚約者に手をだした無礼者と斬り殺し幸村様に佐助の死体を突きつける。佐助と若様とじゃ身分は違つし佐助は公然とした部下じゃないから幸村様は泣き寝入りするしかないって思つたんだろつな」

「村娘に佐助は村を調べにきた悪者らしいと教えただら。村娘も佐助を退治すれば大好きな若様の手柄になるし、自分も手助けをするんだから奥方になれるつて思つたらしいな」

「だけどこの若様腕には自信がないから、町のならず者を雇つて、佐助を殺そうとしたんだよ」

「当日、呼び出された佐助は文句をつけられるし村娘は愛しの若様から抱き付いて離れない。あいつは混乱したんだろつよ、で佐助をならず者が取り囲む。この若様は調子にのつて佐助に見せつける様に村娘と口付けをしたりいちゃついたりしたんだとよ」

その場にいる全員が、怒りに震えている。



佐助お前は果報者だぜ、お前の為に怒ってくれる奴がここにもいる。

「調子にのった若様が余計な事を言っただよ。これで幸村の悔し涙が拝めるってね。佐助は瞬時に忍びとなり、ならず者を始末した。びびる若様を捨ててアイツは幸村様に土下座して謝りにきたんだよ。自分が自惚れたばかりに幸村様にご迷惑をかけたって」

「泣いて謝る佐助を落ちつかせた幸村様は俺に調査を命じた。で若様の計画が露わになったんだが、そりゃ幸村様怒ったねー。ふざけた餓鬼に世の中を教えてやるってね。当然俺や他の忍びを怒っていたから始末を命じて欲しいってお願いしたんだが、幸村様はただ始末するんじゃつまらないから全てまかせろっておっしゃってな」

「まず幸村様は三成公に報告した。佐助は三成公に使いに行く事があつて三成公に気に入っていたからな。ありがたい事に三成公も怒ってくれたんだよ」

「三成公を、あの若様を呼び出したんだ。若様は三成公に呼ばれて有頂天。それに三成公は話術の達人、若様をおだてて事のあらましを語らせた。三成公は一言こうおしゃったんだとよ。その男は農の友人だと。お主と家中の者に幸村達との死闘を命ずる。負けた方はお家取り潰しってな。慌てた若様の家では金を使い剣の達人とかを集めた」

「幸村様に力を貸してくれたのは三成公の忠臣島左近様と幸村様と親交の深かった前田慶次郎様、いずれも戦場の強者ばかりだ、御遣いの坊主なら名前わかるだろ」

「わかるもなにも、反的な強さの人ばかりじゃないですか」

「お二方とも、こんな茶番に出なくてもいい様な人達なんだが義憤で参加してくれたのさ」

「若様達が何を言おうとこのお二方が手を貸した時点でどっちが正しいか世間の目は一目瞭然だ」「結果は若様方は全員一太刀で打ち倒されたさ」

「で残るは村娘だ、ところが佐助は村娘をそつとしておいてやって欲しいなんてぬかしやがる。あの馬鹿なんて言ったと思う」

「佐助さんの事つすよ、俺が自惚れて近づかなきゃあの娘は何もなく嫁にでも行つた、これで何かしてみる振られた腹いせに殺したなんてみつともない勘弁してくれつてとこつすかね」  
怒りやら悔し涙で顔がぐちゃぐちゃの黎。

他の連中も殆ど変わりないんだが。

「まっ、それ以来か佐助が女と話すのを避ける様になつたのは」

「佐助君また誰かが傷つくの嫌だつたんだね」

「そうこうするうちに、本当に苦手になつたんだから世話ねえーよな。あいつにすき好んで話し掛ける物好きな女なんていなかったしな」

「それで才蔵様は最初に会つた時にあんなに怒られていたんですね。佐助さんがまた同じ目にあつのが嫌で」

「当たり前なのだ。お父さんは佐助のお兄ちゃんと同じ位優しいのだ」

「恋頑張る。佐助と一緒に笑いたいから、もっとお仕事も頑張る。佐助に良くやったって、笑って欲しいから」

次の日から、同盟の面々は以前以上に働いた、少しでも早く自分達の大事な男の笑顔を見る為に。

後日、同盟に入った恋に手甲と足甲が渡された。

そこにはセキト達と一緒に笑う猿が彫られていた。

才蔵 佐助の過去を語る（後書き）

恋も同盟に、予定では後いながでていないキャラはリクエスト受け付けます 作者の低い力量で、できる人なら

指摘感想お待ちしております

再開を目指して それぞれの胸の内（前書き）

前回は暗すぎたので、今回は普通に

再開を目指して それぞれの胸の内

side 黎

ようやく、ようやく城に着くつす。

後少しでやっと佐助さんに会えるんすよ。

考えるだけでも、顔がにやけてくるのを止めれないんすよねー。これが

何を話そうつすかねー、私は軍師だから 佐助さんが集めてくれた情報を聞いて取りまとめる必要があるつすからね。

時間がかかるつすから、昼ご飯と一緒に食べて、夜になったら、城の屋根に連れ行ってもらうんすよ、で、でーあの時の続きをするんすよ。

佐助さんを酷い目に合わせた女の事なんて綺麗さっぱりすつきり忘れさせてあげるんすよ。

でも一つだけ不満があるんすよね。

それは……

side 桃香

やっとーお城が見えて来た。

あのお城で佐助君が、私を待っているんだよね。

何か照れちゃうなー、だって佐助君は、私の笑顔が大好きで私の笑顔を守ってくれるんだよ。

あの時の佐助君の顔と言葉は数えきれないくらい思い返した。

それに私はこの城の城主なんだから、先行してお仕事をしてくれた佐助君から報告を受けて、労をねぎらわなきゃいけないんだから、

何してあげよーかなー。

佐助君は、照れ屋さんだから二人つきりじゃないと駄目だよね。

二人つきり、二人つきり

そう、あの村娘の記憶が消えるくらい二人つきりの時間をあの城で過ごすんだから。

でも不満もあるんだよねー……

## side 節

徐州に入り、お城が近づく程に駆け出したい気持ちを抑えきれなくなってきたいます。

佐助様と離れて暮らすのには、辛いですが慣れていきます。

でも佐助様のお辛い過去を知ってしまった今は、一刻でも早く佐助様のお側に行き節が佐助様をどれだけお慕い申し上げているのかを伝えたい。

桃香様や黎様のお話を聞いたり、月様や恋様の様に佐助様の魅力に気付いた乙女も増えました。

これ以上遅れをとる訳にはいきません。

私は徐州では、佐助を商人としても一人の乙女としても支えていきたいのです。

才蔵様から佐助様の過去を聞き、その場に居合わせる事ができなかつた自分を悔しく思いました、

これからはできるだけ佐助様のお側において、佐助がお辛い時は節が慰めてさしあげるんです。

その為には一刻も早く佐助の元へ行きたいのですが…

side 月

「ねえ詠ちゃん、私の髪型おかしくない？」

「月、大丈夫だよ。月は今日も可愛いから」

詠ちゃんは、大丈夫だって言ってくれるけど、久しぶりに佐助さんに会えると思うと、何か落ち着かないんです。

私は佐助さんだけの侍女なんですから、佐助さんのお部屋を綺麗にするだけじゃなく、私も綺麗な格好でお仕えしていたいです。今までは、考えた事ありませんでした、一人の男の人だけの為に綺麗でいたいなんて。

いつか佐助さんにわかってほしいんです、他の誰でもなく佐助さんだけを見ている女の子がいるって。

久しぶりに佐助さんに会える日なのに、不満もあるんです。

side 恋

恋おかしくなっちゃったのかな？

佐助に早く会いたい、けど会うのが怖い。

もし佐助に嫌われたらと思うと、涙がでそうになる。

恋お仕事一生懸命頑張ったって言えば佐助は誉めてくれるかな？

霞にお願いして、髪のかし方とかも教えてもらった、今の恋は変じゃないよね佐助。

やっぱり早く佐助に会いたいけど…



side 一刀

背中に突き刺さる視線が、とんでもなく痛い。

今俺が先頭を進んでいるから、当たり前なんだけども。

今回誰が一番に徐州の城に入るかで、かなり揉めた。

閻温さんは「軍師が先つすよ。軍師は状況把握が大事つすから、私が一番に」

桃香は「やっぱり代表が先に行くのが一番だよ、城主の私がいくな」

王烈さんは「軍が来ると民は警戒をします。ここは商人の私が行くする事で民の気持ちを和らげる事ができると思うので私が行きたいです」

月は「せっかくお城に皆様が入るのですから、まず侍女が先に行きお城を綺麗にして皆様をお迎えしたいです」

恋は「敵がどこに潜んでいるかわからない。だからまず恋が行く」

全員が中々譲らなかつたんだよな、月がああ四人に負けなかつたのには驚いた。

で佐助さんから民の間で、天の御遣いの人気が高まっているから北郷殿が先行して欲しいとの連絡が来たから俺が先頭なんだけども……

「おや、主駄目ですぞ、新しい城に入るのでから緊張せず堂々と行きましよう」

「星違うよ。緊張じゃなく背中に殺気に近い視線を感じて落ち着かなくてね」

「仕方ないですよ。あの五人は佐助殿に一刻も、早く会いたくて仕方ないんですから」

「今回は長かったしね」

「それより才蔵殿から聞いた話が大きいでしょう。我は単純に怒りましたが、あの五人はその時に側に入れなかった悔しさや、その時の佐助殿の気持ちを押し量り泣いておりましたからな」

「それじゃ、これ以上我慢させない様に早めにいくか」

「ですな」

劉備軍は、一路城へと向かって行く。

城には小さいがそれぞれの中で大きな存在となった男が待っている。

再開を目指して それぞれの胸の内（後書き）

恋姫に比べてオリキャラの黎、節、才蔵は負けていませんでしょうか？

感想、指摘お待ちしております

佐助 同盟に囲まれる(前書き)

初めて書く小説で、恋姫のキャラこれでも絞ったつもりが、五人それぞれ書くと偉い量に

## 佐助 同盟に囲まれる

side 関羽

徐州で私達は、かなり好意的に受け入れられた。先行した佐助殿が、地元の有力者と繋ぎを作っていてくれたお陰だ。有力者達は口々にご主人様や桃香様を褒め称える言葉と佐助殿への感謝を述べて言った。

ある者は娘の病を治してもらったと、ある者は賊を退治してもらったと、他にも無実の罪で捕らえていた者の釈放。

挨拶は後を絶たない、だから……

「愛紗ちゃん、挨拶はまだ続くのー？」

桃香様は、目に涙を浮かべておられる。

「佐助殿は逃げませんから、城主のお勤めをお果たし下さい」

「佐助君が新しいお仕事に行っちゃうよー」

「佐助殿のお仕事を台無しにしないで下さいね」

「ううー、わかったよー。ぜっーたい後から自由時間作ってねー」

「はい、夜には終わるので」

「絶対だよ、佐助君は私の笑顔を待ってるんだから」

「来訪の者は桃香様のお言葉を待っていますよ」

side 黎

鬼つつ、いけつつ、鈍感つつ、佐助さん貴男に会いたくて会いたくて胸を痛めていた乙女に対するこの仕打ちはなんすか？

城に付き、一段落して案内された先には大量の竹簡と書類。

ご丁寧に黎へ、孔明殿へ、鳳統殿へ、賈馱殿へと分かれている。

こんな時に断りにくい真名は逆に辛いつつ。

内容は近隣する諸侯の防衛対策について、有力者や実力者への雇用に関して、徐州の生産能力と税に関して等多岐に渡っているんすよ。

「ちよつ、黎。何で僕の方まであるの？」

「佐助さんは能ある者は使う人なんすよ」

「黎さん、詠さんとりあえず片付けましょう」

佐助さんからの扱いに慣れた朱里と雛里が諦めた用に提案してきたつつ。

「夜までにはギリギリ片付く量つつね」

（佐助さん、覚悟するんすよ。絶対に屋根の上での続きをしてみらうつつよ）

side 節

「王烈様、佐助様からお預かりしています」

徐州支店の者から受け取ったのは、徐州で取れる農産物や鉱物の一覽とその加工方法及び徐州の有力商人に関する書類。

（佐助様は、何とも色気のない恋文をくれるのですね…。節がどれだけ佐助様を思つて胸を痛めたか、どれだけの夜、枕を涙で濡らしたかがお分かりにならないのでしょうか）

「しかし佐助様のもたらしてくれる情報は、我ら商人にとって黄金に等しいですね。直ぐにでも王烈様の婿に欲しいくらいですよ」

「な・な何をおっしゃっているのです。さあ、商人は時を見るのに敏でなくてはなりません。佐助様の想いに答える為にも頑張りますよ」

（夜までには一段落しますね）

side 月

佐助さんから私宛てに届いていたのは、武官・文官の部屋割りの一

覧。

(へう)。お部屋のお掃除してお荷物を運び入れて、夜まで終わるのかな？詠ちゃんは文官の仕事に行っちゃうし)

まずは、佐助さんのお部屋の掃除をしなきゃ、これだけは誰にも譲りたくないんです。

佐助さんのお部屋は佐助さんと同じ暖かいお日様の臭いするんです。

お掃除の前に深呼吸すると隣に佐助さんが居てくれる感じになるから頑張つて夜には終わらせてみせます。

side 恋

「霞」

「なんや恋？」

「手合わせ、全員と一回で終わらせる」

「駄目や、武官の選考なんやから。一対一でやらなあかん」

「グスッ」

「そんな涙目で上目使いしてもあかん。きちんと相手の実力を計るんやで。ぶっ飛ばすのも禁止」



「恋殿諦めるです。霞は才蔵に言われたから絶対に曲げないのです」  
「なっ、ねね何言ってるんや。誰もあんな根性ひん曲がってる忍びの事なんて…」

「そりゃ格好ええし、強いし口は悪いけど優しい所あるから少しええなあ思ったりも…」

「ねね次」

「はい、次の人入るのです」

「おいつ、これじゃうちが純情な乙女みたいやないか」

「霞、大丈夫。才蔵は佐助の友達だから大丈夫」

「れ恋に、上から目線で見られてもうた」

「当たり前なのです。恋殿は真名で呼ばれているのです。張飛に邪魔されて禄に話もできない霞とは違うのです」

「お仕事頑張つて、恋佐助に誉めてもらおう」

side 才蔵

佐助の野郎、ついてそうそう警備の仕事回しやがって。

しかも鈴々と二人でなんて…  
偉いつ、持つもんやっぱり可愛い娘と親友だな。  
旅であまり親子の時間持てなかったしな。

「お父さん、この商店街はどこを重点的に警備させたらよいのだ？」

「まずはあの裏通りだな。商店街からは死角になってるから定期巡回をすれば泥棒やスリを事前に防げる。後は南口は直ぐに城へと続く道に繋がるから途中で監視を起きたいな」

「流石はお父さんなのだ。お父さんは鈴々の自慢のお父さんなのだ」

「そうか、そうか。おつ鈴々肉まん食べるか。民との交流も大事な仕事だぞ」

うん。やっぱり鈴々は可愛い。この警備は夜まで続くかもな。

その日の夜

side 一刀

みんなの仕事が終わった頃、城の広間に集められた。

広間にはご馳走やらお酒が並んでいる、佐助さんが、この日の為に用意してくれたらしい。

徐州の特産品を使用しており、徐州を口で知る為と言ってたらしい。

「あつ、佐助さんお久しぶりで…うわっ」

佐助さんに挨拶しようとした瞬間もの凄い力で弾き飛ばされた。

「大丈夫ですか？ご主人様。まったく桃香様達ときたら」

「仕方ないよ愛紗。それに五人の嬉しそうな顔見たらとても怒れないよ」

「ですね。さて我らも食べて飲んで明日から頑張りましょう」

side 同盟の面々

佐助さんの顔を見れたら、嬉しくて屋根の続きなんてどうでも良くなっただす。

でも佐助さんは、超がつく程鈍感すからね。

ちゃんと言葉にして伝えるっす

「佐助さん会いたかったです。話したかったです。佐助さん大丈夫っすよ、佐助さんの魅力もわからない村娘の記憶なんて私が記憶の片隅の奥底に追っ払ってやるすっよ」

佐助君に会ったら自然に笑顔を見せてあげれるか心配したけど、そんなのは杞憂だった。私は佐助君とお話できるだけでも嬉しくて笑顔になるんだもん。

「佐助君だ、本物の佐助君だよ。私嬉しすぎて涙でてきちゃった。駄目だね佐助君の為にいつでも笑顔でいるって決めたのに。このお城での二人の生活で楽しい思い出をいっぱい作っていいよ」

佐助様の顔を久しぶりに見たら、それだけでも嬉しかったのですが…いえ、これだけで満足していたら外の方々に負けてしまいます。

私がこれから佐助様を支えていくんですから。

「佐助様ようやくお会いできて節はうれしゅうございます。節はずっとお側にいますから、私の前でなら弱い所を見せてももいいんですよ。私は佐助様がお側にいてくれたら平気ですから」

やっと佐助さんに会えたのに恥ずかしくてうまく喋れないんです。

「あの、その、へうへう。お部屋お掃除しておきましたので」

話したいのはこんな事じゃないのに、手を握りしめて意を決する。

「佐助さんお会いしたかったです。このお城でも精一杯お世話しますので、何かあったらおしゃって下さいね。私は何時でも佐助さんだけを見えますから」

佐助だ、佐助がいる。

当たり前だけど、それが嬉しい。

「佐助恋お仕事頑張った。佐助に早く会いたかったら。髪をちゃんとなでて女の子している。おかしくないかな」

佐助は優しく笑って頭を撫でてくれた。それだけなのに心がポカポカしてきた。

side 佐助

「みんな元気そうで安心したよ。」

「しかし今日は勢いが凄いいし、何か気になる言葉がでてきたが」

「気にする必要はないっすよ。さあご飯食べるっすよ」

「佐助様はお疲れでしょう。節が食べさせてさしあげましょうか？」

「節ちゃんみんなで食べよ。佐助君も賑やかな方がいいよね」

「佐助さん好きな料理があつたら月に教えて下さい。今度作りますから」

「佐助これ美味しいから食べる」

佐助の周りは、一気に賑やかになる。

「一刀は、勢いに負けて佐助に挨拶に行けずいたが」

この男は平気だった

「よつ 佐助。まさかお前がモテる日がくるとはな。世の中何があるかわからんな」

「おい才蔵。まさかお前あの事をみんなに……」

「あの事、もしかしてあれか？お前が『俺を好きになる女なっているわけないよな』って泣いた時の事か？その前の事件は話したぜ。いやお前は果報者だよ」

顔を真っ赤にしている佐助に、同盟の乙女達は、ここにいるとばかりに距離をさらに縮めてきた。

佐助 同盟に囲まれる（後書き）

この上他のキャラ追加したらとんでもない事になりそ

指摘感想お待ちしております

佐助 袁に対抗する（前書き）

独自の策は穴だらけ…



## 佐助 袁に対抗する

### 劉備軍会議の間

「今、一番注意しなきゃいけないのはやっぱり袁術っすね」

「佐助君、袁術ちゃんの主力は孫策さん達だよね」

「だが孫策様は袁術からの独立をはかっているらしい」

「なら孫策達と手を組むのがいいっすね。袁術が攻めてきたら、居城を孫策に攻めてもらっすよ」

「なら、一度孫策様に会いに荊州に行くか」

「佐助さんまた遠出をするんすか？」

「佐助君駄目だよ、許可しないから。城主権限で許可ださないもん」  
「いや、俺以外行けないだろう。才蔵は顔知らないし。後節頼みがある」

「佐助さん、浮気は厳禁っすよ。必要以上の女性武将との接触は許さないっすよ」

「佐助君、真名を簡単にもらっちゃ駄目だよ」

「佐助様、私達がいる事をお忘れにならないで下さいね」

「ないない、俺がモテる訳ないだろ」

「佐助、五人もの女に好かれてる奴が言くと嫌味にしか聞こえないぜ」

「才蔵何でこんな時だけ。いつもみたいにこんなチビ猿もてるわけないだろとか言えよ」

「チビ猿からエロ猿に変えてやろうか。策があるんだろ、とつと指示だして早く帰って来い。でないと俺の仕事が増えてたまらん」

-----

荊州

さて、孫策様を探さなきゃいけないんだが、仮にも一国の王だからな。

簡単にいるわけないよなとりあえず酒場で評判を聞くか。

「おじさーん、お酒おかわり」

簡単にいた…

てか王が居酒屋で飲んでくれているのかよ。

「お久しぶりです。孫策様」

「あれ、もう酔っちゃったかな。佐助が見える」

「見えて当たり前です、目の前にいるんですから」

「で今日はどうしたの？ここまでお酒飲みに来たとか？」

「劉備から書簡を預かって参りました。大事な事なので明日にでも」  
「今でも大丈夫らよ」

「雪蓮、それだけ酔っ払った相手に書簡を託す訳ないでしょ？」  
いつの間にか来た周瑜殿が呆れた顔で孫策様を見下ろしている。

「あつ、今度は冥琳が見えるー」

「佐助殿今はこんな状態だ、私が預かって構わないか？」

「周瑜殿、むしろお願いします」  
書簡を手渡す佐助。

「ふむ…、しかしそう簡単に動いてくれるか」

「その為に……」

「ほう、……か、それは面白い」  
内容だけに、コソコソ話になる二人。

「うー。冥琳も佐助も相手にしてくれないー」  
孫策は子供の様に拗ねはじめ。

「仕方ない。なら雪蓮、これを」

「策なんて見ても面白くないー。……何これっ！佐助あんたモテモテじゃない。」

先までの拗ねは、どこへやら大笑いしだす孫策

その書簡には

佐助に対する過度の女性武将による接触の禁止

佐助に対する女性武将からの真名の譲渡の禁止

等が城主劉備と軍師閻温により書き記され、王烈・呂布・侍女月の署名がされていた。

「あいつら書簡に何を書いてるんだ！孫策様それは撤収します」

「これは私達に宛てられたら書簡だからだーめ。私達は袁術の動きにあわせて攻めるから」

.....

とりあえず袁術の城下町で民の反乱の兆しがあるとの流言をながし、城の中に蓄えられていた蜂蜜を全部盗みだした。

蜂蜜は孫策様に渡した、栄養価が高いから弱っている民に分け与えてもらった方がよいからだ。

餌はまいた後は食いつくのを待つだけ。

帰ろうとした時に、ある噂を聞いた袁紹が公孫贇殿の城に攻め込もうとしていると、公孫贇に何かあったら桃香が…

「男に二言無し、笑顔を守ってやらなきゃな」

「駄目です、敵軍の数が多すぎます。力押しで陣が崩されていきます」

（くっ、麗羽の奴いきなり大軍で攻めてくるなんて）

「ひとまず城に撤退する」

城中公孫贇私室

（夕方までもつたが今からじゃ援軍も望めない。降伏勧告もしてこないから滅ぼされるの待つだけか）  
突撃を加えて潔く散るべきか悩んでいると

「公孫贇殿失礼します」

声を掛けてきたのは桃香の所の佐助だ、しかし何でここに来た。

「佐助、何でここにいるんだ。この城はもう長くは持たない、お前に何かあったら桃香に申し訳がたたない。早く逃げてくれ」

「公孫贇殿が桃香の親友だから来たんですよ。俺が時間稼ぎをしますから、明日の夜明け前に裏口から退出して徐州に向かって下さい。正門を開けておけば民に危害を加えないでしょう」

「わかった。佐助はどうするんだ？」

「それは徐州で会えたら教えますよ」

side 佐助

夜になるのを待って俺は忍び服に着替えた。

さあ袁紹、また忍びの被害に合ってもらうとするか。

袁紹軍の金ピカ鎧が焚き火に照らされて昼間以上に目立っている。

(さてやりますか)

袁紹はつと……一つだけ馬鹿みたいでかく派手ななあそこだな。

「オーツホツホ、城に閉じこもるなんて地味な伯珪さんらしいですわね」

いたな、でかい独り言を喋りなら悦に浸ってやがる。

俺は石を袁紹に向かい転がした。

「うん？なんですか？」

「シエーツツ」

心の一法で、気絶させた袁紹を寝台にくくりつける。

袁紹は自己主張が、やたら強く将や兵が独断で動くのを嫌う、だから明日も袁紹が起きて号令を下すまで好機でも動かないだろう。

ついでに、佐助は水瓶に下剤を大量に流しこむ、兵を倒すのではなく時間稼ぎをしておきたいからだ。

翌朝

「ねえ文ちゃん。姫様まだ起きないのかな」

「う、ごめん、斗詩あたい厠に行く」

### 徐州劉備の城

「佐助君ありとう、白蓮ちゃんを助けてくれて」「改まってどうした？言つたるお前の笑顔を守らせるって、だから俺が勝手にやったんだよ。さて袁術への備えをしとくか」

「普通なら手柄を主張するのに変な奴だな」

「白蓮ちゃん、あれが私の佐助君なんだよ。」

「命を救ってもらったお礼はしなきゃな。真名を預けるのは…」

「ぜ、絶対却下だよ」

慌てる桃香を見て苦笑いをする公孫賛。

佐助を好きになったと初めて聞いた時は桃香ならもつと素敵な男がと思っただけれども、親友が見つけた恋は正解だと今は納得していた。

佐助 袁に対抗する（後書き）

次は袁術戦

指摘感想お待ちしております



**佐助 袁術を策にはめる(前書き)**

お気に入り登録増えてきて感謝です。  
調子にのって2作目を書いています

## 佐助 袁術を策にはめる

side 才蔵

俺は、佐助を好きだと言う変わり者の商人王烈から預かった物を携え袁術の城へと向かった。

「私は徐州で商売をしている者です。よろしかったら袁術様にこの蜂蜜を味わつて頂きたく持参いたしました。あつお題は結構です、徐州では蜂蜜が豊富にとれますので」

王烈から預かったのは、蜂蜜しかもかなり高級な物らしい。

「真か、真に徐州では蜂蜜がたくさんとれるのか？」

(そんな訳ないだろ、近くの州の特産くらい覚えとけよ)

「お嬢様よかったですね、今朝蜂蜜が盗まれて泣きべそをかいていたお嬢様も可愛いですが笑ったお嬢様はもっと可愛いです」

「七乃早く蜂蜜水を作るのじゃ」

「これは内密ですが徐州では袁術様を慕う者が多いと聞いております、もし袁術様が軍を率いて来れたら有力者達は、こぞつて蜂蜜を献上する事でしょう」

「七乃、徐州に行くのじゃ。蜂蜜を献上させるのじゃ」

「わかりました。確か徐州は劉備ですね、まだ新参者だから民もお嬢様を喜んで迎えるでしょう。噂の民の反乱は孫策達にまかせてお

けば大丈夫でしょう」

(おいおい、こいつらの頭ん中はいつでも春爛漫なのか、普通こんな策にあっさりのらねーぞ)

「では私はこれで」

後日

俺と佐助は徐州の州境の崖の上にいる、下を見下ろすと袁紹の所と変わらないド派手な鎧を着た軍隊が行軍している。

「なあ、佐助なんで袁術はこんなあっさりと攻めてきたんだ」

「幼くして当主になったから、周りに意見する奴が皆無らしいな」

「そついや軍師みたいのも、甘やかしてたな」

side 佐助

「おっ、いた。恋今回の戦は俺と一緒に動いてもらっていいか？」

「コクっ」

恋は嬉しいらしく、頭の二本の毛が犬の尻尾の様に動いている。

「じゃ後から武器を持って正門に集合な」

その場を後にしようとする、恋が俺の服の端を掴みついて来る。

「恋どうした？」

「佐助と一緒にいく」

「わかった、わかったから得物持って来い」

佐助の後を恋がチヨコチヨコとついて行く。

side 恋

佐助の後をついて行くと、佐助が恋をおんぶしてくれた。

黎や桃香から聞いていたけど、佐助はもの凄く早かった。

早いのは嬉しいけど、ずっと佐助におんぶしてもらいたいから残念。

「ついたぞ」

佐助から降りると、袁術の兵が歩いていった。

「これから俺と恋で奇襲をかける、向こうが陣を組みそうになったら俺が背負って撤退する、これ午後まで繰り返して行くぞ」

「わかった、恋頑張る」

side 佐助

しかし流石は呂布だな、恋の一振りでも袁術の兵が五、六人が吹っ飛んでくんだから。

この恋による奇襲は、かなりの成果をあげた。

倒した兵は百人くらいであるが、何時どこから襲ってくるかわからない呂布に袁術軍は大分神経を参らせている。

この後には、楽しい夜がまっているんだから、楽しみにしときな。

その日の夜

「うしつ、才蔵久しぶりに二人で暴れるか」

「しっかし相変わらず、えげつない策をたてるな。昼は呂布で神経を参らせて夜は忍びで寝かせないってか」

佐助と才蔵による夜襲は朝型まで続き袁術軍はあまり寝る事ができないまま朝を迎えた。

その後も昼は呂布に襲われ夜は忍びの夜襲により、袁術軍の士気や体力はみるみるうちに低下していった。

「七乃眠いのじゃー」

「お嬢様眠いとかは言わないで下さい。私も眠くなります」

「昼寝をしたいのじゃ」

「駄目ですよ。敵の領地で昼寝なんてとんでもないです」

「た、大変です。劉備軍が攻撃をしてきました」

「武将は誰ですか」

「公孫贇と帳遼の騎馬隊です、陣が蹂躪されています」

「横撃が来たぞ、こっちは張飛と趙雲だ」

「正面から関羽と華雄の部隊がきます、もうもちません」

「て、撤退をするのじゃ、もう逃げるのじゃ」

「伝令です、孫策が裏切り城をとられました」

side 張勳（七乃）

こんなの戦じゃありません。

劉備軍より圧倒的に多い兵で攻めたのに、祿に戦えずに負けるなんて……

今まで会った殆どの武将や軍師は誇りや信義を大事にするお馬鹿ばかりでしたから、策にはめるのも楽勝でしたが、きっと劉備軍には私より悪い人がいるに違いありません。

でなきゃこんな可愛いお嬢様をこんな目にあわせる事ができない筈です。

いつかきつと、そいつに一泡吹かせてやります。

その後

「佐助、おんぶ」

「恋またかよ、まったく仕方ねーな」

恋は佐助のおんぶが気に入ったらしく、度々せがむ様になっていた。

当然

「恋は昨日してもらったじゃないっすか、今日は私っすよ」

「黎ちゃんずるいー。私を最近佐助君にオンブしてもらってないもん」

「皆様は何時でもお願いできるじゃないですか、会う機会が少ない私先です」

「へー、良かったら私も」

「わかった全員やってやるから順番だけ決めてくれ」

敵は手玉にとれるも、同盟に対する主導権は全く握れない佐助であった。

佐助 袁術を策にはめる（後書き）

幕間で七乃の言葉に關したやつを書きたいです。  
感想、指摘お願いします



佐助 秘密の行動 湯煙の中で（前書き）

微妙に下系ですので嫌いな方はスルーして下さい

佐助 秘密の行動 湯煙の中で

side 才蔵

「佐助の様子がおかしい？顔は前からおかしいけどな」

昼休み中の俺に話をしてきたのはいつもの五人組。

「最近仕事が終わると直ぐにいなくなるんすよ」

「お昼休み潰してお仕事を片づけているんだよ。今も書簡書いてるし」

「街に寄られる時間も減りました」

「夜も帰りが遅いです」

「恋寂しい」

「まっ忍びつてのは、元々一人を好むしな。策の仕込みや忍具を作ってるかもしれないだろ」

（洒落でも新しい女ができたんじゃね？とか言ったら修羅場だな）

「で、佐助には聞いたのか？」

「まだつすよ。後を着けたくても私達じゃ無理つすし」

五人とも押し黙った。

余計な事を聞いて佐助に嫌われたくないし、好きな女ができて逢い引きしてる何て言われたら…。

いくら佐助はモテないと言われてもそこは恋する乙女、実際にこの五人以外に好かれていても不思議に思えないのだ。

side 黎

「はー、わかつたつすよ。私が聞いてみるつす、この中じゃ一番佐助さんと付き合いが長いんだし、軍師相手に仕込みのない詐術は効果薄いの佐助さんも知ってるつすからね」

その日の夕刻

定時になり帰ろうとする佐助の前に立つ黎

「佐助さん急いでどこへ行くつすか？最近様子がおかしいつすよ。私にも言えない事をしてるんじゃないつすよね」

佐助を見つめながら目を潤ませてくる黎

「なつ、何をどう解釈したらそうなるんだよ」

「なら何をしてるか正直に言うつすよ」

「正直つて、今初めて聞いたんだろつが。別に内緒にするつもりもなかったしな。残りの四人にも声を掛けて後から街の門までこい。あつ各自着替えと手拭いを持ってくるように言つとけ」

side 佐助

「全員来たか。途中まで歩いてもらっぞ」

十分程歩いて着いた先は崖下だった。

「佐助君何にもないよー」

「だから途中まで歩いて言っただろ。こっからは俺がおぶってく」

崖の上には細い道があり、その先には小さな小屋が建てられていた。

「佐助様はこの小屋にみえていたんですか」

「ああ、正確は小屋の先が主な目的だがな」

小屋の中は、作りかけ忍び道具や保存食の肉や魚、囲炉裏に鍋までかけてあった。

「佐助さんは、この小屋まで来て何をなされていたんですか？」

月が小首を傾げて聞いてきた。

「小屋はおまけさ。少し前に薬草を探しにきたらここを見つけてな」

小屋の裏口を開けた先にあったのは露天風呂、ご丁寧に屋根まで着いていた。

「俺らがいた所で温泉って言う天然の風呂だ。こっちは水浴びが主流だろ。どうも淋しくてな、ここを見つけた時は嬉しかったな。でも周りは何もないから小屋を建てて、ここで飯食って風呂入って忍具を作ったりしてたんだよ」

「佐助君、何で内緒にしてたの？」

「まだ作ってる途中だしそれにいくら仲良くても風呂に行こうって誘うの恥ずかしいしな」

「私は一緒に入っても平気っすよ。温泉つても興味あるっすから」

「私も佐助君と入りたい。お背中流してあげるよ」

「佐助様になら、いえ佐助様にしか肌を見せたくありません」

「へう、佐助さんとお風呂…」

「佐助早く恋と入る」

「ちよっお前ら、ここで脱ぐな。せめて俺が目をつむってからにする」

side 黎

この温泉つての気持ちいいっすねー。

こんなの内緒にしておくなんて佐助さんありえないっすよ。

しかし何すか。桃香の反則なかさは、私も小さいつもりはないんすが桃香のはありえないっす。

節は色が白いつすね。

身体も細くては柳腰、何より温泉で暖めれてほんのり赤くなってる姿は危険すね。

月様は細い身体補える恥ずかしがる所作、警戒必要っすね。

恋は褐色の肌に引き締まった身体、何よりも警戒をせずに佐助さんに接近するのは辞めてほしいっす。

先から私が目を離せないでいるのは佐助さんっす、身体が引き締まっっているのは予想していたんすが身体には幾つもの傷があったんすよ。

聞いたら修行や戦闘、拷問で着いたって話てくれたっす。

でも照れてる佐助さんは可愛いつすねー、多分御遣いならジロジロ見てくると思うんすが、佐助さんはできるだけ遠くを見てみんなを見ない様にしてるんすよ。

後日

「佐助さん今度二人つきりで温泉に連れて行ってほしいっす。できたら泊まりがけでお願いするっすよ」

「駄目だ、俺が我慢できなくなる」

「佐助さん何を我慢するんすかー？」

この温泉が、きっかけて佐助さんとの仲がさらに深まったんすよね。

佐助 秘密の行動 湯煙の中で（後書き）

削除されないよな？

感想指摘お待ちしております

同盟対張勳（七乃）（前書き）

作者は張勳（七乃）を二次創作でしか知らないので、話し方とかは勘弁して下さい



## 同盟対張勳（七乃）

「黎あれはなんだ？」

「輕薄御遣いが巡回の途中で拾ってきたらしいですよ。元いた場所に戻して来いって言ったんすけどね、捨て犬じゃないんだからって拒否したんすよ」

目の前で飯を、がつついているのは捨て袁術と捨て捨て張勳こと、袁術主従だ。

「うちに戦をしかけた後、袁紹達に城を奪われ行き場所が無くなって行き倒れでしたらしいですよ。今食べてるのも徐州の民が納めてくれた物なんすよね」

輕薄御遣いは、物のありがたみを知らないつと黎がぼやく。

「袁紹が曹操に滅ぼされてなきゃ送り届けるんだがな」

「内政に携わる者としては、あんな役たたずにかける経費はだせないうつすよ」

「やつぱり捨てるか？」

それを聞いた袁術一行は

「七乃、あの意地悪女がチビ男に妾達を捨てる計画を相談してるのじゃ」

「お人好しの御遣いなら同情をひけば余裕だと思っていたんですが、でも大丈夫です、全て七乃にお任せ下さい」

「流石は七乃じゃ、でどうするのじゃ」

「あのチビ男はどうみてもモテません。だから私が誘惑したらイチコロに決まっています」

「流石は七乃あくどののじゃ」

「本来なら話すのも嫌なんですがお嬢様の為この七乃手ぐらいは握らせてあげましょう」

「頑張るのじゃ七乃」

小声で相談はしていたせいで、彼女達は劉備軍最大の禁忌に触れようとしている事に気付いていなかった。

数日後

「あの、チビ野郎もとい佐助さんちょっとよろしいでしょうか？」

「確か……張勳殿どうなされましたか」

「私ありえない事に佐助さんに一目惚れしたみたいなんです。だから喜んで私とお嬢様の面倒を見て下さい」

「張勳殿何の冗談でしょうか？」

「わかります、わかります。格好だけはいいい天の御遣いに女性の心を全て持って行かれ女性に、こんな事を言われる奇跡を信じれないんですね。でも特別に手は握らせてあげますから、とっとお嬢様の蜂蜜を買って来て下さい」

（色仕掛けなら、もっとうまくやれよな）

心の中で苦笑いしていた佐助であったが、次の瞬間震える程の殺気を感じとった。

「あのー張勳殿、その辺りでやめといた方がよろしいかと」

「顔に似合わず照れないで下さい。気持ち悪い、貴男みたいな不細工が私の様な乙女と話す事ができる奇跡なんてもうないんですよ。それに……えっ？」

背後に圧力を感じ張勳が振り向くと佐助同盟の五人が修羅の形相で立っていた。

「こ、これは劉備様達どうされました、あつ城ではしたくない真似をしていたのを怒るのなら佐助さんが私を口説いてきたんですよ」

「最初から聞いてたけど張勳ちゃんは、私の大事な佐助君にあんな事言っただねー。へーよくわかったよ」  
顔が笑っても目がわらってない桃香。

「よくそれで軍師が務まったすね。話の内容で合っていたのは、御遣いが見た目以外は取り柄が無いって所だけっすよ。後今後二度と佐助さんの名前を呼ぶのを禁止するっす」

こちらは怒りを微塵も隠さない黎。

「佐助様と私達の大切な時間を貴女のくだらない戯言で浪費しないで下さい。佐助様の可愛らしいお顔を気持ち悪いなんてありえませ  
ん」

怒りを通り越し醒めた目で見ている節。

「佐助さんとお話なら私がいくらでもします。夜通しでも……へう  
」

温泉小屋で過ごした甘い時間を思い出して、一人の世界に旅立つ月、  
その目に既に張勲は写っていない。

「恋から佐助をとるなら容赦しない」  
殺気満点で方天画戟を構える恋

「えっえっえっ？貴女達おかしいんじゃない？なんでこんな男の為  
にそんなに怒るの？」

「各自、袁術主従に対する処遇を述べるつす。内政から今後一切の  
経費をださないつす」

「私達の本店・支店関係店舗では今後一切の取引を行いません」

「侍女は一切の面倒を見ません」

「お城、街での宿泊も禁止するね。あつ野宿はしていいよ」

「今度佐助に近づいたら本気で攻撃する」

……  
「って事があつたんですよ」

「何それ！可笑しい、いや相変わらず貴男達のドタバタ聞いてると飽きないわ」

佐助が話しかけているのは、今や呉の王となった孫策。

「勘弁して下さいよ。北郷殿や関羽殿、孔明殿が来て洪々大人しくなつたんですから」

「それで佐助は何が欲しいのかしら」

「流石は孫策様、袁術の所有していた宝石か何かを貰えたらあの主従の生活費にあてたいのですが」

「あら、随分人が良いわね。又あの娘達怒るわよ」

「ここに来るのにも素泊まり、お土産屋付きでようやく許可おりたんですから勘弁して下さい」

「天の御遣いや劉備の評判と民の感情への配慮ね。」

「ええ、北郷殿も桃香も仁愛で民に慕われてるから、流石に行き倒れが領内で出るのは避けたいですし、最近戦を仕掛けてきた袁術達を税で養うのはギリギリの生活から税を納めている民の感情を思う

といたくないですし」

「良いわ、悪趣味すぎてつきたくない宝石あったから、こないだのお礼も含めてあげるわ」

「ありがとうございます、後日節と来て他の宝石の買い手をみつけますので」

「ありがとうございます、信用できる商人じゃないと足元みてくるものね。でも袁紹まで来ちゃったらどうする？曹操は協力しないわよ」

一刀が袁紹主従と会わない事を祈る佐助であった。

同盟対張勳（七乃）（後書き）

袁術達の仕事や袁紹どうしよう

指摘感想お待ちしております

佐助 袁紹に悩む（前書き）

月が皆様のイメージと違うかも



## 佐助 袁紹に悩む

嫌な予感は当たるもの、警備の兵士からあがってきた書類を見て俺は盛大な溜め息をもらした。

徐州で最近怪しい三人組を見かける民が多いとの事。

それは隠れてる様だが格好が派手で独特の笑い声をあげて大変目立つらしい、やっぱりあの主従も徐州に来たのか。

ちなみに袁術は私塾に住み込みで入学させて勉強をさせている。

周りには自分より小さい子供もいる為か我が儘を言わないどころかキチンと面倒をみている。

最近では袁術お姉ちゃんの子守歌でなきや寝れないと駄々をこねる子もいるらしく妾は人気者じゃからと嬉しそうに話していた。

張勳殿は、申請された経費の検査役をしてもらっている。

うちの連中はお人好しいから、どうしても着服を見抜けなかったから、同じ小悪党の張勳殿は適任だった。

やる気上げる為に不正経費を申請段階で見つけた場合は、その金額の幾らかを報酬として支払っている。

お嬢様の蜂蜜水の為に頑張るそうだ。

それより袁紹どうしよう、早く隣の州に行ってくれないかな。

絶対俺は恨まれてるし、北郷殿を軟禁しておこうかな。

「おつ、佐助どうしたんだ。腹でも痛いのか？」

「公孫贇殿、痛いのは腹じゃなく頭ですよ」

俺は先の書簡を手渡した。

「あちゃー、これは確実に麗羽達だな」

「公孫贇殿、昔からの知己ですよ。袁紹の嫌いな物とか知りませんか？徐州から追い払えるくらいのやつを」

「あのな蚊とかじゃないんだから、しかし袁術は保護したのに袁紹は随分嫌うんだな」

「洛陽で思いつきり策にはめましたからね。確実に恨まれているから扱い難いんですよ」

「大丈夫だと思うぞ、麗羽は策に気付いてないと思うし、まあ逆恨みはするだろうがな」

「公孫贇殿もしもの時は監視役を…」

「いーのかなー。私は散々桃香からノロケを聞かされて色々知ってるんだよな」。口軽くなっちゃうかもな」

「違う手段を考えておきます」

「まっ、桃香自慢の佐助君なら、大丈夫だろ」

そう言い残して公孫贇殿は行ってしまった。

顔良殿は文官でも武官でも使えるし、文醜殿は武官にするとして。問題は袁紹だよな。

もう袁家は滅んだのを自覚させる為にあの主従は確実に引き離れた方がいい。

悩みまくっていると目の前にお茶が置かれた

「佐助さんどうしたんですか？ 難しい顔をされて」

「月か、これだよ」

月に書簡と俺の考えを伝える。

すると何故か月は嬉しそうに微笑んで、俺に抱きついてきた。

「やっぱり佐助さんはお優しいですね。どうしたらその人が本当に幸せになるか真剣に考えてくれているんですから」

耳元で囁く様に話しかけてくる

「俺は徐州の益しか考えてないよ」

「私と詠ちゃんの距離を置いたのもお互いに依存させない為なんですよね。お陰で詠ちゃんも自分したい仕事ができ喜んでいいますよ」

俺の首に手を回して体をさらに密着させてくる。

「月、随分大胆になったな」

「佐助さんせいですよ。私が積極的にならないと周りに負けちゃいますから」

月、目立つのも苦手だったんだけどな。

目立つか……袁紹は目立つのが好きらしいな。

「月のお陰で袁紹の算段もついた。まだ昼間だが小屋いくか」  
俺は月をお姫様抱っこして、窓から飛び出した。

「えっ！？ へっっ」

.....

後日やっぱり北郷殿は捨て袁紹達を拾ってきた。  
北郷殿には連れてきた責任として、袁紹の容姿を散々誉めてもらい  
節の店で扱っている服を着てもらい、阿蘇阿蘇の素人絵姿を勤めて  
もらった。

派手さを消した袁紹の人気は高く、節の店の服もかなり売れたとの  
事。

袁紹には劉備軍の宣伝及び徐州の特産品を宣伝役も勤めてもらって  
いる。

「流石つすね佐助さん。誰でも使い方あるんすね。あつ顔良と文醜  
は私達でしつかり釘をさしといたつすから安心するつすよ」

「黎ありがとな」

「佐助さん月だけじゃなく私達も時間あれば小屋に誘つっすよね？」

当然俺が断れる訳もなく才蔵の奴がエロ猿と呼んでくる回数が、と  
んでもなく増えていった。

佐助 袁紹に悩む（後書き）

感想指摘お待ちしております

## 益州 進攻の策（前書き）

今更 光栄の三国志を買ってプレイするか検討中。

## 益州 進攻の策

徐州城 佐助私室

史実通りなら、もう少しすれば曹操が大軍で攻めてくる、三国志での劉備は益州に攻め込み蜀を建国した。

益州の劉璋は優柔不断で覇気がなく、私兵集団の東州兵達を上手く取り締まれないでいるらしい。

それにより治安が悪化し民に不満がたまっている……  
佐助が思案に耽っていると

「ねえねえ佐助君、これ見てー」

部屋に飛び込んでくるなり桃香が差し出したのは手の平大の紙であった。

紙には笑顔の桃香が、描かれている。

「これ今流行ってる携帯絵姿って言うんだよ。私の絵姿も人気あるんだって、佐助君の部屋に飾ってね」

佐助が紙漉きの技術を節に教えたお蔭で徐州では紙が安価になっていた。

(益州への策に使えるかもな。ちょっと見に行ってみるか)

-----

佐助が節の店に行くと、いつも以上の人だかりで、店には人気絵姿番付なんて物まで張られていた。

「やっぱり一番は、桃香と北郷殿か。へー才蔵や黎も人気なんだな」  
しばらく佐助が眺めていると、顔見知りの店員が声を掛けてきた。

「これは佐助様、今主を呼んで参ります」

店員達にとって、佐助は節の思い人というだけでなく富をもたらす福の神でもあるので、顔をだすだけでも下に置かない扱いをしてくれる。

「佐助様を連絡を下されたらお迎えにいきましたのに」  
節は可愛らしく頬を膨らませている。

「それは悪かったな。しかし凄い人気だな」

「ええお陰様で、今回も佐助様の功績が大きいんですよ」

なんでも、阿蘇阿蘇に載った袁紹の絵姿を欲しいとの要望が強く始めたとの事。

「殆どの将の絵姿があるんだな」

「御遣い様の軍は美男美女揃いが多いからと、次々と要望が入りまして」

（確かに俺以外は美男美女ばかりだな）

「この絵姿は近くの州でも売る予定はあるのか？」



「ええ、他の州の方がお土産に買っていけますから検討はしますが」

「近々、益州でも売ってくれ。できたら東州兵達を中心に」

「わかりました。佐助様や才蔵様以外をお売りします」

「頼む。俺の絵姿もあるのか？そんなの魔除けにしからならねえだろ」

「私が個人的に作ってもらったのですが、桃香様達も欲しいとおしやりまして。安心して下さい、私達五人以外は持っていないので」

「他の奴は頼まれても、もらわないだろ」

-----

益州でも絵姿はよく売れていた。

それと同時に噂が広がっていく。

民には、天の御遣い様が益州の惨状を心配して近々民を救いにくると東州兵には、劉備軍の乙女達の中には武に暗い御遣いではなく武に強い男を求めている者もあり、州境の長坂橋から益州を見に来ていと

佐助は州境の警備を緩めさせ絵姿で人気のある乙女視察に向かわせた。

劉璋の指示に従う気がない東州兵達は、徐州への警戒を理由にこそぞつて州境に集まりだし、中には調子に乗り橋の半ばまで来る者まで

現れていた。

side 黎

今回の策は、とんでもなく素晴らしいんすよ。

私と佐助さんが州境で、いちやつくんすよ。

しかも佐助さんからの指名なんすよねー、桃香達も最初は騒いだっすけど適任は私しかないっすから仕方ないんすよねー。

まず手を繋いで、肩も組んで後私がつたお弁当を二人で食べるんすよ。きちんと東州兵達を誘導しなきゃいけないっすからね。

side 一刀

今俺達は、州境から少し離れた所に陣を展開しているんだけど

「ご主人様、まだー早く突撃しようよー。あー黎ちゃんくつつき過ぎ、もう佐助君もお弁当なら私を作るのに、何で私じゃないのかなー」

「仕方ないよ、桃香。いくら東州兵達でも城主は警戒するし、呂布さんなら恐れちゃうし」

「節ちゃん月ちゃんは絵姿の絵姿は売ってないし、でーも納得いかないよー」

side 佐助

東州兵は思惑通り憤慨をし始めている、益州で好き勝手している分  
自制心が弱っている、そんな時に絵姿で人気の高い軍師閻温が、背  
が小さく弱そうな男といちゃついているんだからな。

「佐助さん次はこれ食べて欲しいです。アーンするっすよ」

我慢が限界になったのか、東州兵の何人かが橋を渡り俺達を取り囲  
んだ

「おいチビ猿、お前なんか閻温ちゃんといちゃつく資格はないん  
だよ」

ようやく食いついてきたと、ホッとしていたら

隣からは「空気読めないんすかね、早すぎっすよ」

後ろからは

「やっと来たー。さあ佐助君早く来て」

と聞こえてきた…

side ある東州兵

チビ猿が閻温ちゃんを連れて逃げたので、追いつけたが、その先には  
徐州の軍が陣を展開していた。

益州 進攻の策（後書き）

ようやく蜀建国が見えてきた

佐助 劉璋を策にはめる(前書き)

この程度の展開を考えるのに何日もかかってしまった

## 佐助 劉璋を策にはめる

side 才蔵

「さて東州兵の馬鹿共、ようこそ徐州領内へ。なに安心しろ後ろの軍隊はお前らにや手を出さない。俺とそこの工口猿を倒せたら見逃してやるよ」

「才蔵、その工口猿をやめてチビ猿に戻してくれないか」

「うるせー、真っ昼間からいちやつく奴に選択権なんてねえよ」

目の前の男二人が口喧嘩をして油断してる隙に、とばかり東州兵達は一気に襲いかかってきた。

side 関羽

あのお二方は仲が良いんだか、悪いんだか。

直前まで口喧嘩をしてたかと思うと、東州兵が襲いかかってきた瞬間まるで打ち合わせをしていたかの様に共闘をして東州兵を生け捕ってしまうのだからな。

ご主人様やお二方からもたれされた天の知識により、我らの今後の行動は示された。

曹操から逃れる為の益州への進行。

義のない戦に私は反対したのだが

佐助殿から、将は民や仲間の為に敢えて泥を被るのも必要ですよと諭された、それにできるだけ御遣いの名前を壊さない様にしますと

話されたのでお任せする事にしたのであった。前に朱里が佐助殿の策を柿取りに例えていた。熟れた柿が手に触れただけでも簡単に取れる様に、相手を労なく倒す様に事前に仕向けてしまふのだと。

最初会った時は頼りない御人に思えたが、今はもし佐助殿が他の軍に属していたらと思うとゾツとしてしまふ。

桃香様にその事を話したら違う意味でゾツとされていたが。

side 佐助

さて、縛りあげた東州兵を引き連れてやってきたのはと劉璋の城。

桃香には、今回の関して抗議文を送らせている。

御遣い人気の為か東州兵が嫌われてる為か益州の民は敵意を向ける所かむしろ好意的であった。

そして劉璋を流石に今回の件に関して無視できないらしく、あっさりと謁見が行われた。

「そちらが、徐州からの使いの者か？」

「劉備様直属の兵で佐助と申します」

「佐助か、この度は誠に申し訳ない事をした。許して欲しい」

「許す許さないの前に今後の対応策をお聞かせ願いたい。我が主劉備は民が東州兵の被害にあわないかと大変心を痛めております。是非劉璋様が東州兵達の手綱を引き締める事を願います」

「努力はしてみるが、東州兵達は、吾の臣下ではない故に強くは言えないのだ」

「それでは劉璋様は東州兵が徐州に好き勝手に入るのを黙認せよと仰るのですか」

語気を強めると同時に殺気を劉璋に向けて放つ。

「そうではないが、我が軍では中々手が回らないのじゃよ」  
弱気になったのか、哀願する様に劉璋が見て来た。

「それでは我が軍が困ります。益州側の州境は荒れ地でございますな、税を収めます故にあそこに簡単な関所を作る許可を頂きたい。役人が一人か二人常駐できる程度の物と思って頂けましたら」

「それは助かる。東州兵達も多州の関所には無茶はすまい。佐助とやら劉備殿によろしく頼むぞ」

「劉璋殿のご決断嬉しく思います」

劉璋の将達は、気付かないのか劉璋を見放し桃香に寝返りたい為か一切口をだしてこない。

そう俺は役人は一人か二人と言ったも兵の数には言及していない。

帰りの道すがら、何力所の街に寄ったが御遣い軍の人氣は隅々まで浸透していた。



- - - - -

後日、関所と言う名の出城の建設が始まった。

近くの街の役人は既に抱え込んでいるから劉璋に連絡が行く事は先  
ずないだろう。

民に至っては建設を積極的に手伝っている、給金をだす、もの凄く  
喜んだので聞いてみると劉璋は無償の手伝いを強制しているらしい。

東州兵への対策としては、恋を守備隊長として派遣させた。

東州兵は元々黄巾党対策の為にできた集団だけに、黄巾三万を倒し  
た呂布の影響は凄まじく近寄りもしなかった。

出城はあくまで兵の駐留と軍資金や食糧の保管を第一にしてあるか  
ら、作りや守備性は簡素にしてある。

これで益州への策はひとまず落ち着くから、次は曹操達への対策だ  
な。

佐助 劉璋を策にはめる(後書き)

指摘感想お待ちしております

六文錢と長坂橋（前書き）

よーやく長坂橋

## 六文銭と長坂橋

佐助の温泉小屋 夜

「佐助さんこの袋には何がはいってるんすか」

佐助と一つの寝台で、愛を育んでいた黎が持ち上げているのは、佐助がいつも肌身はなさず身につけている古びた御守りである。前から気になっていたが、お互いに一糸まとわぬ姿になり佐助が袋を離れた今ならと思い聞いてみたのだ。

「開けても構わないが期待してる様な物じゃないぞ」

出てきたのは古びた硬貨が六枚、真田家の旗印でもある真田の六文銭であった。

「これはお金つすか？」

「俺達の国で使っていた一文銭って金さ。真田家では戦での旗印にしてある」

「お金が旗印なんすか」

「由来はあるんだが、色気が無い話になるぞ」

「佐助さんの事なら何でも知りたいっすよ。他の四人より先なら尚更っすよ」

「俺のいた国では、死んだら三途の川を渡るとされていてなその川

を船で渡るには六文がかかるそうなんだ。六文銭の旗印は既に死ぬ覚悟ありって意志表示だ、忍びは旗印を掲げる訳にもいかないからって、幸村様が仕えた時にくれたんだよ」

「佐助さんは、まだまだ六文銭使っちゃ駄目ですよ」  
甘える様に佐助に、抱きついてくる黎。

それから数日して、益州の出城への物質搬入が一段落した頃。

曹操軍の出兵も確認された、その数約五十万

圧倒的だな、でも大軍に大軍の落とし穴があるんだせ、曹操さんよ。

「予想通り曹操が攻めてきた。

兵数は約五十万人。うちは精々五万がいい所だ、みんなは民にこの事を伝えてついでにきたい民を保護しながら益州に進軍してくれ」

「佐助君はまた別行動をするの？怪我とかしちや嫌だよ」

「今回はちと無茶しなきゃいけないからな。怪我ぐらいは許してくれ。益州での行動は黎と桃香を中心に、北郷殿は民に慰撫をはかって下さい」

side 曹操

「華琳様、駄目です。この道も倒木や落石がひどく進軍は困難です」  
五十万の大軍が通れる道は自ずと限られる物。

劉備軍、いいえ多分佐助はそれを利用してきたのね。

進軍可能な道を倒木や落石で行軍を阻害して退去する時間を稼いでるって所ね。

side 才蔵

今東州兵達の陣に潜入しているんだが……  
何なんだよ、ここは。

そこら中に女の絵姿を貼りやがって、劉備に関羽に閻温か。

御遣いの坊主の絵姿に小刀が刺さってら

でこっちは、張飛ちゃん大好きだと……いい度胸してるじゃねーか。  
しかし確かにこの様子じゃ食いつきそうだな。

俺は周りにいる兵に話しかけていく

劉備軍が曹操軍に攻められて壊滅寸前らしい

今なら天の御遣いを簡単に倒せるし、乙女も手に入る

東州兵が益州を牛耳るのも夢じゃない

話を聞いた全員が興奮しまくり暑苦しくてしょうがない。

張飛ちゃん俺のものとかほざいた奴顔はすっかり覚えておいたからな。

side 佐助

何とか州境の長坂橋で合流ができた、民も殆ど橋を渡り出城に入つたとの事。

最後は張飛軍か、なら才蔵も居るな。

「よっ、才蔵。民は何とか渡りきれたみたいだな」

「ああ、後はの鈴々達が渡りできればお終いだ。曹操はここまで追ってくると思うか」

「全軍では、来ないだろうが一部はよこすだろうな、橋の上でなら数は相対する数は限られるから殿しんがりは俺が務める」

「まかせるが、懐の物は使っんじゃねーぞ。橋の上で焙烙玉何て使ったらお前も無事じゃ済まないんだからな」

佐助が温泉小屋を作った一番の理由は火薬の製造にあつた。

忍びである佐助にとって火薬の製造はお手の物であつたが他軍にはれる事や取り扱いの危険性を考えると、城中では作れなかつたからである。

焙烙玉は木の椀を二つくつつけており、中には火薬と金属片が詰めており殺傷能力は極めて高い。

しかしきちん試した事がない分、自分に危険が及ぶ可能性も低くない。

「前向きに善処しておくよ、さあ敵さんが来なすつた。とつと橋を渡れ」

追つて来たのは、夏候惇と許緒か、殺すと曹操が激興して益州まで滅ぼしかねないから、早めに気絶させとくか。

side 夏候惇

長坂橋にいたのは佐助一人けだつた。

佐助は無言でこちらを睨みつけている、普通こんな時は自分を奮い立たせる為にも大声で叫ぶものだが、佐助は近づいてくる兵士を黙つて倒していく。

「さがれっ、お前達がかなう相手ではない。私が倒してやる」

「久しぶりだな、佐助いつかの借りを返してやる」

「夏侯惇殿、今はお相手する時間がないので、また今度」

佐助がシェーツツと奇妙な声をあげたのと同時に私の意識が薄れていく、佐助に投げ飛ばされた後に最後に見たのは焦っている季衣の顔だった。

s i d e 才蔵

橋を渡り終えた俺の耳に響いたのは爆発音、あの馬鹿使いやがったか。



六文銭と長坂橋（後書き）

珍しく後を引つ張る形で終わりました

感想指摘をお待ちしております

## 黄忠と六文銭

side 桃香

物凄い音が聞こえてきたから慌てて橋に行ってみたら、そこに橋は跡形もなく才蔵さんが苦い顔をして橋だった所を見ていた。

「才蔵さん何があったの？佐助君はまだ来ないの？」  
私は不安を打ち消すように矢継ぎ早に質問をしていく。

「あの馬鹿、橋の上で焙烙玉を使いやがった」  
才蔵さんは下を見たまま唇を噛みしめている。

焙烙玉って何？  
佐助君はそれを使ってどうなったの？  
頭の中で不安だけが色濃くなっていく。

「才蔵さん教えて。焙烙玉って何、佐助君はどうなったの！！」

「桃香、焙烙玉ってのは爆発を起こす為の兵器なんだ。威力も凄く  
ては長坂橋ぐらいな曹操の兵ごと壊せるぐらいにね…」

ご主人様、何言ってるの？  
そんな事したら佐助君も無事でいられないよ。

早く佐助君を助けなきゃ

私が崖へ向かおうとすると黎ちゃんが、私の肩を掴んで止める

「桃香、東州兵が攻めて来るっすよ。兵に号令をだすっすよ、忍び  
は忍びの仕事をしたんす、だから軍師は軍師の城主は城主の仕事を  
しなきゃ駄目っす。今ここで止まったら佐助さんの仕事が無駄にな

るっす」

黎ちゃんも強いね、涙目になりながらもちゃんと軍師さんの仕事を忘れないんだもん。

だから私も負けてられない。

「全軍に告ぐ、我らの仲間である佐助はその命をとして曹操軍の追撃を止めた。

今度は我らが佐助の戻る場所を作る番だ！各武將に従い鶴翼の陣を展開して東州兵を迎えうて！！東州兵を黄忠の城に誘導し城を攻め落とすぞ」

劉備軍いや徐州に住む殆どの者が桃香の気持ちを知っていた。

愛する男が生死不明にある中での桃香の号令は全軍を奮い立たせた。

side 才蔵

こりゃまた凄まじい勢いだね。

右翼が関羽で左翼が華雄さらに中央に趙雲と呂布、呂布が動く度に東州兵が一塊で空を舞ってくんだけ。

一時間もしないうちに、東州兵が崩れ始め退却を開始した。

劉備軍は歩兵部隊から変わって公孫賛と張遼の騎馬隊が黄忠の城へと追い立てていく。

「うしっ、鈴々それじゃお父さんは東州兵に忍び込んでくるから、劉備や民の護衛を頼んだぞ」

「お父さん任せなのだ。お父さんも鈴々の所に絶対戻って来て欲し

いのだ」

「当たり前じゃないか、こんな可愛い娘が待ってるんだしな」

東州兵に紛れた俺は叫ぶ

「こうなったら黄忠にあいつ等をぶつけるぞ。お互い弱った所に一押しすりゃ好機が生まれる」

ワラも縋る思いって、やつだろう、東州兵の連中は陣形を崩して我先に黄忠の城へと向かっていった。

民思いの黄忠は、東州兵を嫌っているから、まず共闘をする事はないだろう。

益州に置いて有力な武將は三人いる。一人は黄忠、そして敵顔に魏延の二人だ。この三人を下せば益州攻略はかなり容易になるだろう。

東州兵は、劉備軍が追ってくるのを確認すると、黄忠の城から少し離れた所に陣を構えた。

一方の黄忠軍は、城外にでて野戦の準備をしている。

黄忠軍が陣から一人の女がでてきた。

あの落ち着いた物腰、恐らくあれが黄忠だな。

「私はここの城主の黄忠という者です。そちらの代表者と話し合いを申し願います」

俺や佐助の仕込みにより益州での御遣いの坊主や劉備の人気は凄ま

じく、黄忠も民の抑えが効かなくなってきたのだらう。  
被害を抑える為にも話し合いで落としどころを見つけようってんだ  
な。

side 桃香

「私がこの軍の代表者の一人劉備玄徳です。私達も無用な戦は避け  
たいので話し合いは喜んでお受けします」

「貴女が劉備様ですか。確かに佐助様が仰っていた通りの乙女です  
ね。所で佐助様は？」

「佐助君：いや佐助は我らを曹操軍から逃がす為に生死不明となっ  
ております。黄忠様は佐助をご存知なのですか？」

「佐助様は以前に動物の形をした飴を売っておりまして、その際私  
の娘も大変懐きました。その時には劉備様達のお話もお伺いしまし  
たのですが。そうですね、民も御遣い様や劉備  
様を切望しております。この城は明け渡すのでお入り下さい」

よかったー、これで佐助君が帰る場所ができたって安心していたら

「黄忠裏切りは駄目だぜ。可愛い娘を殺されなくなかったら自慢の  
弓で天の御遣いを射殺しな」

声をした方を見ると東州兵の一人が小さい女の子を抱き抱えている。

「る、溜々。卑怯な娘を離しなさい」

助けなきやこんな時に佐助君が居てくれたら。

「だから御遣いを殺したら離してやる……」

溜々ちゃんを捕まえていた男の人は、そのまま倒れ込んでいった。

その後ろから姿を見せたのは…

佐助君だ、体中ボロボロになりながらも来てくれたんだ。

「三途の川の渡し船が満員で地獄から追い出されてよ、ほら溜々ちゃんお母さんの所に行きな」

溜々ちゃんと黄忠さんが抱き合うのを見ると佐助君はそのまま倒れた。

黄忠と六文銭（後書き）

感想をくれたら喜びますのでお願いします

手紙と六文銭（前書き）

手紙覚えている人いますか



## 手紙と六文銭

side 黄忠

意識を取り戻さない佐助様を囲んでいる五人の乙女の顔には、生気がまったくみられませんでしたが、あの日の私も、こんな顔をしていたんでしょね。

亡くなった夫は特に格好いい訳でも強い訳でもありませんでした。でも私にとっては掛け替えのない大事な人、夫との思い出は私の胸に今でも色鮮やかに息づいています、夫を亡くした私に生きがいを与えてくれたのは瑠璃でした。

この娘達には、自分の大切な男性を失うあの絶望を味わって欲しくはありません。他の方々も意識のない佐助様を見ると悲痛な表情で戻って行かれました。

ただ一人を除いては

side 帳遼

目を覚まさない佐助を見て黎達は何も会話をしとらんかった、いやできないんやろな。

「おつ、霞ここにいたか。ちょっと今から手を貸せ」  
才蔵は何故か水桶と一升瓶を持っていた。

「才蔵か、こんな時に何するんや」

「馬鹿猿を叩き起こして説教してやるんだよ。お前はこれを持っていてこい」

才蔵から渡されたのは、一抱えもある箱やった。

才蔵はそう言うのと佐助の寝てる部屋にズカズカと入っていきよる。

「まったく全員辛気くさい顔しやがって。葬式じゃねえんだぞ」

（さ、才蔵空気読み。ほら月様泣きそうになつとるやないか）

「おいチビ猿、何時までも寝てんだよ。」

とつと起きやがれ」

そういうと才蔵は気絶してる佐助に水桶をぶちまけおつた…

「な、何してんのや才蔵」

「あつこのままじゃ馬鹿猿が一生目を覚ませなくなるからな叩き起こしてやったんだよ」

いやいやいや、それはあかんて。お前には怪我人をいたわるって気持ちはないんかい。

「才蔵、手間をかけさせたな。まだ体が上手く動かないから治療も頼む」

つて佐助もあれで目を覚ますんかいな。しかもお礼言つとるし

「霞、箱をよこせ」

才蔵はそう言つと、佐助の傷口に酒をかけて、箱から出した塩を刷り込んでいきおつた。  
うわっ、めっちゃ染みそうやな！。

「その五人こつちにきて良く見る。

次からの治療はお前達にまかせるんだからな」  
才蔵はそう言つと、佐助に薬を塗り込みサラシを巻いていきよる。

「ほれ馬鹿猿、前に幸村様から預かつた手紙だ、それを見てよく反省しな。五人組にはこの手紙だ」  
才蔵は懐から取り出した手紙を渡して部屋を出て行きおつた。

「あー、佐助何かすまんの」

「帳遼殿違いますよ。忍びなら大概の怪我は自分で処理しなきゃいけないんですし。ましてあのままじゃ俺は危うく六文銭を使う事になりかねなかつたんですよ」

「そうか、まっ手紙の前に黎達とゆっーくり話すんやな。そいじやな」

side 佐助

帳遼殿の言葉で辺りを見回すと肩を震わせている五人がいた。

(流石に心配かけ過ぎて嫌われたかもな)

そう思っていたら

「佐助さんの馬鹿、私がどれだけ心配したかわかってるんすか？でも良かったすよー」

気丈な態度から泣き崩れていく黎

「ざずげくん、ざずげくんだよねー。もうあんな危ない事しちゃ嫌だよー」

最初から泣きまくりの桃香

「佐助様にもしもの事があつたら、節は節は耐える自信なかつたんですよー」

泣きながら恨めしげに見つめてくる節

「佐助さん覚悟してくださいね。きちんと治るまで侍女の私が付きつきりで怪我の治療をしますからね」

涙を隠すように大袈裟に腕まくりしてみせる月

「佐助、恋をおいて居なくなつたらやだ」

幼子の様にひくつかせながら泣いている恋

五人の不安の涙は、やがて安堵の嬉し涙に変わっていった。

## 二通の手紙

side 佐助

案の定と言つか泣き止んだ五人からお説教をもらう事になった。

幸村様の手紙だけでも、俺は手紙をもてず、五人は日本語を読めない為才蔵に代読してもらおう事にした。

「チビ猿お前宛てへの手紙からな」

『佐助へ 活きよ 幸村』

「おい才蔵、それだけか。もっと真田の名前を誇りにとかないのか？」

「見て見るよ。これだけだ。幸村様の事だ、どっかの馬鹿猿が無茶するの予想されていただろうしお前も幸村様が何を仰りたいかわかるだろ？」

才蔵が見せた手紙には幸村様の筆で大きく活きよと、書いてあった。ただ生きるのではなく活きるか、幸村様佐助はいつの日か忍びを止めて人間として活きれますかね。

「佐助さん敬愛する幸村様からの命令に逆らうのは駄目ですよ。きちんと私と一緒にこれからの人生を生きていくつすよ」

「才蔵さん、私達宛ての手紙を早く読んで。劉備殿へ佐助を頼みますとか書いてないかな」

「わかったよ、うん？ほぐこりゃいいや」  
手紙を見て笑みを浮かべる才蔵。

『佐助を想う女性へ 私の部下を必要としてくれた事に感謝いたします。佐助は忍びとしては優秀ですが男としては不器用な性格で皆さんに迷惑を掛けているかもしれせん。もし佐助が無茶をしでかすようであれば佐助に預けてある六文銭を皆さんで分かち合い、佐助にこう申し伝えて下さい。』幸村の命により六文銭が揃った時にのみ死ぬを許すと「私の命なら佐助が無茶をするのも抑えられるでしょう。どうか佐助をよろしく頼みます 真田幸村』

「ちょうど五人いるから佐助とそれぞれ一枚ずつもてばいいな」才蔵はそう言うとお守り袋から六文銭を取り出して、それぞれに手渡していった。

「幸村様は本当に素晴らしいお方なんですな。商人にとって銭は命、私はこの銭を佐助様との子孫へ幸村様の言葉と一緒に残し伝えていきます」

銭を握りしめ胸に抱える様にして話す節。

「佐助様さん、月がこれを佐助さんに返すのはおじいちゃんおばちゃんになってからですからね」手の平に銭を大事そう載せて話す月。

「恋はこの銭は誰にも渡さない」

恋は後日、方天画戟に銭を埋め込んだ。

「佐助君、これはこれから作る国の国宝になるんだからね。だって私と佐助君の子供達が国を治めていくんだから」

事実この外史での蜀には、建国の銭という国宝が後々まで伝えられたという。

「幸村様もこの世界にこれないっすかね。ぜひ私と佐助さんの結婚式に招待したいんですけども」  
黎は銭を首飾りに加工し肌身離さなかったという

手紙と六文銭（後書き）

実際書くと予定と違う展開なるんですね

感想指摘お願いします



蜀建国への道（前書き）

初めて書いた小説？も後少しに

## 蜀建國への道

劉備軍 軍議

敵顔達から書状が来たといふので、まだ痛む身体を引きずって軍義に参加した。

左右は月と節でしつかり固められ正面に桃香と黎、後ろでは恋が監視をしている。

「挑戦状ですか？」

「ええあの二人は武に強い誇りを持っていますから私が祿に戦いもせず男性が率いてる軍に降ったのが気に入らないのでしょうか」

「そうですね。挑戦状という事は敵顔達は果たし合いを望んできたのですか？」

黄忠さんは一瞬言いよどみこう言った。

「御遣い軍の男性武将と勝負して敵顔達が負ければ素直に降ると、あの二人が降れば他の城もこちらにつくと思えます」

「それなら俺と才蔵ができますよ」

「駄目だよ。佐助君怪我してるんだよ。許可できないよ」

「俺が一人で二人を相手しても構わないんだぜ？御遣いの坊主がでるよりましだろ」

「北郷殿に何かあれば我が軍は瓦解します。たぶん向こうは単騎戦

を望んでると思います。何あと数日もすれば動くのは平気になりますから」

「嘘っすね」

「佐助君は嘘をついてる。幸村様との約束破るんだ」

「佐助様は他の方々はともかく私達五人は騙せませんよ」

「佐助無理だめ」

「佐助さんの怪我の具合は侍女の私が一番わかるんですよ。今は動くのもお辛い筈です」

五人全員が白い目で見てきた

「敵顔と魏延は強いんですか？」

「敵顔は豪天砲と言う長距離兵器を愛用しています、魏延は鈍砕骨という金棒で戦います。二人とも並みの将では相手になりません」

「なら決まりだ。敵顔は俺がやる佐助じゃただの的だしな。金棒なら今のお前でもやれるだろ？」

「ああ、才蔵頼む」

やはり持つ者は親友だな

「まっ、お前ら五人も不満あるだろうがここで無理しなきゃ今までの苦労が水の泡になっちゃう。事が落ち着いたら佐助は煮るなり焼くなり好きにしていぜ」

(仕方ないか、ここん所心配しかさせてないしな)

side 魏延

果たし状の返礼の結果、私の相手は憎き恋敵佐助に決まった。

私は壁にある絵姿に目をうつす、そこには美しく微笑む劉備様と小さく醜い男が描かれていた。

初めて劉備様を絵姿で拝見した時にあまりの美しさに衝撃がはしつたのを覚えている。

一目惚れだった、しかし劉備様は佐助というチビを好いているらしい。

私はこの一戦で佐助を打ち負かし劉備様の心を手に入れて見せる。

side 桃香

ボタリ、ボタリ私達が見つめている佐助君から大量の汗が滴り落ちてきてそんな音が聞こえてくる気がした。

佐助軍の手に握られているのは幸村様から貰った正宗って名前の刀。佐助君はそれを先から何十回も何百回も振るっている。

ご主人様が言うには居合い抜きって刀法だって話していた。

「とてつもなく素早い抜き打ちですな。知らずに近づくと私でも危ういかもしれません」

愛紗ちゃんが佐助君を誉めている、何時もならうれしんだけど今の私は違う事で頭がいっぱいだ

「佐助君、まだ練習やめないのかな。もう私がどれだけ心配してるか知らないんだよ」

佐助君が無理をしているのは何時でも他人の為、自分自身の事なんて歯牙にもかけていない。

「忍びの恋人は心が休まらないっすね」

黎ちゃんが苦笑いをしながら話しかけてきた。

月ちゃん、節ちゃん、恋ちゃんも同じ思いの様で目を見合わせて笑いあった。

（佐助君、こんな可愛い彼女に心配かけてるんだから負けたら承知しないからね）

- - - - -

果たし合い当日

side 黄忠

御遣い軍に忠義を誓ったとはいえ、昔からの友である桔梗には顔をあわせづらく、桔梗の城が近づくにつれて私の足取りは重くなっていきました。

そんな私を見つけた桔梗が近づいてくる、どんな悪態も甘んじて受けるつもりでしたが、桔梗からでた言葉は予想外のものでした。

「紫苑、瑠璃ちゃんは無事か？東州兵に拐かされたと聞いて心配しておっただぞ」

佐助様は素知らぬ顔でそっぽを向いてますが、わざと瑠璃が東州兵に捕まった噂だけを流したんでしょうね。

「ええ、佐助様に助けて頂き元気よ」

「そうかそれなら良かった。これで安心して喧嘩できるわい」

「我が軍からは佐助様と才蔵様がです。佐助様が焰耶と才蔵様と桔梗が闘ってもらいます」

「わかった、儂等が負ければ大人しく軍門に下ってやるわ。先ずは焰耶と佐助でやってもらおうかの」

焰耶を見ると何時も以上に、いきり立っていた。そういえばあの娘劉備ちゃんの絵姿に一目惚れしたんだったわね。でも劉備ちゃんは、佐助様にベタぼれだから恋では焰耶に勝ち目は薄いのよね。

「ふん、こんな小さい男なんて私の鈍砕骨で潰してくれるわ」  
しきりに勢いのいい言葉で挑発する焰耶と对象的に佐助様は無言のまま刀の柄を握ったまま、抜刀もしていない。

「紫苑よ、あの小さい男は強いのか？まさか恐怖から動けないのではないのか？」

「桔梗目をはなさい方がいいわよ、直ぐに決着がつくから」

痺れを切らした焰耶が佐助様に飛びかかっていた。  
迎え撃つ佐助様は焰耶が近づいた瞬間目にも止まらぬ早さで刀を抜いて鞘に戻した時は焰耶は地に倒れていた。

「あの男は見かけによらず強いみたいだの」

「桔梗いい事を教えてあげる。佐助様は怪我で動くのも辛いよ。本来は素早い動きで攪乱させるのが得意なんですけど、今回は最小限の動きで倒したいから、あの刀術にしたそうよ」

「興奮して相手の力量もはかれなかった焰耶とは大違いだな。全くあの馬鹿弟子は不用意に近づいてく峰打ちで倒されて情けない」

そう言い残すと、豪天砲を携えて桔梗は歩きだした。

「あれがお父さんの相手なのか。何かかわいそうなのだ」  
変わって話しかけてきたのは才蔵様の義娘の張飛ちゃんだった。義理というのが信じれないぐらいこの親娘は仲がよい。

「張飛ちゃん、お父さんの事を心配してるの？」

「鈴々のお父さん相手に飛び道具は効かないのだ」

張飛ちゃんが言った言葉は本場で、才蔵様は豪天砲から放たれた矢を易々と交わしていき、才蔵様は歩いて近づいていくだけで桔梗を追い詰めていました。

桔梗はあの時はまるで霧か何かを相手にしてるようじゃったとボヤいておりました。

私は気が着くと地面に倒れていた。

この私があんな小さいな男に負けたのか、信じれない思っている  
紫苑殿が佐助は、本当は怪我をしていて満足に動けないと話すのを  
聞いた。

佐助は疲れたのか座り込んでいた。

これは好機と鈍碎骨を構えて近づいて行き、後一步という所で私は  
猛烈な殺気を感じて振り返ると

「恋、お前を絶対に許さない。佐助は痛くて動けないのに無理して  
戦った。これ以上恋の大事な佐助を傷つけるなら恋がお前を倒す」

「焰耶逃げなさい。その娘は呂布ちゃんよ」

紫苑殿の言葉を最後に私は今日二度目の気絶をした。



蜀建国への道（後書き）

感想 指摘お待ちしております

敵顔、佐助の策を知る（前書き）

明日も休みだから、できたら更新します

## 敵顔、佐助の策を知る

side 佐助

あの果たし合いで、また体を痛めた俺は部屋に軟禁状態にされていた。

「桃香、飯ぐらい一人で食えるって」

「佐助君、まだ腕治ってないんだから駄目だよ。それに私が愛情たっぷり込めて作ったお料理なんだからね。はい、あーん」

軟禁生活の監視役は、いつもの五人で普段は月が見張り役で、後は交代制になってるらしい、それで今日の昼飯は桃香の当番との事。

（才蔵だけには絶対に見られる訳にはいかない、見られたら最後死ぬまでおちよくられる）

「はい、佐助君あーんして」

「あーん」

しかし無情にも

「おい、佐助お前に客だぜ……ぷっ」

扉の向こうには笑いを堪える才蔵と敵顔殿がいた。

あの一件から、馬鹿弟子焰耶がへこみまくっている。

最近まで接近戦において天狗になっていた奴が男に負かされた上に呂布に圧倒的な力を見せつけられたんじゃないが、師として佐助に謝りたいのじゃが、生憎佐助の部屋がわからん。

紫苑は忙しいらしく中々会えんし、この軍に他に知り合いといえは

「丁度よい才蔵ではないか。儂を佐助の部屋に案内してくれ」

「チビ猿に何かようか？」

「儂の馬鹿弟子が不意打ちなんて武人にあるまじき事をしたから謝りたくての」

「不意打ち？あー気にする必要はねえよ。武人とやらはともかく忍びは隙を見せた方が悪い」

「ふむ、しかし儂の馬鹿弟子が落ち込んでおつての謝意を示す必要もあるのでは」

「わかったよ。魏延もいないし、都合がいい」

普通は魏延に直接謝らせると思うんじゃないが。

才蔵が部屋の扉を開けて納得した、劉備と佐助がいちゃついている姿を見たら焰耶がまた暴れかねないしの。

「劉備様、佐助失礼する。こないだは僕の馬鹿弟子が迷惑をかけたの」

「迷惑ですか？」

佐助は何故か釈然としていない。

「馬鹿弟子が不意打ちをかけたたる。焰耶も落ち込んでいるので勘弁してやってほしい」  
僕は素直に頭を下げる。

「あー、あれは誘いでしたのでお気になさないで下さい。予め恋、呂布にも言い含めておいたので気絶で済んでますでしょう」  
謝られた佐助の方が気まずそうであった。

「確かに呂布の本気の一撃で気絶で済む訳がないしの、しかし佐助殿の刀術は早かったの」

「本当の居合いなら、もっと早いですよ。魏延殿の性格からして、大上段からの一撃は予想できましたし、金棒を振り上げると首に隙ができますから、底に刀の峰をあてれば良いだけですから」

「最初から焰耶を殺すつもりはなかったと」

「敵顔殿も魏延殿も兵や民に慕われてますからね。気絶させた方が都合がいいんですよ」

「僕らは最初から手の平で踊らされていた訳か」  
これでは、劉璋のガキでは、相手ならないの。

「でも佐助君、何でわざと不意打ちを誘ったの？」

劉備様儂もそれは聞きたい所じゃ。

「桃香、よく考えてみる。これだけ俺の側にいたら気がつく筈だぜ」

「佐助君、意地悪言わないでよ。うーんと、私達の軍の強さを見せる為かな？」

「正解だ、俺の一撃じゃ本人も兵も納得しないだろうからな。そこにあの呂布の一撃を見せる事で劉備軍の将の実力を見せておいたんだよ。劉備と劉璋のどっちにつくのが得かを見せる為にな」

なるほど、あの時は他の城主も見に来ていた。

儂ら二人は益州でも並ぶ者が少ない武人、その二人をあっさり打ち負かした劉備軍相手に民の気持ちを見無視して対立したら、下手したら謀反が起きて自分の立場が危うくなるしの。

殆どの城主は、我先に劉備軍に馳せ参じ自分の安全を図るべきと思うであろう。

「武や正義や卑怯にこだわらないのが忍びゆえ勘弁してください。後魏延殿は今頃、北郷殿が慰めに行っているので大丈夫でしょう」

「俺や佐助が行くと反対意見がでるからな」

「当たり前だよ。佐助君の側にいいのは私達五人だけなんだからね」

五人、劉備様の他に四人も女子がおるのか？

正義感もない、背も小さく見た目も、女子に好かれる感じには思えないがの。

「劉備様は佐助のどこに惚れたのですか？失礼じゃが見た目ではな

いのであるっ?」

焰耶を納得させるのに、聞いておかないとの。

「うーん難しいよ。可愛いし優しいし強いし、でも一番の理由は、誰かの為に自分は得しないのに、陰で苦労して傷ついても前に進んでく所かな。あつても私の笑顔を守らせて言葉にやられちゃったかもね」

劉備様のこの笑顔を見たら焰耶が入る隙はなさそうじゃの。

「で、アーンしてもらっていた佐助君よ、劉璋はどうするんだ?」

「才蔵頼むから普通に呼んでくれ。城は直接は攻めないさ。わざわざ評判を落とす必要はないからか。東州兵を、劉璋の城に追い立てて、その後に城を囲うように塀を作りその周りで大規模な市場を作っていく」

「兵糧責めと城下町作りを平行していくのか。それじゃ城が逃げ出した奴は戻りたくないだろうっしな」

「向こうから攻めてきたら御の字だしな。劉璋の性格からしたら長期戦にならないだろう。敵顔殿にも協力してもらいますよ。市場に作った酒場で賑やかに飲んで欲しいんです。城に響く位の大騒ぎを期待してますよ」

兵糧責めを、されながら敵は楽しく飲み騒ぐ、夜になると城の住民は逃げ出すだろう。

何ともしたたかな攻め方よ、早めに劉備軍についてくれた紫苑に感謝せねばならんの。

敵顔、佐助の策を知る（後書き）

最近 幕間書いてないなー。幕間見てみたいキャラとかいますかね？  
頑張るのでリクエストしてください  
感想指摘お待ちしております



蜀建国の為に（前書き）

## 蜀建国の為に

side 佐助

東州兵も城に入った事により、食糧の備蓄も直ぐに底をついた事で劉璋が思ったより早く城を明け渡してきた。

今回の策を建てたのが俺と知ると鬼畜でも見る様な目で去っていった、とりあえず桃香や北郷殿が汚名は大分薄くなっただろう。しかし一難去つてまた一難、いや百難以上の報告が届いた。

成都城 会議の間

口火をきいたのは黎

「西涼が魏に攻め落とされたつす。馬騰様は戦死、馬超始め西涼の者が殆ど生死不明つす」

(まずいな、魏がどんどん力をつけている。

国力の差、兵力の差どれをとっても今までみたいな小手先の策や流言で、どうこうできる相手じゃない)

「曹操も内政やら統治でしばらくは動けないと思うんすが」

(あくまで、しばらくだ。曹操は天下統一するまで、覇道を止める気はないだろう)

「その間に国力の増強、南蛮や五胡への対応をしなければいけません」

孔明殿が今後の指針を伝えている。

（国力なんて物は、そう簡単につくもんじゃない。本当なら兵農分離をしたいんだが、まだ早すぎる）

「佐助君は、何が意見ないの？」

「孔明殿言うのが一番だと思います。各将を振り分けて対応していくしかないですね。後長坂に橋をかけさせない為にも塀を築くべきかと。後は呉と同盟も考えていくのも必要でしょう」

（どれだけ努力をしても、策を弄しても魏には勝てない。何とか引き分けに持って行き、停戦条約を組むのが最善か）

「とりあえず巡回を増やして治安の安定をはかるべきですね。巡回には北郷殿、桃香、黄忠殿、嚴顔殿を中心に各将が随伴する形が望ましいでしょう」

「北郷殿には地理に詳しい私が着いていくからな」

流石は北郷殿、魏延殿の気持ちをしっかりつかんだみたいだな。

「私は城主権限で佐助君に決定だよ」

「くっ、桃香卑怯っすよ。私はは内政があるから出れないんすよ」

「俺まだ参加するって言ってないぞ。節益州では誰の絵姿が人気だったんだ」

「そうですね。関羽様、袁紹様、趙雲様、恋様、張遼様、華雄様で

すかね。張飛様は才蔵様と城下町の警備が適してるかと」

（才蔵は張飛殿の絵姿を持っていた東州兵をボコボコにしたんだよな、娘の事になると歯止めが効きにくいんだろう）

「北郷殿に魏延、桃香には巖顔殿が黄忠様は各将が交代制で随伴して傘下に入った城主との繋がりを深めて下さい。後黄忠殿はできるだけ近場を訪れて下さい。日帰りなら瑠璃殿も寂しがらないでしょうし」

「佐助君は私と一緒に嫌なの？」

「俺は余りを顔を知られたくないんだよ。それに見た目が悪いから初見の印象は良くないんだよ」

「それなら桃香様に私も随伴して各地の商人との話し合いをしますので佐助様は商隊の一員になれば問題ないでしょう」

「流石は節ちゃん。なら明日から巡回を交代で開始、残っている人は内政に勤しむ、これで決定だよ」

.....

side 巖顔

儂達の巡回の番が回ってきたので、各城を訪れている最中じゃ。

「巖顔殿のお陰で各城主に警戒されずに済みましたよ」

「しかし劉備軍の人気は凄いの。どの街でも民が熱狂的な出迎えをしておる。劉璋の時には考えらん事じゃの」

「黎達は東州兵が略奪した物の返還をしましたし、劉璋がためた宝物や華美な道具は節が知り合いの商人に売って炊き出しや農具の貸し付けに流用しましたからね」

「それを裏で指示してるのはお主であろう。全てお館様や劉備様の功績にして佐助は欲がないのか？」

「敵顔様、佐助様には私達五人がいますから平気なんですよ。」

「王烈か、ふむ確かに普通では得難い乙女五人に慕われておれば満足じゃろて。ほれ劉備様も佐助を気にしてこちらも何度も見ておるわ」

「いや、そういう訳でもないのですが…、敵顔殿この辺りの城主で騎馬隊を持っている方はおりますか？」

「いやこの辺りにはそんな大きな城はないぞ」

「敵顔殿、桃香に書いて隊の指示をお願いします。節、商隊に退却の態勢をとらしておけ。遠方に騎馬隊が見えた、俺は桃香に言伝をした後に確認をしに先行をする」

そついうと佐助の姿は瞬く間に消えておつた。

あれでは劉備様達も中々心が休まらないの。

side 佐助

近づいてみると騎馬隊は人も馬もボロボロだった、警戒の為か旗もあげていない。

もう少しで桃香達も追いついてくる、十分な距離を保ち騎馬隊に声を掛ける。

「とまれい、ここは劉備様が治める地。どこの者が名前を名乗られよ」

警戒をしている俺に返ってきたのは意外な言葉だった。

「その声は佐助か？良かったー。これで飯にありつける」  
そこにいたのは西涼の馬超殿であった。

「馬超殿、ご無事でしたか。黎も随分心配してましたよ」

「ああ、曹操に追われてこのザマさ。悪いけどみんなに飯を食わせてくれないか。ここ何日か禄に飯も食べてないんだよ」

「わかりました。今準備をさせますので、落ち着いたら成都の城に案内しますから、そこでゆっくり休んで下さい」

「お姉様、あのちっこい男の人と知り合い？」

「蒲公英、前に話した佐助だよ。劉備とも親しいみたいだから口に気をつけるよ」

「うそー、黎さんもっと面白いと思ったのに」

あれが馬超殿の従姉妹の馬岱殿か、他にも西涼の騎馬隊がいる。うまく勧誘したら貴重な戦力になるな。

「桃香、俺は先行して黎達に馬超殿の事を伝えてくる。貴重な戦力になるだろうから、よろしく頼むぞ」

-----

side 馬超

成都の城についた私達は手厚い歓迎をうけた。驚いた事に洛陽の殆どの将が劉備軍にいた。

「翠と蒲公英久しぶりっすね。自分の家と思ってゆっくりするっすよ」

「悪いな黎。」

何か黎の奴落ち着いてるといつか、一皮向けたような感じがする。

「黎さん、本当にあのちっこい男の人を好きなの？」

「佐助さんの事っすか？当たり前前っすよ。何といっても私が最初に佐助さんの魅力に気づいた乙女なんすよ」

魅力ねえ、私には分からないんだけど劉備も佐助を好きみたいだから、何か魅力あるんだろうな。

「最初って、黎と劉備の二人だけなんだろ」

「違つんすよ、節も恋も月様もなんすよ。佐助さんを独占できていた時代が懐かしいつすよ」

黎の奴遠い目になってやんの

「節って一緒に帰っててきた王烈の事か？恋は呂布の真名だよな、月様って董卓様も佐助を好きなのか？」

「そつつすよ。いつの間にやら五人も乙女が増えて、これ以上は断固阻止するんすからね」

私は蒲公英と一緒に劉備に仕える事にしたんだが、この軍には興味本位で佐助に近付くと不幸が訪れるって言う都市伝説があるらしい。



**蜀建国の為に（後書き）**

南蛮戦は誰連れて行く？

感想指摘お待ちしております

南蛮潜入（前書き）

幕間並みの短さです

## 南蛮潜入

side 黎

益州の全ての城が傘下に入り、劉備軍は新たに国を興す事にしたつす。

国の名前は変えずに蜀、劉璋から桃香に引き継いだ形を取りたかつんすよ。

当面は内政を充実させなければ、いけないんすから軍師は忙しくなるんすよ。

それなのに佐助さんは何で、こんな時期に南蛮を探索に行くんすか？  
こうなつた、ついて行く方法を模索するつすよ

side 佐助

今のうちに南蛮の探索に行きたいんだが、今まで心配をかけまくつたせいで単独行動は軍全体で却下された。

せめて才蔵と北郷殿は味方をしてくれるとふんだんだが、才蔵は張飛殿と張遼殿に説得され北郷殿は女性陣に直ぐに寝返つた。

男の友情はどこへいつたんだよ。

一緒に来てもらつたら、何時もの五人か才蔵になる。

消去法でいくと桃香と黎は内政関係で抜ける訳にはいかない！

月は体力的にきついか。

才蔵は曹操軍や五胡への警戒に必要。

そうなるか節か恋になるな。

ある程度の武もあり、商人ならではの交渉能力を考えると節が適任

か。

恋の武は居るだけで敵国への牽制になるしな。

「節良かったら南蛮に同行してくれないか？」

side 節

今私は子供の頃のお祭りの日みたいにワクワクしています。

佐助様が二人旅に誘ってくれたんですもの。

私は佐助様の問いに直ぐに頷きました。

桃香様達も佐助様の説明で納得されたみたいで

「節ちゃん佐助君が無理したり他の娘と仲良くならないように監視をお願いね。うー私も着いて行きたいのにー」

最終的には私に佐助様を託してくれました。

旅の間は佐助様は私の従者の形をとる予定でしたが、才蔵様から

「どこの世界に従者を潤んだ目で見ている商人がいるんだよ。夫婦の商人にしとけ」

大変素晴らしい提案を頂き即採用とさせてもらいました。

南蛮に近づくにつれて風土も様変わりしていき、商品として仕入れたい物が数々目に付きました。特に木材と宝石は、確保したいですね。

side 佐助

南蛮に近づくとつれて森は鬱蒼と茂ってきて、かなり暑くなってきた。

月は連れて来なくて正解だったな。

節は立ち寄る村で目を輝かせながら特産品を見ていた、流石は商人王烈ってとこだ。

長い髪をあげており、うなじが見えており、何とか日本人には堪らない魅力を感じさせてくれる。

俺は俺で南蛮の情報を集める事にした。

南蛮王の名前は孟獲、話を聞くと微笑ましい王だとの事。微笑ましい王って、どんなんだよ。

南蛮は自然が豊かな事もあり、狩猟が主な基盤になっている。

宝石がよく産出されるらしい。

領土拡大の意欲は低いも、畑を荒らしたりする事はあると。

百聞は一見にしかず、南蛮に忍び込んでみるか。

-----

南蛮に来たが、俺の目に映るのは猫の格好をした幼い子達がニャーニャー言いながら、微笑ましく遊んでいる光景だった。

一人だけ違つを格好をした娘が

「ミイは王様にゃ」

とか話していたから、あれが孟獲なんだろう。

奇妙な事に南蛮には、大人を、殆ど見かけなかった。

唯一いたのは白髪の老人、孟獲の祖父だと言う老人。

「あれは可哀想な娘ですよ。部族間の大きな戦で親を亡くして若くして王になりましたのですよ」

まだ若い事もあり、実質はこの老人が国を運営しているとの事。老人も孟獲にも蜀と争う意志はないとの事。

できたら孟獲に経験積ませて南蛮の立派な王にしたいとの事。

老人に俺達の事を打ち明け宝石と医薬品や食料の交換価値や、孟獲と北郷殿を接触させて蜀で将として経験させる約束をした。

五胡には孫が、蜀に留学しているので戦争には荷担できないと話すとの事。

後は北郷殿に任せる事にして帰る道中に節が

「私達にもあの様な可愛い娘が欲しいですね」

と笑顔で話しかけてきた。

俺の子供か、忍びの時には考えもしなかった事だな。

南蛮潜入（後書き）

次は呉との同盟編になります

## 蜀兵同盟へ（前書き）

前回に続き、つなぎ目的な話なので短めです



## 蜀呉同盟へ

南蛮は北郷殿達に任せるとして、孫策さん達との同盟だよな。

蜀と呉が同盟を組み、魏に対抗する蜀呉同盟の成立は不可欠、何と  
してもまとめなければならぬ。

南蛮に北郷殿、孔明殿、趙雲殿に向かつてもらう。

俺と才蔵、黎、張飛殿は呉に同盟の締結の為に行く。

流石に一介の忍びだけじゃ、孫策さん以外の将は納得しないだろう  
し。

桃香を連れて行くか迷ったんだが二人同時にはおぶれないし何かあ  
ったら、それこそ蜀が滅んじまう。

「こうして佐助さんに背負われて旅するのも久しぶりっすね」

「最初ん時は随分騒がしかったな」

「まだ覚えてたんすか。桃香達も最初はびっくりしたみたいっすよ」

「最初は月を匿ってもらっただけだったんだがな」

「気づいたら、とんでもなく大きな事になってるっすよね」

「義勇軍から国を興しちまったんだからな」

「不思議っすよね。あの日私が視察に一人で出掛けなかったら佐助

さんとも出会えず、下手したら桃香達に滅ぼされていたかもしれな  
いんすからね」

「俺だって同じさ、幸村様に見捨てられたと思い、生きる目的をな  
くした俺がこうしているのも、黎に出会えたからだよ」

「運命すよね。どれだけ感謝してもしきれない素敵な運命の出会い  
っすよ」

「ああ、だからこそ絶対に悲劇じゃ終わらせない」

side 張飛

「お父さん、二人の世界を作っていて話かけづらいのだ」

「閻温の奴も久しぶりに佐助を独占できて嬉しいんだろっよ。多分  
あれが御遣いの坊主が言うバカップルだな」

（黎お姉ちゃんうらやましいのだ。鈴々はお父さんにとっては、娘  
でしかないのだ。でも平和になったら桃香お姉ちゃんやみんなに教  
えてもらってお父さんと本当の家族になるのだ）

佐助と才蔵が背負うのは自分の大切な人と、幾万の民の思い。  
それを守り抜く為にも一路、呉を目指していく。

蜀呉同盟へ（後書き）

孫策さん、死なれちゃこまるんだよな。

蓮華なんて絶対、佐助や才蔵信じてくれそうもないし

五胡の影（前書き）

ゆうよやくかけた。  
でも駄文

## 五胡の影

### 呉孫策の城

「久しぶりね、佐助今日来たのは、欲張り曹操の事でしょ」

「ええ、その為に国主劉備の名代として軍師閻温を連れて参りました」

「孫策様、私が劉備の名代の閻温でございます」

「後日、劉備とも孫策様の会合の機会を設けたいと思います」

「わかったわ、詳しい話は冥琳と軍師同士で煮詰めてちょうだい」

「協力感謝いたします。曹操軍が呉への進行を企てているとの情報を掴みましたので、我が軍も早速進軍開始いたします」

「その情報は確かなの？」

「ええ、俺が曹操軍の軍議に忍び込んで聞いたので間違いありません。」

「わかったわ。よろしくね佐助」

こうして蜀呉同盟は成立した。

、無事に桃香が率いる本隊が合流する事ができ、迎えた決戦の日ま

「佐助さん、冥琳さんが孫策さんを探して来て欲しいそうっす。多分近くの森にいるみたいっす」

黎と周瑜さんは真名を交換していた。

何でもお互いの才と、大事な者の放浪癖に悩ませれている所で仲良くなっただらしい。

他の将も、真名を交換しあっていたが、俺は桃香達に他の将との単独接触を禁じれていた。

「わかったよ。しかし孫策様も相変わらずだな」

side 孫策

決戦の前に私は母様の墓前に手を合わせにきていた。

大将は蓮華に任せてあるし、私は一人の将として暴れるだけだし、ここで英気を養わないとね。

「孫策様相変わらずですね。周瑜様が心配されていましたよ」

「もう冥琳たら、子供じゃないから一人で帰れるのに」

「子供はお酒のみませんよ」

そう言いながらも佐助の雰囲気の変化していくのがわかった。

side 佐助

何とか孫策様を見つけたが

(あれで気配を消したつもりかね。ありやど素人だな)

森からは、気配を消そうとするあまりに、逆に不自然な殺気が漂ってきていた。

幸いに懐の棒手裏剣は気配の人数分はある。

自分の霸道に自信をもつ曹操が決戦前に暗殺を仕掛ける事は有り得ない。

つまり曹操の知らない所で動いたんだろう。

(気配を消した攻撃つてのは、こうやるんだよ)

俺が投げた棒手裏剣で倒れた連中を縛り上げ、持ち物を確認する。武器は弓か、この臭いは毒殺するつもりだったんだな。

しかしこの毒は…

ちなみに願良さんに確認した所、かつて袁紹に仕えていた将との事だった、性格は小者らしいが。

その小心者が、この毒を手に入れたんだ？

side 華琳

信じれないが信じない訳には行かない。

孫策の陣に縛られていたのは我が軍の将、何でも決戦前に孫策を毒殺しようとしたらしいわね。

戦にケチをつけて私は退却を決意した。

多分孫策は追撃をしてくるでしょうね。

緊張感が高まる両陣営の間に悠然とある男がたった。

「佐助、何のようかしら。暗殺の講師でもしてくれるのかしら」

「佐助どきなさい。暗殺なんてふざけた真似するやつを許してあげるもんですか」

side 佐助

「孫策様、戦前だから仕方ないですけど、少し冷静に考えてみたらどうですか？」

「どう言う事よ佐助」

「曹操様は暗殺を嫌う性格。暗殺を企ての小心者の将。そしてその将が持っていたのは、この辺りじゃとれない毒。しかも孫策様が墓参りする事も知っていた。孫策様が毒殺されれば呉の将は怒り狂い追撃をかける。そうしたらどうなります？」

「呉と蜀が組んで魏と争うわね」

「そうしたら三国共に無傷じゃすみませんよね。謎の毒を持ち、三国がなくなれば得する者がいますね」

「五胡ね」

流石は曹操様、正解。

「本来なら英雄達が死んだ後に攻め込む予定だったんでしょう。女尊男卑の世界じゃわざわざ男に近づく領主いないですからね。しかし誤算が生まれた」



「わかったー。佐助君やご主人様の事だ。私と佐助君の間に子供ができるかもしれないと思って焦りはじめたんだね」

「そう考えると俺が掴んでる情報と合致するし納得できるしな。曹操さんとりあえず五胡との戦は避けられないでしょうから、組みませんか胡の五国に対する三国同盟を」

五胡の影（後書き）

五胡編によつやく来ました

五胡に潜む影（前書き）

久しぶりの佐助更新

## 五胡に潜む影

結局、曹操は孫策様の暗殺を企てた部下を捕縛し退却をした。奇跡的に蜀、呉、魏三国共損害らしい損害を被らずに蜀呉同盟と魏の戦争は幕切れとなった。

そしてそれから数週間たったある日蜀に魏から一通の書状が届く。内容は三国同盟の了承と五胡に対する話し合いを行いたいとの事。不思議な事に佐助と才蔵も一緒に参加する事を条件としていた。

「曹操は何で佐助さん達を参加させたいんすかね」

「まさか曹操さんも佐助君の魅力に気づいちゃったのかな。だめ、佐助君は参加させない」

「桃香それはないよ。俺と才蔵って事は五胡に忍びこでもらいたい  
か」

「忍びの意見を聞きたいか。そうだろ佐助」

「それが一番妥当だな。とりあえず会ってみない事には話が進まない  
いな」

「そうっすね。話し合いには桃香と私と佐助さん才蔵さんそれに恋  
がいくつす。残りの将は臨戦態勢をとっておくつすよ」  
この時俺達は予想もしていなかった第三の忍びがこの地に降りた事  
を。

### 三国話し合いの場

三国の当主、軍師、武将がお互いを警戒する重い空気の中で話し合い行われる。

「とりあえず魏としては、不可侵条約以外は希望はないわ」  
口火を切ったのは意外にも曹操であった。

「こないだ呉に侵略をしてきた人間の言葉とは思えないわね」  
孫策様が不機嫌な口調で話す。

「孫策さんやめよーよ。それで曹操さんは佐助君に何の用があるの？」

「孫策を暗殺しようとした男が殺されたわ。昼間に行軍中している最中にね」

男達は檻に入れていたし周りに兵も配置していたとの事。  
にもかかわらず誰にも気づかれずに男達は殺された。

これは犯人の魏対する挑発が二つ含まれている。

一つは魏の警備が馬鹿にしていると云う事。

もう一つはいつでも曹操を暗殺できると云う事。

それで俺と才蔵が呼ばれたんだな。

「それで曹操様檻の中には何か残っていませんか？」

「やっぱり佐助は話が早いくていいわね。五胡を倒したら魏に来ない？魏には可愛い娘が沢山いるわよ」  
それを聞いた桃香と黎が曹操様を睨み始めた。

「曹操様勘弁して下さいよ。そんな冗談を言っていると三国同盟ができませんので五胡に負けます」

「冗談じゃないかもよ。佐助これが何だかわかる？」  
そう言つて曹操様を取り出したのは

「おい佐助こいつは」  
それを見た才蔵の顔が強張る。

「ああ十字手裏剣。伊賀者が使う得物だ」

「知ってるようね。これを使ったのは貴男の友達かしら」

「確かにこれを使うのは俺達と同じ忍びですよ。ただし何回も殺し合った敵の忍びですがね」

「曹操の話を書く限り暗殺をしたのはかなり腕のたつ忍び。伊賀者の中でそれだけの腕があるのは一人しかいなえな」

思い当たる人物を頭で思い描いた俺と才蔵の顔がみるみる険しくなっていく。

「服部半蔵あいつしかいない」

幸村様がいた西軍に勝利した東軍の徳川の忍び

関ヶ原の合戦の裏で俺達と何度も死闘を繰り返した男、服部半蔵。

あいつもこつちに来たというのか？

「佐助君顔が怖いよー」

「桃香、悪いな。もし半蔵が五胡についたのなら俺も才蔵死ぬ気にならないとやばいんでな」

「佐助さん本当っすか？」

黎が涙目で詰め寄ってくる。

「忍び同士だと殺し合いにしかないかな」  
俺は力なく笑うのが精一杯だった。

五胡に潜む影（後書き）

ようやく佐助の五胡編がまとまりました。  
なんとかきちんと終わらせたい



佐助伝（前書き）

一応は佐助伝は一区切りとなります

## 佐助伝

三国同盟と五胡の戦いは熾烈を極めた。圧倒的な人数の五胡と長き戦いをへて一平卒までもが、かなりの実力となっていた三国同盟。しかしどの陣にも佐助の姿はなかった。

数日前

蜀軍議場

蜀の面々は佐助に呼び出されていた。

「服部半蔵から俺宛に果たし合いの手紙が届いた。俺はこれを請けようと思っている。遅かれ早かれ半蔵とは殺りあわなきゃいけないし丁度日付は五胡と戦う日にちを指定してきている」

「まっあちらさんは佐助の行動を制限したいんだろうよ。忍びとしちゃ目立ち過ぎたからな」

いつもの様に皮肉を言う才蔵の顔も強張り気味である。

「黎、桃香、節、月、恋お前達のお陰で俺は人間になれたよ、ありがとうな。月並みだが愛していたよ」

五人が席を立とうとした時には佐助は部屋から姿を消していた。

「泣くのは全部終わってからにしろよ。あいつはしぶといから大丈夫

夫だよ」

「蜀の將に命ず。五胡との戦いに負ければ我々は全てを失う。これまで命を落とした者の為、我が国民の為、そして自分の大切な者の為にこの戦必ず勝つぞ」

劉備こと桃香の言葉に将達は一斉に頷いた。

### 五胡の山奥

「よもやこの地で忍びに会えると思ってはいなかったぞ。また会えてうれしいぞ佐助」

「しばらく会わないうちに随分と下卑た顔になったな半蔵、勝者の余裕に浸りすぎじゃないのか」

「お前に何がわかる！忍びとしての活躍する場を失い老いてく体を見る虚しさを。技では越せない老いの恐怖を」

「何が老いだよ。皺もない奴が老いてなんだよ。それとどうやってここに来たんだ」

「島津から秀忠様に貢ぎ物があつてな。幸村の隠れていた庵から見つけたそうさ。幸村は死ぬまでこの小汚い銅鏡を大切にしているぞうだ」

半蔵の目が爛々と輝き始める。

「それを病状の俺の慰めにと見せてくれたんだよ。後はわかるだろ？ 気づいたら若い時の姿でこの世界にいたんだよ」

「徳川命のお前が五胡に従うとはね」

「お前と一緒にするな佐助。我は今も徳川の忠臣だ、あいつらは忍びの活躍の場を得るために利用しているんだよ」

「確かに一緒にされたくねえな」

その言葉を最後に二人の忍びは何度も何度も交差していった……

後の世に三国志と言われた時代。

三国を彩るは数多の乙女達。

その中で異彩を放つは遠き国より来たりし小さき男。

男は忍び、その技をもって三国の世を縦横無尽に駆け巡ったという。

### 三国志異聞 佐助伝序文

佐助三国の地に降りて五人の乙女と心を通わせる。

これが蜀の五銭家の始まりとなる。

王を司る劉の銭家。

智を司る閻の銭家。

武を司る呂の銭家。

商を司る王の銭家。

支を司る董の銭家。

五銭家互いに助け合い蜀を長く繁栄させる。

佐助伝五銭家の章抜粹

関ヶ原の合戦数日前

「幸村様我が軍に加勢したいと言つ者が見えます」

「我が名は劉佐、祖先佐助からの命にて蜀の五銭家は真田家に加勢致します」

t o b e e 戦姫武双

## 佐助伝（後書き）

佐助と黎達との再会は要望があれば書きたいです。

小説は好きだったが書く気持ちもなかった作者がこのサイトに出会い何となく書いた話も終了を迎えられました。

最初の頃の文はかなり恥ずかしい出来でした。

この駄文に付き合ってくれた皆様に感謝です

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1797t/>

---

真・恋姫 佐助忍伝～不器用な忍びと恋姫達～

2011年8月20日17時47分発行